あなたは笑ってくれますか？

猫海月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あなたは笑ってくれますか？

【Ｎコード】
Ｎ１９６３Ｗ

【作者名】
猫海月

【あらすじ】
浮気性の吸血鬼と一途で彼女のためならなんでも殺っちゃうぞ☆な少女がバカップルしたりする、殺伐ほのぼのラブ？ファンタジー
別話は
幽霊、人間、ちびっ子メイドで魔法使いを追う旅に出るというお話ですが、実態は割とグダグダでだらだら探してます
クラゲも出たり魔術師も出たり色々死んだり
さてさて、私にしては登場人物が多いけど全員残るかな？
嘘は何割？

狐って本当にお稲荷さん好きなんでしょうか（前書き）

間違って短編にしちゃったぜ！
初めましての方は初めまして
お久しぶりの人はお久しぶりです

連載始まりました～

近作…というか他全てですが世界観、キャラを他作品と共通してます
別に知らなくても問題はないと思います
ではでは

人物表

エウナ
吸血鬼　初代主人公　主人公の癖に色々不遇な立場

楓
巫女さん　元祖ヒロイン的な位置　死んだりメイドしたり死んだり
巫女したり

狐って本当にお稲荷さん好きなんでしょうか

「ボクが居なくても、あなたは笑っていてくれますか？」

月明かりの下、そういって彼女は微笑んだ。

□　□　□　□

目を覚ますと、目の前に狐のお面があった。
お腹のほうに軽い重量を感じることから考えると、どうやら馬乗りになられているらしい。

「…」

見詰め合うこと数秒、そのお面は何を思ったのか私の顔目掛けて降下してきた。

「っ！」

すかさずお面へと炸裂する黄金の右腕、もとい右ストレート。

「っー！っー！」

謎のお面は緩やかに吹き飛び、壁に頭をぶつけて声にならない様子で悶絶している。
というか今の飛び方、絶対重力無視してるよね！？何時からコイツは自然の摂理を無視するようになったのかしら？
とはいえ、窓のほうを見れば日は暮れており、何時までも布団の

中で惰眠を貪る気も無い。そもそも眠くないし。
身体を起して軽く身だしなみをチェック。服の乱れは無いし、どうやら襲われてはいないみたいね。

「ほら、さっさと演技はやめて起きたら？」
「…ばれてました？」
「ばれてました」

どう見てもわざとっぽかったし。

「ぶーぶー」

そういってそいつは立ち上がると、狐のお面を大切そうに壁へとひっかけた。…それ、私のなんだけど。

「おはようございます、エウナさん」
「今はこんばんわじゃない？まぁおはよう、楓」

楓は大人とも子供にも見えるような不思議な容姿に黒くて長い髪、そして何故か巫女服を着てニコニコと笑いかけてきている。

「ではではエウナさん」
「…」

そして彼女は私が立ち上がるのを見るや否や、両手をぐっと私の方へと差し出してきた。
始まる静寂。止まる時。何？整列？

「…なに？」
「おはようのぎゅー♪」

私はニコニコとした顔のまま手を出してくる楓。
ああ…なるほど。
そして私は彼女の元へと歩み寄ると、その細い身体を抱きしめた。

「ほらほらー、ぎゅー」
「ああっ！痛いです！だめぇ！折れる！大切なものが折れちゃう！」

その後も笑顔で万力の如く力を込めていくと、やがて楓から何かを砕くような嫌な感覚がしてぐったりと崩れ落ちた。
崩れ落ちた楓はそのまま首をぐるりと１８０度ほど回転して私の方を見ると、ぱくぱくと喋り始めた。

「もー！酷いじゃないですか！本体なら死んでましたよ？」
「…お願いだからソレで喋るのやめてくれない？」

腰が砕け、首だけ回転してる人型が喋っている様子は、はっきり言ってめちゃくちゃ気持ち悪い。

「腰砕いたのエウナさんじゃないですか！きちんと痛みは伝わるんですからね！」

そういうと、楓からしゅわしゅわと煙が出てきた。後に残ったのは人の形をした紙切れのみ。
その様子を最後まで見届けずに扉を開けると、そこには先ほどまで私の前に居た巫女服に
赤いコートの少女が座っていた。

「何してるの？」

「こ、腰が痛くて立てないんですよ」
「そう、お大事にね」
地面に倒れる赤いコートに声を掛けると、そのままリビングのほうへと歩き始める。
「そんな！助けてくださいよー…」
後ろから聞こえてくる声は聞こえなかったことにして、さっさと行こう。

□　□　□　□

元々家具の少ないリビングに置かれたソファに座っていると、廊下の方から何かを引きずる様な音が聞こえてくる。
時と場合によってはホラーにも見えるけれど、音の発生源は判りきっているし怖がることじゃない。
「うーらーめーしーやー…」
「あ、来たなら紅茶お願いね」
「ぶーぶー！」
楓はしばらくの間びったんばったんと騒いでいたが、やがて疲れたのかのそのそと動き始めた。
見るに耐えなくなって目を逸らした場所にある、大きな一枚窓からは月明かりが差し込んできて、とても幻想的。
「紅茶の温度は熱帯魚ー♪」

台所から意味不明の歌が聞こえてくるけど、聞かなかったことにしよう…。
テレビも付けれないのでそのままぼーっと待つこと数分、湯気の立ち上るカップを二つ持った楓が戻ってきた。

「腰は平気？」
「ふっ…じこしゅーふくきのうを身につけたボクにとってこの程度の痛み！愛にしかなりません！」
「そう、紅茶ありがとね」
「ぶーぶー！」

ぶーたられるのは本日何度目かしらね？
とはいえ、子供と面倒事は放置しておくに限る。

「子供じゃないもん！」
「…」

ぷっぷくぷーと膨らんでいく楓爆弾。私的には爆発までの秒読みが始まってないことを切に祈りたいところ。
とはいえ、そんなバカなやり取りをしている間にも紅茶は冷めていく。美味しい間に飲んで上げるのがせめてもの手向け何だけど…。

「ねぇ楓？」
「んー？」
「紅茶に何か入れた？」
「何も入れてないですヨー？」
「…そう」

どうして目を逸らすのかしらねー？

とはいえ、本人が何も入れてないと言うのだからこれ以上の追求は無駄でしょう。
カップに手を伸ばす。楓が逸らしていた視線を私のカップへと向けた。
匂いは…変わらない。そんな初歩的なミスはしていない様子。
中身の紅茶に口をつけると、楓の目が輝いたように見えた。その輝きは…まるで悪戯が成功した子供のよう。

「んんっ！？」

なので、とっさにカップから口を離すと楓にキスをする。そのまま舌を使いながらゆっくりと、溢さないように紅茶を口の中へと移動させれば、楓は目を白黒させながらも受け入れた。
口を離すと、月明かりに銀色の糸が二人を繋いだ。

「…いきなりですね」
「あら、きちんとした方がよかった？」

そのまま見詰め合って沈黙する。やがて、赤い顔の楓がこくりと頷いたのを確認してから、抱きしめるとキスをする。今度はさっきよりも長く、ゆっくりと。

「満足した？」
「はぃ…」

彼女からしてくるかすかな血の匂いに意識が惑わされそうになったので、ゆっくりと身体を離す。
それにしても…おかしいわね。
とろん、と蕩けた様な表情の楓を見つめながら一人首をかしげる。
薬が入ってると踏んだのだけれど、時間が経っても見た感じに変

化は出ない。後考えられることがあるとしたら吸血鬼限定の薬だけど…そんなものがあるって言うのは聞いた事は無い。元から薬が入っていないという可能性は断じて考えていない！

「ねぇ、楓？」
「んー…？」
「紅茶に何入れたの？」

逃げないように片手で抱きしめながら聞くと、何処か夢現だった楓の眼に光が戻ってきた。

「それは言えないですね！」
「へぇ、入れた事は否定しないのね？」
「あ…」

悪戯がばれた子供の様な顔をした楓に優しく微笑みかけると、彼女もまた全力で誤魔化すかの様な笑顔をした。
すかさず放たれる黄金の右腕。すなわちアッパー。
しかし彼女は素早く私の拘束から逃れると、人とは思えない速度で後ろに倒れこんで回避した。
リビングの中に何かが頭をぶつけた鈍い音と腰を痛めたかの様な嫌な音が響く。

「っー！っー！」

声にならない様子で腰を抑えながら地面を転げまわる楓。痛いのはぶつけた頭か…それとも腰か…。
そんな彼女を冷めた視線で見下ろしていると、ふと違和感に気付いた。
よく見れば、彼女の頭の上には黄金色の何かふさふさとした物が

生えている様に見える。
やがて楓も自身の身体に起こった違和感に気付いたのか、ぴたりと動きを止めると頭と腰に手をやっている。
これは…どう見ても耳よね？ソレも狐の。いや、狐と犬の違いとか良くわかんないけれど。

「かえ…で？ソレ…？」
「そんな…」
「戻し方は？」
「そんなものあったらエウナさんに生やせないじゃないですか！」

叫んだ拍子にまた腰が痛くなったのか、びったんばったんと暴れているが今のを聞いて助ける気にはならないわね。
…とはいえ、そのふさふさの耳には興味が沸いて来る。でも素直に助けるのは何だか嫌だ。
そこでふと、私の頭に妙案が閃いた。

「ほわ！？」

私は素早く楓の視界の外へと消えると、その身体を後ろから捕まえて持ち上げて、ソファへと向かう。

「…コレはどういうことですか？」
「まぁまぁ」
「んー…」

私の膝の上で不満そうにしている楓を宥めながら片手で頭を撫でると、彼女は気持ちよさそうに声を漏らした。

「…じゃないです！どうしてボクを乗っけてるんですか！」

「まぁいいじゃない！」
「よーくーなーいー！」
はーなーせー！と騒いでいる楓を抑えながらも頭を撫でる。
「ところであなた、怪我でもしてるの？」
「んー？してないですよ？」
「…そう」
彼女から発せられる血の匂いに思わず食指が動きそうになるが、何とか我慢する。
「食べたいんですか？」
「…コレでも吸血鬼だからね」
「いいですよ？」
彼女のうなじから覗く白い首はとても美味しそうで…。
「…いえ、やめとくわ」
「ふむふむ」
流されそうになる理性を何とか抑える。コレでも好きなものは最後に食べるタイプなの。
「エウナさんエウナさん」
「んー…？」
「月が綺麗ですね」
「ええ、本当にね」
そのまましばらく、彼女の冷たさや柔らかさを感じていると急に

眠気が襲ってきた。

「エウナさん？眠いんですか？」

楓に返事をしようとするも意識は段々と闇に塗りつぶされていく。

「おやすみなさい、せめて幸せな夢を…」

楓からした声を最後に私の意識は途切れた。

狐って本当にお稲荷さん好きなんでしょうか（後書き）

はい、とりあえず1話です

だらだらとやっていきますが、最後までお付き合い頂けたら感無量です

今度こそ完結させるさ！

ではでは、少しでも楽しんでいただけたら幸いです

大切な場所（前書き）

第2話です
ちなみに3話目からはそんなに早く書けない！

人物表
エウナ
吸血鬼　ヘタレの称号を獲得するのは主人公の特権ですよね！？

楓
巫女さん　話をややこしくすることに定評のあるヒロイン的立ち位置な人

ミツキ
クラゲです　少し変でもクラゲです　女の子になれるけどクラゲです

アリス・イン・ワンダーランド
魔術師　恋人は女の子　本人も女の子

大切な場所

「エウナさんは別の世界に行ってみたいとか思ったことありますか？」

「何？ついに成仏したくなったの？」

「いえいえ、ここまで来たらそう簡単に成仏しないですよー。あ、ソレ取ってください」

「ソレってドレよ。私は現状のままで満足かしらね…何よその顔、文句あるの？」

□　□　□　□

庭に面している大きな一枚窓から月明かりが差し込む部屋の中に、私がページをめくる音だけが静かに響く。幸い、起きたときにはすでに楓はいなかったから、この静かな時間を精一杯満喫することにしましょう。

そう決めると『不思議の国のアリス』のページをまた一枚とめくる。

それにしてもこの本、ギャグなのかジョークなのかよくわからない言い回しが多い気がする。…何か楽しみ方でもあるのかしらね？

とはいえ、今日は満月。些細なことは気にせずに海の様に広く谷の様に深い心持で気にしないことにしましょう。

そう決めてからテーブルの上にセットされていた紅茶を飲んで一息入れていると、窓から差し込む月明かりが昼間の如く明るくなり、ガラスの砕ける音が辺りに響き渡った。そして視界の端からこちら目掛けて突っ込んで来た黒く大きな影。

そのままそいつは、速度を落とすこともなく私を殴り飛ばしてきた。

とっさの判断で不完全ながら受身だけは取ろうと身体を捻らせると、私がぶつかった食器棚から食器が落ちて割れる音が何処か遠くから聞こえてくる。
肋骨が数本折れたのか少し呼吸が苦しい中、突然の突っ込んでくるや否や殴り飛ばしてきた素敵な来訪者のことを観察する。
警戒する様にこちらを見ているそいつは、同じく図太い図体に付いた太い手足、そして爪に尻尾に牙に翼と、何処かで見たことあるような形。
というより、どう見ても竜なんだけど…家の修理費は誰が払うのかしらね？
私が竜を一体売るといくらになるのか考えていると、そのでかい図体の後ろから今にも火を噴きそうな細いヘビみたいな竜が見えた。それはもう、口から少し漏れるくらいに発射数秒前。
どうやら窓ガラスを壊したのはあっちみたいね…。とはいえ、さほど広くは無い家の中、さらに後ろにあるのは台所に倒れた食器棚。アレの威力はわからないけれど、ぶち込まれたらそうそう避けれる物でもないでしょう。
ということで全速力で前へと走り、強行突破を狙うことにする。
私はでかい竜がなぎ払う様にして振った爪をかがんで避けると、すれ違い様に回転を加えた裏拳を叩き込む。
鈍い手ごたえの中、庭のほうを見れば、竜の真上から奇襲を掛けた楓がこちらに撃たれるはずだった炎弾で迎撃されているのが見える。
私はそのまま速度は落とさずに庭先まで走りこむと、吹き飛んでいる楓を捕まえながらその場から飛び去った。

□　□　□　□

遠く眼下に街の明かりが見える頃、もう大丈夫でしょうと結論付けると飛ぶ速度を落とす。変なのに絡まれた上に、飛ぶのは苦手だから余計に疲れた…。

「…大丈夫？」

「とっさに防ぎましたけど、骨が数本やられました。上に目でもあるんですかね？アレ」

「そんな奇妙な生物には見えなかったけれど…というより骨が折れてるなら、そんなに力入れないほうがいいんじゃない？」

「エウナさんへの愛のぱわーで傷も治る治るー」

「…」

お姫様抱っこの格好になっている楓聞くと、彼女は嬉しそうに狐耳をぴくぴくと動かしながら血の香りをする身体を押し付けてきた。そして、傷が痛むのか少しだけ顔をしかめた。

傷が治るどころか深くなってる気がするのだけれど…もしも彼女が抱きつくのをやめると、こちらの手間が余計に掛かることになるので何も言わないことにする。

「夜風は…寒いですね」

「ええ、そうね」

生ぬるい風が私のドレスと楓の赤いコートを軽く揺らし、もうすぐ熱気の終わりを知らせてくる。

「ところで、これからどうする？」

「ん、んー…とりあえずほとぼりが冷めるまで街外れの森にでも行きましょうか」

「そうねー」

そう決めるとだらだらと方向を修正する。
何故襲われたのかも判らず逃げる日々。惨めね…。

「愛の逃避行ですね」
「…」

いっそ落として全てなかったことにしてしまおうか？
その考えを実行に移そうか真剣に悩んでいると、私の真横をついさっき見たことあるような炎弾が通過していった。
後ろを見ると、これまたどこかで見たような大きいのと細いのが追ってきており、竜の影から銀色の髪がちらりと見えた。

「ちょっと！まだ追ってくるの！？」
「わお、意外としつこい人なんですね」
「あんた魔法使いでしょ？何とかしなさいよ！」
「無理ですよー…向こうは本職の魔術師なんですから…」
「ん…？」

楓の言葉に少しだけ疑問が出来たが、びゅんびゅんと後ろから飛んでくる弾に意識を持ってかれて消え去った。

「エウナさんこそ何か出来ないんですか！真後ろから直撃コース２発！」
「地に足付かないと安定した暮らしは遅れないのよ！」
「幸せ家族計画ですね！フェイント１発進路そのまま！」
「私は子供は嫌いよ！」
「嫌よ嫌よも好きのうちですか！エウナさんが望むなら私…！３発下に回避！」
「突き落とすわよ！」

二人とも何を言っているかもわからない中、避けたと思った炎弾の1つが私の真上で爆発した。

「しまっ…」

抵抗する間もなく、私たちは爆発に巻き込まれ落ちていく。

□　□　□　□

目を覚ますと方足に激痛が走った。見ると変な方向に曲がっており、どう見ても折れてる。

とりあえずコレでは歩けないので、折れてる足を両腕で持ち力と気合を込める。

「っ！」

とりあえずまっすぐに戻した足がくっつくまで動きようが無いので辺りを見渡すと、どうやら森の中に落ちたらしい。どうやら気を失った時間は長くない様子。

高さの割に傷が浅いのは木々がクッションにでもなったのか。

そこでやけに静かなことに気付き、慌てて楓の姿を探すが見える範囲にはいない。

まだ鈍痛がする足で辺りを探すと、そこには地面に倒れている楓が居た。

「楓！？」

「エウナさん…？えへへ…ちょっと…歩けそうに…ないです」

浅い呼吸を繰り返しながらも微笑む楓の手は変な方向に曲がっており、胸に刺さった枝が赤黒いコートの中で巫女服を赤く染めているのが見える。
とにかく夜の森は拙い。安全なところに行かないと何が出るかわかったものじゃない。

「エウナさん…近くに教会があるので…そこまで運んで行って…くれませんか？」
「ええ…」

なるべく衝撃を与えないようにしながら、彼女が指し示す方向へと歩いていくと、古ぼけた教会が見えた。
扉を開けると古ぼけた机やイスは端のほうに積まれており、教壇らしき物と大きな十字架が見える。
それにしても…私が教会に逃げ込む日が来るとは…ね。

「付いたわよ」

ちょうど中央辺りに楓を下ろすと、彼女は閉じている目を開けて微笑んだ。

「枝…抜いてくれます？」
「…いいの？」
「そっちのほうが…治りが遅くなるじゃないですか…」
「…」

彼女の言うとおりにずぶずぶと枝を抜くと、そこから赤黒い血が溢れ出てくる。

「ありがとう…ございます…」

彼女がそう言った時、教会内に微かな風が吹いた。扉は閉まっておりここで風が吹くはずは無いのに。

「コレは…？」

「ばれた…見たいですね…ミツ…キ…！」

楓がそう言うと、ふよふよと何処からかクラゲが飛んできた。クラゲは2、3ほど触手を動かして楓の身体を触った後、ゆっくりと上へと飛んでいった。

「まったく…」

楓はクラゲの方も見ずにゆっくりと立ち上がるとペンダントを振って短刀にし、呟いた。

「世知辛い世の中です」

突如ドアが吹き飛んで炎弾が迫ってくるが、炎弾は私たちに当たる前に見えない壁の様な物にぶつかり爆発した。

そして私はその爆風から突っ込んできた大きな影を殴り飛ばす。後ろでは炎弾が何度も爆発する音が響く中、追撃を入れるために駆け出す。

竜が繰り出してきた尻尾を片手で受け止めながら、その腹に拳を叩きこむ。尻尾を受け止めた骨がミシリ、と鳴る音と何かを砕く手ごたえ。

「エウナ…さん…！」

楓の声に反応して後ろへと下がるが、炎弾はすぐ近くまで迫って

きており爆発した。何とか直撃は逃れるも吹き飛ばされる。
すぐさま近づいてきた竜の腕を受け取めると、そのままお互いに動けなくなった。
とはいえ…馬鹿力を負傷した腕で受け止め続けるのは…結構辛いわね。
頼みの綱である楓の方では未だに炎弾が止んでおらず、見るからにふらふらとし始めて今にも倒れそうな様子。
すると突如弾は止み、ドアから銀色の髪が走り込んできた。
見た目はワンピースを着た少女といった所だけれど、手に杖を持って銀色の髪をなびかせているその顔は何処かで見たことあるような…。

「くっ…！」

少し気を抜いた瞬間に目の前の竜の爪が迫ってきたので力を入れ直す。
銀色の少女は楓まで一直線に走りぬくと、振り下ろされる短刀を下から杖で弾いてそのまま叩き付けた。

「楓！」

カランカランと弾かれた短刀が鳴る中、私の横目では細い竜がこちらへと炎を吐こうとしている様子が見える。
しかし、どうせ貰うなら相打ちまで持っていこうと思った瞬間、目の前の竜がゆっくりと崩れ落ちるのが見えた。
その後ろからは刀を突き刺している水色の髪の少女が見える。

『ロック…我が名の下に命ずる』

巨体に潰れそうになっている間、小さく呟くような声が聞こえて

きたような気がしたかと思うと、細い竜は結界の中で自爆していた。
そして、倒れていた楓は銀色の少女に馬乗りになってその細い首を絞めており、このままだと確実に殺すでしょう。

「楓！ダメ！」

私は叫ぶと倒れこんでくる巨体をどけて彼女へと駆け寄り、その冷たい身体を抱きしめる。

「もう大丈夫だから…だから帰って来なさい…」

荒い呼吸を繰り返している彼女を抱きしめて何度か囁くと、呼吸が少しずつ穏やかになって崩れ落ちる様にして眠りについた。

「まだ生きてる？」

楓をゆっくりと寝かせてから、動かない少女へと問いかける。
少女は銀色の長い髪に薄い藍色のワンピースを着ていて、こうしてみると探せばいそうな不思議な子にしか見えない。

「…殺さないんですね」
「その話は追々するとして…今は火を付けましょうか」

どうやら生きていることを確認すると立ち上がる。

「…寒いでしょう？」

□ □ □ □

ぱちぱちと廃材が燃える音が響く。火はミツキが付けた。決して摩擦で起そうとか花火で付けようとかの挑戦はしていない。
そしてミツキは火をつけた後またクラゲの姿になると、ふよふよとどこかに飛んでいった。

「…それで、どうして生かしたんですか？」

しばらくの間、燃えている焚き火を見つめていると少女が言った。

「まるで生きてることが不満みたいな言い方ね」
「もしも晩御飯になるのが理由なら、生きてるのは嫌ですから」
「ふーん…」

そういう捉え方もあるのか。というより、そういう捉え方が出来る様な経験をしたことあるのね、この子。

「まぁ、食べるつもりは無いわよ。生かしたのはただ答えて欲しい事があるから」
「答えたら別世界までの片道切符の発行ですか？」
「それは答え次第ね」

すると、彼女はくすくすと笑った。

「いいですねー。
私が答えれることで良ければ答えましょう」
「そう、それじゃ早速…何で私たちを襲ったの？」
「…」
「…」

私がそう聞くと、彼女は何処か上の方を見たりして落ち着かなくなった。

「…えーと」

「どうかした？」

ものすごく微妙な空気が流れる中、焚き火のぱちぱちとした音だけが響く。

「えーと…ですね…その…」

視線を合わせようとせずにちらちらとこちらを見てどうも忙しない。その様子はまるで怒られそうな子供の様。

「何よ、怒らないから言ってみなさい」

「その…あの家が大切な人の家でして…それで…勝手に住まれてて少し頭に血が上ったと言いますか…その…ごめんなさい」

そしておどおどと上目遣いでこちらを見てくる。

…つまり、そういうことね。

私がゆらりと立ち上がると、何を思ったのか彼女はビクッと体を震わせた。

しかしそのまま楓の元まで行き、ゆっくりとその体を持ち上げる。

「ねぇ楓？」

「…」

眠った振りを続ける楓に優しく語り掛ける。

「あそこ見つけたのあなただったわよね…知ってたの？」

「…」
「何も答えないって事は勝手に解釈していいってことよね…？」
「…シ、シラナイヨ」
「本当に？」
「…ホ、ホントダヨ」
「…」
「…」

ゆっくりと楓の足を焚き火に近づける。

「熱！熱いです！燃えちゃう！こげちゃいます！」
「知ってたの？」
「ダメ！ミディアムになっちゃいます！」
「答えて欲しいなー？」
「答えます！答えますから！」

楓を降ろすと、ばたばたと靴を脱いで素足になった。

「…怒らない？」
「怒る…でも言わないともっと怒る」
「…し、知ってました」
「そう…」

私は静かに呟いて彼女の体を抱えると、そのまま投げ飛ばす。

「知ってたのなら最初から言いなさいよ！」
「あーれー」

ゆっくりと地面に落ちてからわざとらしくぴくぴくと動く楓を尻目に、少女へと向き合う。

「知らないこととはいえ、悪い事したわね」
「…怒らないんですか？」
「結果として誰も死んでないんだし、別にいいんじゃない？」
私がそういって笑うと、彼女は少しだけ悲しそうな顔をした。
「…お人好しなんですね」
「ええ、昔言われた…わ？」
『エウナさんはお人好しですねー…』
突然誰かの声が聞こえたかと思うと、軽い頭痛に襲われ思わず頭を抑える。
誰…だっけ？
「どうかしましたか？」
私の目の前で銀髪の少女が首をかしげている。
「いえ…ねぇ、私たちって何処か出会ったことある？」
「会ったこと…ですか？」
んー、と考えている彼女を見ている間も頭痛は収まらない。
「たぶん無いと思いますよ？」
「…そう」
それじゃ、あの声は…何？
「エウナさん…」

声がする方を見ると楓が真剣そうな顔をしている。

「…ボクがこっそり混ぜたクマさんパンツ、履いたならちゃんと見せてくれないとダメじゃないですか！」

夜の教会に打撃音が響き渡った。

「…」

「あ、あのー…？」

「…何？」

「ひっ！」

彼女を横目で見ると、怯える小動物みたいな顔をされて少しへこんだ。

「も、もしよろしければ…家に来ませんか？」

「…いいの？」

「はい、私的にはあの家にさえ居て貰わなければ構いませんから…それに」

彼女はそこで切ると床で沈黙している楓のほうを見つめる。

「聞きたい事も…ありますから…」

その時の彼女は、何故だかとても幻想的に見える。

…そういえば、名前なんて言うのかしらね？

□　□　□　□

「ねぇ楓？」
「んー？」
「私たちの他に誰か一緒に暮らしてなかった？」
「んー…」

引越しのための荷造りから顔を少しだけ顔を上げて楓の方を見ると、彼女は少しだけ目を伏せた気がしたけど、すぐにいつもの笑顔に戻った。

「きっと勘違いですよ」
「…そう」

その後、二人とも会話もなく黙々と荷造りをする中で、彼女が目を伏せた時に見せた表情が少しだけ気になった。

大切な場所（後書き）

バトル回っぽいのだよ！

関係ないですが後書きに書くことが思いつかない！

ということで少しでも楽しんでいただけたら幸いです

くるくる回ってすってんてん（前書き）

小さい猫がにゃーにゃー鳴いてる夢を見た。
片手で持ち上げながら撫でると猫パンチしたり目を細めたりしてとても可愛かった。
目を覚ますとそこには片手じゃ持てないほどまん丸太った毛玉がいた。

毛玉「餌まだ？」

人物表
エウナ
吸血鬼　金髪ロング　ドレス　記憶力皆無

楓
魔法使い　長い黒髪を後ろで束ねる　赤いコートの巫女さん　第1話で名前を間違えられました

アリス・イン・ワンダーランド
魔術師　銀髪ロング　わんぴーす　恋人は女の子　本人も女の子

ミツキ
クラゲ　ミズクラゲ　そういえば詳細設定一番不明ですよね

くるくる回ってすってんてん

「そういえばあなたって喋れないの？」
（ふるふる）
「ふーん、喋れないわけじゃないんだ」
（…こくん）
「…」
（…）
「…喋りたくないならソレでもいいけど、色々と不便じゃない？」
（ふるふる）
「まぁ、あなたがそれでいいならいいけど…というより、あなたと話してると独り言みたいね」
（…）
「そんな困ったような顔しないで。ほら、乾杯しましょう」

カチン。

□　□　□　□

雲の間から差し込む月明かりが照らす草原を、二人の少女がくるくると回っている。片方は赤色、もう片方は水色の少女たちは優雅に近づいたり離れたりを繰り返しており、まるで二人でダンスを踊っているよう。

しかし少女たちの手には、長さこそ違えどそれぞれ刃の付いた獲物があり、そうしてみると優雅な踊りも殺伐としてくるわね。巫女服を着た方の子は動きの中に打撃も織り交ぜているから、余計に。

そんな光景を肴にしながら一人ワインを飲んでいると、軽い衝撃と共にやわっこいものがが背中に襲い掛かってきた。

そしてその衝撃の元凶は離れるどころか、前へと腕を回して来て離れる気がないことを無言で伝えてくる。

「…何してるの？」

「んー、抱き心地が良いかどうか気になったもので…意外と暖かいんですね」

衝撃でずれた位置をお面を直しながら、サラサラと肩に掛かって来る銀髪へと問いかけてみるも、当然ながら返事は私の頭の後ろから来た。髪が返事したら怖いけど。

「で、どう？」

「ルカさんの方が良いですねー」

「…」

誰よ、それ。

私が未知なる誰かに負けたことについて考えている間も、アリスは私の背中から離れずに抱きついたままだった。それにしても軽いわね。

「あなたちゃんと食べてるの？」

「…」

「…もしもし？」

「ん？んー…？ちゃんと食べてますよ？」

…今寝てなかった？

とはいえ、きちんと食べてるのに子供みたいな体にしかならなかったのね。

「む、なにやら失礼な事考えてません？」

「気のせいよ。そういえば仕事は終わったの？」

このまま追求されると苦しくなりそうなので、視線を髪から戦ってる楓たちの方へと向けると話題を振る。い、今楓と目が合ったような…。

「まだですけど、後は待つだけですからねー」
「へぇ、随分と雑なのね」
「最近の生態調査なんてそんなものですよ。探知魔法使って待つだけー」
「ふうん…」

頭の上にぐりぐりと押し付けられるあごを感じながらワインを注ごうとすると、突然横から伸びた手がボトルを取り去っていった。

「手酌は出世できませんよ」
「…何に出世するのよ」
「んー…魔王ですかね？」
「それなら出世できなくて良いわね。あなたもどう？」
「私はいいです。お酒呑めないので」
「そう…」

とくとくと目の前で告がれていくワインに気を使いながら問いかけてみるも、返ってきたのはつれない返事。いい加減一人で呑むのも寂しくなってきたのだけれど、しょうがない。
再びグラスに満たされたワインは赤黒い色をしており、まるで血のよう。そういえばパンは肉らしいけど、ワインは水か血かどっちだっけ？
ぼーっとどうでも良いことを考えていると、楓が短刀を弾かれ、戦いが決した様子が見えた。雲の切れ間から差し込む月明かりを受

け、銀色に輝いた短刀がくるくると回って飛んでいく。

「何者なんでしょうね？」

その様子を眺めていたら頭の上から声がした。

「…どっちが？」

「えーと…」

視線の先で、今度は2メートルほどはあるムキムキな石像が本人たちの代わりに戦っている。ただし、片方の像は下半身しかないしもう片方は上半身しかないので、その戦いはとてもシュール。というか知らない人が見たら黙って目を逸らす光景。

「ク、クラゲさんの方です」

「ああ、あっち」

下半身側の少女…名前なんだっけ？は謎の石像対決が始まるや否や、少女の姿をやめて普段のクラゲへと戻っていた。

「そういえばアレって何なのかしらね…楓の使い魔じゃないの？」

気が付いたら居たような気がするし。

「使い魔じゃなさそうですが…それよりもエウナさん知らなかったんですか！？」

「知らないわね…そんなに変なの？アレ」

見れば下半身が己の機動力を生かして上半身の後ろを取り、執拗に蹴りを入れている。上半身は何とか腕を回して対抗しようとする

も、悲しいことに足がないから移動すらも上手くできていない。どう見ても勝負にはならない光景なのだけど…何で上と下で２つに分けたのかしらね？
しかし下半身側も蹴りを入れるたびに軽く飛び跳ねて居るのは衝撃が強いのか、それとも痛いのか…どちらにしても意味不明な戦いであることに変わりは無いでしょうけど。

「…あなたの竜も同じ様なものじゃない」
「あの子達と一緒にしないでくださいよ！」

余りにも見てられないので空を眺めながら呟くと、悲しいことに聞こえたのか、アリスがぽこぽこと頭を叩いてくる。別に痛くは無いけれど、衝撃でお面がずれるずれる、ワインが零れる零れる。

「わかった、わかったから叩くのをやめなさい。投げるわよ？」
「魔法にも出来ること出来ないことがあるんです」

頭上からの襲撃も止むと、地へと散っていった儚きワインたちの補給をしながらアリスが言った。

「そうなの？」
「はい、それぞれちゃんと制約があってその制約の範囲内の事しか出来ません。簡単に言うと、水辺の近くで火を使うのはかなり難しいです。
クラゲさんみたいに自由に姿かたちを変えたり出来るというのは…見たことも聞いたことも無いですね」
「つまり？」
「禁術、もしくは古代魔術ってことです」
「…」

…あのクラゲってかなりすごかったのね。というかアレはクラゲなのか人なのか

「…魔法って便利そうに聞こえるけど、意外と不便なのね」

「まぁ…何でも出切るわけじゃないですが選択肢が増えるのは良いことですよ。こういう仕事の時とか、焚き火するときとかも便利ですし。

要は使い方次第ですよ使い方」

背後例の如く後ろにへばりつく魔術師はそう結論付けると、また私の頭の上にあごを乗せて全てをゆだねる体勢。少し熱気の残る夜の上、後ろに体温上昇要因がいるのでたまに吹くそよ風が心地よい。

ふと、先ほどの戦いの続きを見れば上半身が体ごと腕を回転させて空へと飛び去り、下半身はその脚力でジャンプを繰り返し白熱した空中戦を繰り広げていた。

「・・・アレは魔法なの？」

「・・・どうなんでしょうね」

雲の間から覗く星空に舞う、片方は上半身だけ、もう片方は下半身だけの2つの筋肉。飛び散る石片、絶え間なく続く岩と岩がぶつかる音。華々しく両腕を回して天高く上っていく上半身の姿は、何処か輝いているようにも見える。そのまま墜落して地獄にまで落ちろ。

「そういえばアリス？私のドレスの洗濯のことなんだけど・・・」

「そろそろ休憩も止めにして働きに行かないと！」

アリスはわざとらしくそう言うと、私の話を最期まで聞かずに走り去っていった。

・・・逃げたわね。

□　□　□　□

「えーうーなーさーんー」

ようかいみこがあらわれた。

「つーかーれーたー」

ようかいみこのだきつき、わたしはつかまってしまった。

「つーかーれーたーのー！」

「・・・」

楓は私の腿の上で同じ言葉を連呼している。むしろ憑かれたのは私の方なんだけど。

それにしても、一体私に何を求めてここに来てるのかしらね？生憎と疲れを癒す方法は全く知らないのだけれど。

「ワイン飲む？」

「ちゅー？」

うん、全て無かったことにしようそうしよう。

そう結論付けると片手で彼女のほっぺを伸ばして遊ぶ。おおー、まるで餅みたい。

「いひゃい、いひゃいです」

そうしてしばらくの感触を堪能していると、やがて捕まっていた手を話して抵抗し始めたので渋々手を離す。

「むー、伸びてないですか？」
「よく伸びる良い子に育ちなさい」
「慎ましい淑女に私はなりたいです」
「それは・・・難しそうね」
「何で何でー！」

寝転がったままびったんばったんと暴れだす楓。そういうとこを直さない限り淑女はありえないでしょうね。

「そういえばあのクラゲは？」
「ミツキですか？あの子なら飛んでった石像を探すとかで何処か行きましたよ」
「・・・アレって探さないといけないものなの？」
「後始末はしっかりするように言われてるらしいです」
「・・・そう」

ホント、変なところで律儀なクラゲね。

「そういえばアリスさんはまだお仕事？」
「あー・・・アリスね・・・」

そこで切るとアリスが去っていった森のほうをチラリと見る。

「アリスならほとぼりが冷めるまで森の中で大人しくしてるんじゃない？」
「それはそれは・・・世知辛い世の中ですね」

「ええ、ホントにね」

ワインの染みは取り辛いし、この服どうしようかな。

そうこうしてる間に眠くなってきたのか、楓はうとうとと目を閉じ始めた。

「眠いの？」

「んぅ・・・」

眠たそうにしている彼女の頭を撫でれば、黄金色の耳がぴくぴくと動いて少し面白い。

しばらく月と雲と星空景色を肴にワインを飲んでいると、下から微かな呟きが聞こえてきた。

「森の中で・・・綺麗な人を・・・見たんですよ・・・」

目を向けると寝ぼけているのか、楓は誰かに向かって話しかけるように言っている。

「金髪の・・・綺麗な人でした・・・」

「そう」

私はぽつりぽつりと呟かれる言葉に相槌を打ちながら、一人空を見上げる。

「いつか村を出たら・・・色々見て回るの楽しみですね・・・」

聞きなれない名前に反応して彼女の方を見ると、目じりから水滴が流れ落ちるのが見える。

その何かを指先で軽く拭うと、突然楓は目を覚ました。

「・・・？」
「良い夢は見れた？」
「氷華・・・ちゃん？」

ふふ、まだ寝ぼけてるのね？この子は。

「あ・・・」
「んー？どうかした？」
「え、えへへー・・・」

私がにっこりと微笑みかけると、楓も引き攣った笑顔で応えた。

「ねぇ楓？」
「な、何ですか？エウナさん」
「だーれと間違えたのかしらー？」
「なな、何のことでしょう？」

目が泳いでるわよ？
どうやらシラを切る様子なので涙を拭った手を反転、全力で楓の頬を突付く。・・・おお、これは意外と癖になりそうな感触。

「さ、刺さっちゃいます！刺さってますって！」

そのままつんつんぷにぷにとしていると、本格的に楓が暴れ始め、私たちの間で静かな戦いが始まった。
でも噛み付かれて指先の危機を感じたので数秒後には終戦した。
・・・何でこうなったんだっけ？

「ねーねー、エウナさん」

「ん・・・？」

こうなる経緯を思い出そうとするにも、思い出せるのは楓のもち肌のみ。・・・今度機会があったらまた狙ってみよう。

「目覚めのちゅーは？」

「地面としたい？」

「ぶーぶー」

天使の如き微笑で返すも徐々に膨れていく楓の頬。・・・はぁ、しょうがないわね。

私は一つため息を付くと周りに人影が無いか見渡し、そっと彼女へと顔を近づけた。

□　□　□　□

暗い森の木の陰で、その一部始終を見つめている少女がいた。

少女は長い銀色の髪に藍色のワンピースを着ており、木の陰でぶつぶつと何かをいっている姿はとても怪しく見える。

「パ、パル・・・いえコレは拙いですね・・・それにしても妬まし・・・」

とても、怪しく見える。

「ダメです私！山田たいちょーも言ってたじゃないですか！」

アリスは自身を鼓舞するようにして一人呟く。ちなみに、とても

怪しく見える彼女だが、幸い周りに人はいない。
実際に彼女の目の前では黒い帽子にマスク、そしてコートという怪しさ大爆発の男がいた。周りに人はいないが、別にいても彼女の幻想なのでかまうことは無いだろう。

『いいかい？アリス君、一度でもバカップルを経験したものは、他のバカップルを妬んではいけないよ？』

静かに諭すように変態は言う。
しかしソレもつかの間、変態の横から黒髪美人の女性が現れて状況は一変する。

『山田様、どうかなさいましたか？』
『おお山口君！実はアリス君に人間性の何たるかを説いているところでね』
『まぁ、さすが山田様です』
『ハッハッハそうでもないよ』

少女の目の前で展開されるのろけ、持つものと持たざるものとの差が今ここに明確に現れる。

「バカップル爆発しろ！」

ついにアリスの堪忍袋の尾も切れ、幻想相手に石を投げつける始末。しかし効いたのか、幻想の中のバカップルは何処かへと消えていった。

「私だって・・・私だって・・・」

一人呟くアリスの肩を叩くものがあった。

アリスがそちらを見ると、そこに居たのは宙に浮くミズクラゲ。

「あなたも・・・なんですか？」

悲しそうに触手を振るクラゲを見た瞬間、二人？は意気投合し、クラゲの持っていた酒瓶で乾杯となった。

暗い森の中、２つのグラスが寂しくカチンと鳴る。

くるくる回ってすってんてん（後書き）

お久しぶりです
いきなり3話目から読み始めて初めましての人はいないと思いますが、初めましての人は初めまして

前話から2，3週間くらい空きましたね
それほど空くと閲覧数も良い感じに過疎るのでチェックも疎かになります
まぁ自虐ネタはこの辺にすることにしましょうか

さてさて、だれてめぇ見たいな名前の人が割と出てきますが・・・
まぁ他作品に出た子ということで気にしないでください
たまに出てきますが別に知らなくても問題は無いと思います

次話のネタはもう考えてありますから・・・早ければ1週間には出るでしょう
といいつつ、1ヶ月になる可能性も無きにしも非ずなのでお待ちいただける方はだらだらお待ちください
一応月1更新目標ですから！

ではでは、お読みいただきありがとうございます
少しでも楽しんでいただけたなら幸いです

今回が初めてだと、どうしていえるんだい？（前書き）

本日のゲストはかの有名な戦う道から、２０年間変わらない完成された戦術を持つ軍人さんが来てくれましたー
わーわーぱちぱち

では、早速一言どうぞ
「くにへかえるんだな、おまえにもかぞくがいるだろう」

大変ありがたいお言葉でしたね

人物表
エウナ
吸血鬼　することないのでお昼は基本寝てます

楓
魔法使い　よく寝てますよねこの子

アリス・イン・ワンダーランド
魔術師　規則正しい生活は送ってません

今回が初めてだと、どうしていえるんだい？

徐々に明るくなっていく窓の外ではチコチコと鳥の鳴く声が響く中、一人寝返りを打つ。寝返りを打つたびに体が柔らかいベットへと沈み込む。

眠れない・・・ベットってこんなに大きかったっけ？

こう、何だか手が寂しく感じられ、何度も寝返りを打ってしまう。

そういえば、楓はもう寝たのかな？

ふと疑問が浮かんだのでベットから立ち上がる。

『そんな・・・夜這いだなんて・・・エウナさんの大胆な・・・』

ドアの目の前で誰かの声と一緒に軽い頭痛がした気がするけど、気のせいということにして処理する。今朝だし夜じゃないし。

それにコレは楓が寝てるのかどうかを確認するだけで、別に寂しさに駆られての行動じゃない。うん、そうね。それにもしもあの子が寂しがってたら大変じゃない。あら、それじゃしょうがないし、どうしてもというなら添い寝でも・・・。

ぐるぐると思考を回転させながら抜き足差し足で廊下を歩くと、いつの間にか楓の部屋の前まで辿り着いた。

さて・・・次の一手はとても重要ね。

まぁドアを開けたらそこには楓が居たとして、アレ？エウナさんどうかしたんですか？と言われたとしましょう。

その問いにどう答えるかで、私の運命が決まるといっても過言ではないわね。

正直に寝てるかどうか気になったと言ったところで、意外と鈍いあの子はぺかーっと笑ってそのままはいさようならとなるに違いない。

それだけは断じて避けたいところ。いえ、別に寝てるかどうかを確認するだけなのだから別にいいのだけれど・・・。

「アレ？エウナさんまだ起きてたんですか？」

「っ！」

心臓が止まったかと思った。見ればそこには抱き枕を抱えて眠たそうにしているアリスがいた。

「え、ええ、そろそろ寝るところよ」

「そうですかー。私ももう寝ますし、おやすみなさいですね」

「おやすみなさい、良い夢を」

彼女が自室へと戻っていく様を微笑みながら見送る。

「ほどほどにしてくださいね？」

アリスが部屋に入る直前、彼女は全てがわかっているかのような笑顔を残していった。

その言葉で少しばかり引き攣った微笑みを固定しながら1分カウントし、そっとアリスの部屋の中へと耳を済ませる。

中では少しの間ごそごそとしていたが、やがてベットへと入ったのかソレも静かになった。

アリスの登場で思い出したけれど、今は明け方。

こうしている間にも、刻一刻と私がここに居ることが不自然な時間へとなっていってしまう。

ここは覚悟を決めて出たとこ勝負！大丈夫、何とかなるさ、今までだってそうだっだろう？

突如心の中で出てきた誰かにありがとうと告げると、特殊部隊顔負けの音の立たなさでドアを開いた。

楓の部屋は、よくわからない機具や変な色をした液体の入ったカップであふれていた。・・・私たち部屋貰ったの同時期よね？まぁ、ソレはいいでしょう。

どうやらあまりにも音を立てなさ過ぎたので当の本人は気付いてない様子。ちょうどいい、急に出てきて驚かせて上げましょう。

段々と明るくなっていく部屋で一人微笑む。気分は悪戯を実行する直前の子供。経験がないからなんともいえないけど。

四つんばいになりながらそろりそろりとベットへと近づくと、突然楓の前へと顔を出す。

彼女は、とても安らかな顔をしてすやすやと眠っていた。

そのままの格好で数分間、沈黙が部屋を支配する。認めたくない現実、安らかな楓の顔、間抜けな私。・・・今の、誰かに見られてたら死のう。

しかし、眠っていたならしょうがないわね。そう結論付けると次の行動を考える。

手は楓の頬をぷにぷにと突付くのに忙しく、自然と私の頬も緩む。

さてどうしよう。眠っていたのならしょうがない、次はどう動くべきか。それにしてもやわっこいわね。

しばらくの間つまんだり突付いたりすることに夢中になっていると、ふと彼女が寝返りを打ったので、可能な限りの速度で静かに壁際に張り付いて事無きを得た。

・・・何をしてるんだ私は。こんなことをするために来た訳じゃないでしょう！・・・ところで私は何をしに来たんだっけ？

楓は寝ていたわけだから・・・んー、それにしても何食べたらこんなに柔らかくなるのかしらね？

軽い眠気が残る頭でぼーっと頬の柔らかさについて考えていると、楓がうなされ始めた。

突如、私の脳内に電流が走る。

楓がうなされているのだから、コレは添い寝をして宥めてあげないといけないわね。

別に寝れないからこの機会にあわよくば抱き枕を手に入れよう、とかそういうわけじゃなく私は全てこの子のタメを思って・・・。
などと脳内で呟きながらも、静かに素早くベットの中へと入る。毛布の中は楓の体温でほどよく暖まっており、それだけで魅惑の魔の手が伸びてくる。当然、そのまま落ちてしまうのはもったいな・・・彼女のためにならないので眠っている彼女を抱きしめて、頭を片手で撫で撫していると、微かに香る血の匂いがさらに私を幻惑する。
大丈夫大丈夫・・・後はこの子が目覚めるまでに目覚めて自室に戻ればこの事は誰にもわからない。
そのうちに魔の手の侵略が抗いがたい状態まで達し、私は意識は溶けるように無くなった。

□　□　□　□

何だか覚えのある匂いで目を覚ますと、目の前で楓が照れたように笑っていた。

「・・・おはようございます」
「・・・？おはよう」

さてさて？何で彼女がここに？と疑問を抱き、辺りを見渡せばそこは何やらよくわからない機具やカップが乱雑と置かれている部屋の中だった。
その瞬間に蘇ってくる今朝の記憶。襲い掛かってくる私の恥行。思わず頭を抱えたくなるが、私の意志に反して両手はやわっこい温もりを抱きしめていて離れようとしない。
私の脳内は数パターンの言い訳を思考錯誤するも、コレといったすばらしいものは未だ出てこない。

そうしてる間に楓は甘える様にして私の胸へと顔を押し付けてくる。
一瞬の間に脳内がゴーサインで埋め尽くされそうになるも、理性を総動員して撃滅し、現状を打破する一手を考える。

「エウナさんエウナさん」
「・・・ん？」
「おはようのちゅー？」
「・・・」
「んっ・・・」
「じゃ、じゃあ私は起きるから」

楓と触れ合うだけのキスをしてからそそくさと戦線離脱しようとすると、小さい抵抗があることに気付いた。
不思議に思ってそちらを見るとちっちゃい手が私の服を掴んでいた。

「行っちゃうんですか・・・？」

呟く様な声が聞こえてきて、私の動きは金縛りにあった様に固まった。
頭の中でこの状況が続く事に対する今後のリスクと、今目の前にある幸せを天秤に掛ける。

「ぎゅー？」

天秤はゴキッと音を立てて今のほうへと折れ、そのまま奈落の底へと落ちていった。

「・・・しょ、しょうがないわね」

「にゃははー」

再び元の温もりへと戻ると、楓は嬉しそうに擦り寄って抱きついてくる。・・・ま、まぁ、しばらくこのままでも良いかな？うん、しょうがないしょうがない。

自然と頬が緩んでいく中、理性をフル稼働させながら彼女を抱きしめた。

今回が初めてだと、どうしていえるんだい？（後書き）

Q. 次話はバトル回だって聞いたんだけど？
A. バト・・・ル？

見事に不定期投稿ですね

あ、あらすじ変えてみました
なんというグダグダ
だがタグは変えない
あらすじなんてなかったんや！

ぶっちゃけるとバトル回の前の小話を書いてたら1話出来ました
なんというグダグダ
まぁいいんですけどね

ということで、少しでも糖分を感じて頂けたら幸いです

旅に行くには準備が大切です（前書き）

～エースコンバット5～
仲間Ａ「隊長は落ちないさ」
私「あー！あああああああ！」
チュドーン
［＜リトライ

人物表
メリーさん
幽霊　話によっては結婚したりしなかったり
叶（カナエ）　夢（ユメ）
メイドさん　昔のヒロインなのに影が薄い哀しみを背負いました
ルカ
魔法使い　前作の主人公　前は魔法率皆無でお送りしました

旅に行くには準備が大切です

「エウナさんエウナさん」
「んー？」

私が『和菓子百戦の歴史』という意味不明なシリーズの本から顔を上げると、そこには嬉しそうにお札を突きつけている楓の姿があった。お札には『あくりょうたいさん』と下手な字で書いてある。

「・・・何それ」
「魔物退治のお札を作ってみたのです！」
「そう」

えっへんと無い胸を張っている巫女を見なかったことにすると、また読書を再開する。

「ちゃんと見てくださいよ！」
「五月蝿いわね、何よ」
「こーやって魔力を込めるとですねー」

楓が呟いた瞬間、バチっと音が鳴りお札は楓の手から離れた。そして地面へと落ちると黒く炭化する。
その様子を無表情のままで見つめる楓。

「少し、出ますね」
「・・・」

彼女はそう告げると部屋から出て行った。私はその姿に何も言えずにただ見送るだけ。

「むむ？本体（オリジナル）ったら他人にお茶入れさせて自分は何処かに行っちゃったんですか？」

聞きなれた声のした方を見ると、メイド服を着た楓が紅茶を入れながらニコニコと笑っている。

『エウナさまは、ユメが絶対に守ってあげますね！』

誰かの声と共に、ジャリっと鈍い痛みが頭を襲う。

「・・・今まで出来たことが出来なくなるってどういう気持ちなんでしょうね？」

ポツリこぼれた疑問はその頭痛のせいなのか・・・それとも彼女の姿が楓と瓜二つだからなのか・・・。

「さぁ、ボクには出来ることしか出来ないからわからないですね」

「・・・そう」

「何てったってボクには以前が無いですから！」

紅茶がこぽこぽと湯気を立てている紅茶を私の前へと差し出しながら、彼女はそう笑った。しかし、彼女は少しだけ表情を曇らせると言葉を続ける。

「ですが・・・エウナさんが悩んでいるなら相談に乗りますよ？」

「・・・それは」

「安心してください、ボクに話したことは本体は知ることが出来ま

せん。生まれた瞬間は共有していても、数秒もすればボク達は共有できない別人なんですから」

心配そうにして私を覗き込んでくる顔は間違いなく楓なのに、けれども何処か違う。違うことが、わかってしまう。

「怖いのよ」

「怖い・・・ですか？」

結局、私はまだ暖かい紅茶を見つめながらポツリと呟いてしまう。・・・私は、誰かに話したかったのかしらね？本人ではないとしても、そこに居るのは楓と変わらないのに？

「ねぇ、突然襲ってくる幻聴と頭痛は何？私は何時からあなたと一緒に暮らし始めたの？あなたは・・・何時から人じゃなくなったの？」

疑問に答えは出ないままも流れ出た言葉は続かれる。その問いに、彼女が答えれるかどうかなんてわからないのに。

「ある時から記憶がぷつりと無くなってる・・・何か、私は何か大切なことを忘れてるような気がして・・・それを思い出すと今の生活が無くなるような気がして・・・」

彼女は黙って言葉を聞き、そして私の頭を優しく抱きしめた。

「残念ながら、本体の意思がわからない以上、ボクがその問いに答えることは出来ません」

じっと彼女の体温を感じていると、少し気持ちが和らぐ。

「ですが、失った物は戻らなくとも魔法で封じられている記憶を取り戻す方法はあります」

彼女は私が落ち着いたのを確認してから離れると、月明かりが差し込んでくる窓を開けると優しく微笑んだ。

「己を知り敵を知れば百戦危うからず、ですよエウナさん」

それは、私の疑問に対する一つの答え。

「どうして・・・そこまで？」

あなたはあの子とは違うのに、どうして？

「例え数分前に生まれ、数秒後には消えるとしても・・・」

私を安心させるためか、彼女は微笑を崩さない。

「ボク達はエウナさんが笑っていられることだけを願ってますし、そのためなら何でもします。・・・だから、そんな辛そうな顔をしないで」

あなたは、何も悪くないんですから。

最期の言葉が聞こえたとき、彼女は何処にも居なかった。床に落ちているのは、人の形をして燃え尽きた一枚の紙だけ。・・・どうしてあなたはそう勝手なのよ。

「あれ？楓さんが居たと思ったんですけど、気のせいでしたか？」

どのくらいその紙を見つめていたのだろうか、ふと後ろからアリスの声がした。どうも紅茶が冷めていることから結構な時間を過ごしたみたいね。

「エウナさん？泣いてるんですか？」

「・・・気のせいよ。それよりアリス、良ければで良いんだけど・・・」

「んー？はい、何ですか？」

少しだけ彼女の居たほうを見てから、アリスへと向き合う。

「魔法、教えてくれない？」

□　□　□　□

シトシトと雨が降っている中、山奥にひっそりと建っている屋敷へと数人の人影が入っていく。全員銃を持っており一人は片手に大きなトランクを持っている、黒く素早く、さらに音も無く静かに動く様はまるでゴキ・・・特殊な訓練を積んでいる様に見える。

ところどころ朽ちて穴の開いている玄関ホールで一人が合図を出すと、ゴキブ・・・彼らは1階と2階で分かれた。ちなみに徒歩であり飛んではいない。

明らかに屋敷よりも長い2階廊下をカサカサと静かに動く不法侵入者3人。時折立ち止まっては手に持った計器を見ているところから、目的地の場所はわかっている様だ。

そして、永遠に続くのかと思われた長い廊下もついに終わりを向かえ、彼らは一つの扉の前で立ち止まった。中で物音がしないことを確認すると、廊下に1人を残して中へと入っていく。開けたら閉

める常識は今のところ通用されない様子。
ぼろい他の部屋とは違い、高級そうな調度品がある部屋の中、ベットには一人の女性が横たわっていた。白いドレスに身を包んだ女性は長い金色の髪をベット全体に広げ、静かに目を閉じている姿は人形にも見える。
その女性を近づいて確認すると、へんた・・・一人の男が手に持っているトランクを開けた。中に入っているのは、ホワイトアッシュの杭とハンマー。
二人がそれぞれ杭とハンマーを手にした時、突然部屋の扉が閉まり部屋の外から銃声が聞こえてきた。彼らは反射的に近くにあった銃を構えて扉へと向けた。そのまま数十秒、不気味な沈黙が屋敷の中を支配する。しかしお互いに目配せをした瞬間、その沈黙は破られた。
突如ドアと一緒に何かが吹き飛んできて一人の男を押し倒した。押し倒された男が驚いて、あさっての方向へとトリガーが引かれる中、開きっぱなしとなったドアから小さな少女が飛び出し、まだ立っていた男の首へと手を掛けた。そのまま勢いをつけて首をへし折る。
頭が変な方向へと曲がった男が倒れる中、少女は未だ仲間の死体の下から抜け出せずにいる男をちらりと見ると、死体ごとその体を踏み潰した。勢いよく出た血飛沫が少女の服に赤い斑点を作った。
少女は自身が赤く染まるのも気にせず、メイド服から携帯電話を取り出すと何処かへと電話を掛ける。

「メリーさまー？」

電話を片手に持っているメイド服を着た少女は小さい子供ほどの大きさで、腰まである長い白髪を後ろで纏めている。少女がうんうんと頷くたびに、後ろの髪がさらさらと揺れた。
やがて、ドアから一人の女性が現れると少女は電話を懐へと閉ま

い、とてとてと女性の下へと駆け寄った。部屋へと入ってきた女性は銀髪のポニーテールを揺らしながら駆け寄ってきた女性を抱きしめる。

「わお・・・これまた派手にしましたね、ユメさん」
「・・・ダメでしたか？」
「いえいえ！そんなことは無いですよー」

女性・・・メリーは駆け寄るや否や不安そうに見上げてくるユメを撫でると笑顔で応える。気持ちよさそうに目を細めるユメ。

「とはいえ、ちょっと汚れすぎですよ！」
「ごめんなさい・・・」

メーと指を出すとユメはしょんぼりと肩を落とした。ちょっとで済むのか・・・ソレは誰にもわからない。

「まぁ、私も準備がありますからその間に着替えてきてくださいな」
「うん！」

ユメは元気よく返事をすると、とてててーと部屋から出ていった。その後姿を微笑みながら見ていたメリーは、ベットで横たわっている女性へと目を向けると少し表情を暗くした。

「そういえばルカはー？」
「んー・・・電話にも出ないですしどうしてるんでしょうね？」
「そっかー・・・」

新しいメイド服へと着替えてきたユメが何気なさを装って聞くと、メリーは困ったような顔をして答えた。

「まぁ、あの人なら平気でしょー。ではでは行きましょうか」

メリーは何処と無くがっかりした様子のユメに苦笑しながら隣の部屋の扉を開くと、どういうわけか食堂が見えた。

しかし二人とも特に気にした様子は無く、先にメリーが、その後で眠っている女性を抱えたユメが続くようにして入っていく。

「うらぐちー？」

「はい、裏口ー」

二人がのんびりと食堂から台所へと歩いていると、突然入ってきた扉が開き、数人の兵士が銃を撃ちながら現れた。ところで全員同じ格好なのだが、見分けは付くのだろうか。

「・・・意外と準備万端ですね」

「どうするのです？」

「んー、先に行っててくれますか？」

「大丈夫なのですか？」

「だいじょーぶなのです」

その間も銃声は絶え間なく続いているのに、その弾は触手の様なもので防がれて彼女達に届くことは無い。

心配そうに何度も振り返るユメがとことこと台所へと入って扉を閉めると、扉越しに兵士達の悲鳴が聞こえてくる。しかし、数分も経つと悲鳴も聞こえなくなり、メリーが静かに扉を開けて入ってきた。

「お待たせしましたー、ではでは行きましょうか？」

「うん！」

メリーが勝手口の扉を開けて屋敷の外へと出ると、外は白い霧で数歩先も見えない状況になっていた。
二人はその霧の中をはぐれないように手を繋ぎながら歩いていくと、古ぼけた車庫へとたどり着く。
メリーは慎重に中の気配を探ると、静かに扉を開けた。車庫の中も霧が広がっていたが、二人が中へと入るとぱちんと指の鳴る音がしてゆっくりと霧が開けていった。
中には黒いのワゴン車が一台あり、床は水浸しとなっている。

「アレ？意外と早かったじゃない？」
「お待たせしました。もう出れます？」
「それはメリーさんに任せるよ」

洗浄用のホースから水を出して床を濡らしながら、中に居た赤いコートを着ている少女が笑って言った。

「はいなー、ではでは出来る限り早く出ましょうか・・・あ、そういえば霧はどのくらいまであります？」
「んー・・・街の外辺りまでかな？」
「そうですか・・・」

メリーは少しだけ表情を暗くしたが、すぐに笑顔になると車庫のシャッターを開ける。

「ルカ！こっち掛けないでよ！」
「わかってるわよ・・・後きちんと『さん』をつけなさいちびっ子、グリグリするぞ」
「やー！」

「よろしい、ならばグリグリだ」

ルカは逃げようとするユメを捕まえると、頭をグリグリする。

「眠り姫は一番後ろ？」

「そうですね・・・トランクに詰めるのはアレですしそこがいいかとー」

「だ、そうだちびっ子」

「いひゃいひゃい！わかったから離すの！」

ユメは開放されると、一発蹴りを入れてルカを悶絶させてから眠り姫と呼んだ女性を車に乗せる。その作業の中、車の後部座席からリアカーにいつもは被せられていなかった青いビニールシートが被せられているのが見えた。

不思議に思って近づくと、何かを積んでいるのかビニールシートが少し膨らんでいる。ユメの中にむくむくと湧き上がる好奇心。

しかしその好奇心もシートに手を掛けたところで待ったが掛かった。

「よーし、そこまで！そこから先はちびっ子は見ちゃダメ」

哀れにもユメは後ろから抱きかかえられると車へと連行される。

「子ども扱いしないのー！」

「はいはい、夜寝れなくなるから見ちゃダメよ」

「ルカ臭い！血生臭い！」

「・・・そ、それは聞き捨てなら無いわね」

ルカはじたばたと暴れるユメと自身を抑えながらも車へと連行する。

「準備は出来ましたかー？」
「こっちは平気ー」
「ぶー・・・・」

運転席に座ってるメリーは膨れてるユメを見て微笑むと車を発進させた。

「ではでは行きましょうか・・・魔法使いを探しに」

旅に行くには準備が大切です（後書き）

ありそうな質問

Q. 何この話、別じゃないの？
A. 同時進行です

Q. 何で作品にするの？馬鹿なの？死ぬの？
A. 世界観は微妙に一緒ですので勘弁してください

説明になってない？聞こえんなー

本作品には他作品を読んでるとわかりそうでわからないようなネタがたまに出ます
別に問題は無いと思いますがご了承ください

また本作品には平然と骨が折れたり色々したりします
ご了承ください

甘くない？あらすじ詐欺？バカップルじゃない？ゴメンナサイ
次話は普通のいつものイチャイチャが入ると思います
というより、他の人の読んでると色々自重したほうがいいんじゃない？とか思うんですがどうなんでしょうね？
ひたすらバカップルしてる姿なんて見せられて楽しいものなんでしょうか・・・

ではでは、少しでも楽しんでいただけたら幸いです

我が家では1年12ヶ月中11ヶ月はお鍋の季節です（前書き）

誰が得する用語説明のコーナー
どんどんぱふぱふー♪ヾ（≧▽≦）ノシ
さぁ、第2回があるかどうかわからない誰が得する用語説明のコーナーがやってきました
第1回は『魔法使い』と『魔術師』の違いです
ちなみに本編には全く関係ないですから！

魔術師が魔法を専門にしている人のことで魔法使いは魔法が使える人のことです

数学で書くとこんな感じ
魔術師⊂魔法使い

コレでよくわからない人のために例を挙げると
魔術師＝大学教授
魔法使い＝生徒
だと思ってください
つまり魔法の専門家が魔術師なんですよ！

わかんなくても本編にはほぼ関係しないので気にしないでください

人物表
エウナ
きゅーけつき　昔にやったちゅーけつきというネタがネタじゃ無くなって来ました
楓

魔法使い　嬉しいと耳がひょこひょこ動きます　ちなみに正式に告白は一度もしてないです

アリス・イン・ワンダーランド

魔術師　お酒に弱い　とにかく弱い　寝起きも弱い　とにかく弱い

ミツキ

クラゲ　（，―、）いいですよね、クラゲ

我が家では1年12ヶ月中11ヶ月はお鍋の季節です

私は今、人生最大の窮地に立たされている。
目の前にあるのは開かれている1冊の本、認めたくない現実。スタート時は笑顔だった私の顔は既に仮面を通り越して石像と化している。

「つまり誰がしても大体同じ様な結果になる科学と考えが違って、魔法は出来る人だけが出来ればいいという考えで動いてます。
もちろん、魔術師の中にも誰にでも使えるということを目指している人も居ますが・・・どちらにしても魔術師達の目的は一つ。アカッシックレコードを目指すことです」
「へ、へぇ・・・そうなの」

・・・アカシックレコードって何なのかしら。

「それでですねー・・・」

アリスはそう言うと本のページを1枚めくり、ある場所を指し示した。どうしようもないので視線を落とせば、私へと襲い掛かってくる意味不明の言葉の羅列。
それでから始まる言葉はほとんど理解が出来ない。中には辛うじてわかるものも少しあるけれど・・・それじゃわからないのと大して変わらないじゃない。
アリスから発せられる言葉は空中で分解され、私の耳に届き、脳へと留まることをせずに逆耳から飛び出して行く。
ここまで来ると、私の目の前に居る彼女は本当にいつも接していた彼女なのか疑問を覚えてしまう。

「ア、アリス・・・ちょっといい？」
「はい？どうかしましたか？」
にこにこと嬉しそうに何かの言葉を発していた正体(アリス)不明は私の顔を見つめてくる。
覚悟を・・・決めるときが来たようね。
「コレって・・・皆覚えてるものなの？」
「んーと・・・完全では無いですが、皆大体は覚えてるんじゃないでしょうか？」
「そ、そう・・・」
私は精一杯の精神力を使って感情(ほんね)が表情(たてまえ)に出ないように気をつける。
「大丈夫ですか？」
・・・どうやら少しだけ出てしまったらしく、心配そうにアリスが覗き込んでくる。
どうしても認めたくないけれど、認めなければ先に進めない。それはわかっているのだけれど、それを認めるにはどうしてもプライドが躊躇してしまう。
「・・・少し休憩にします？」
「ええ・・・そうしましょう。紅茶入れてくるわね」
そう告げるとそそくさと台所へと逃げて天を仰ぎながら逃れ続けていた事実に目を向ける。
私って・・・馬鹿だったのね・・・。
何時までも嘆いていてもしょうがないので、悲しみを背負ったま

ま適当に紅茶を入れて持ってくると、テーブルの上には現実が待っている。
『だれでもわかる！まほうがくのほん（こどもよう！）』
やたらと強調されたその本は挿絵も多く、さらに振り仮名も振っていて確かに子供用なんでしょうね・・・。私はわからなかったけれど。

「どうかしましたか？エウナさん」
「いえ、何でもないわ」

忌々しいその本を何時までも見ていると、彼女に悟られてしまうのでさらりと視線を逸らしてカップに紅茶を注ぐ。
ぽこぽこと湯気が立ち上ってくるソレは、既に香りだけでいつも飲んでいるものよりも劣っていることを主張してくる。

「・・・美味しくないですね」
「・・・ええ、ホントにね」

適当に入れた紅茶は見事な風味を醸し出し、私達の味覚に渋みだけを訴えてくる。つまり不味い。すごく不味い。ストレートで飲む気にならないくらいに不味い。
今度楓に紅茶の入れ方でも教えて貰おうかしら？

「ところでエウナさん？さっきの話、全くわかってないですよね？」

アリスがカップにミルクやら砂糖やらをぶち込んでいる様子を羨ましそうに見ていると、スプーンでくるくるとかき混ぜながらアリスが言った。
心臓が止まるかと思った。

「そ、そんなことは無いわよ？」
「そうですかー」

世界が止まったかの様な空気の中、アリスのスプーンだけはくるくると動き続ける。
私はその空気に耐え切れず、やけに乾く喉を不味い紅茶で喉を潤そうとして突然注ぎ込まれた熱に失敗していた。

「いいですか、エウナさん」

そんな私の様子を微笑んで見ていたアリスが諭すように言う。

「わからないならちゃんとわからない、と言ってくれないと困ります。まぁ、言わなくてもわかりますが・・・」
「・・・」
「ちゃんと言ってくれれば此方もきちんと対処しますから・・・ね？」

・・・まずその手間の掛かる子を見るような顔を止めなさい、話はそこからよ。
当然そんなことを言えるわけも無く、ただ黙って事態の沈静化を待つ。大体今回で本を変えるの3回目なのよ！？言えるわけ無いじゃない！

「ん、んー・・・あれ？ミツキさん、山狩りは終わったんですか？」

困ったように紅茶を飲むアリスをなるべく見ないようにしていると、頭に救世主(なにか)が乗っかってきた。

「・・・乗るのは良いけれどお面ずらさないでよ？」

私の上で応じるように揺れ動くミツキ。その動きは私に対する返答なのか、アリスに対する返答なのか、一体どっちなのかしらね？

「そうなんですかー、ではでは楓さんももう帰ってきますね」

何故かはわからないけれど、アリスはミツキの言うことがわかるらしい。

そして、魔法の勉強のことは楓には秘密にしておいて欲しい、という私の身勝手な願いを律儀にも守ろうとアリスはせっせと本を集め始めた。当然私も参加する。

「ただいま戻りましたー」

「お帰りなさい」

アリスが使った本を片付けに行っている間に、秋なのだからとか言うよくわからない理由で山狩りへと向かった楓が帰ってくる。

「見てみてエウナさん、たいりょー！」

嬉しそうに耳をぴくぴくと動かせながら、腰につけた籠を私の後ろから抱き付いてきて見せてくる楓。中には色鮮やかな良くわかんないキノコやら山菜らしきものやらがつまっている。正直よくわからないけれど・・・このキノコ大丈夫なのかしら・・・？。

「そう、それはよくやったわね」

「んー♪」

よくはわからないけれど、褒めて欲しそうに耳が動いていたので頭を撫でると、気持ちよさそうに目を閉じた。

「・・・ねぇ楓？何か捕まえた？」

さっきから籠の中に袋がぴくぴくと揺れて自己主張を繰り返してるのだけれど。

「んーとですね、ツチノコー！」
「そうなの、ツチノコなの」
「うむうむ！」

さっきと同じ様に撫でて撫でてーと楓の耳がぴくぴくと動くが今度は無視する。・・・記憶違いが無ければツチノコってアレよね？あのヘビみたいな。

「・・・逃がしてらっしゃい」
「美味しいですよ？」
「ダメよ」
「ぶー・・・」

そんなゲテモノ絶対に食べたくないので楓の言葉を一言で切り捨てると、彼女は不満そうにぶーぶー唸り始めた。
そうしてしばらくの間むーむーと唸っていたが、やがてツチノコが入っている袋を持つと目を輝かせた。

「じゃあちゅーしてくれたら逃がしてあげます！」
「よし渡しなさい、私が捨ててくるから」
「やー！」

その言葉が聞こえた瞬間に拳を振るうと、頭の上に居たミツキが驚いたように揺れた。願うは唯一つ、食べたくない。

しかし、不完全な体勢から放たれた拳は目標にたどり着くことなく空を切る。

「あら、逃げなければ一瞬で終わったのに・・・残念ね」

「エウナさんの拳に愛が篭っているなら正面から受け止めましょう！」

「哀なら十分に篭ってるから安心しなさい」

「文字にしないとわからない違いを言わないでください！」

「何言ってるかわかんないわね！」

拳に加えて蹴りを混ぜるも、彼女に当たる気配は無い。まぁ、当てる気もないのだから当然なのだけれど。もちろん、家具を壊さないように細心の注意を払うことは忘れない。

「わわっ！何してるんですか！」

途中でアリスが帰ってくるも気にせず、当たらない攻撃を加えながら楓を何も無い角へと追い詰めていく。

「さぁ、追い詰めたわよ？」

「エウナさん！ケンカは良くないです！」

「アリス・・・コレはしないといけないことなのよ」

あなたもツチノコなんてゲテモノ食べたくないでしょう？

必死に止めようとするアリスへと対応しながらも、視線は楓から外さない。

「ふふ・・・追い詰めた？冗談でしょう？」

追い詰められているにも関わらず楓は不敵な笑みを浮かべてそう

言うと、そのまま両手を精一杯此方へと向けてくる。

「さぁ！観念してボクにちゅーするのです！」

「・・・エウナさん、手伝います」

「・・・見えてる所には傷を残さないようにね」

「わかりました」

「ちょ、ちょっとまってください！二人掛りは無理ですって！」

夜も深まる家の中、楓の言葉が空しく響いた。

□　□　□　□

「ところでコレどうするの？」

悪も滅して一段落付いたところで、山狩りの成果をどうするかアリスへと聞くと、彼女はんーと宙を見上げた。私も釣られて上を見るけれども・・・天井しかないわね。

しばらくの間天井と勝負の付かないにらめっこしていると、ミツキが私の頭をぺしぺしと叩いて自己主張してくる。とりあえず頭に手をやって撫でるとふよふよとした感触が返ってきた。

「・・・ぬめぬめしてる」

「んー？」

「何でもないわ」

気のせい・・・であって欲しいけれど、ぺしぺしが強くなった気がする。

「お鍋にしましょうか！」
「鍋って・・・誰が作るの？」

自慢じゃないけれど私も楓も料理は全く出来ない。アリスも何かを温めたりするところは見たことあるけれど・・・出来てる物を温めるのを料理と呼ぶには少し辛いものがあるわね。

「安心してください！私が作るわけじゃないですから！」
「それじゃ誰が作るのよ」
「私に心当たりがありますから！その人のところに行きましょう」

こうして自信満々に胸を張ったアリスに率いられて夜の街へと繰り出すことに。悲しいことに、張っている胸は見事なまでの平らっぷりなのだけれど。

今がどのくらいの時間なのかはわからないけれど、夜中の街はとても静かで、私の背中からしている楓の寝息が微かに聞こえてくる。

上を見上げれば半分に割れた月が光輝いているし、少し遠くを見れば建設途中となっている塔が見える。

私の視界の中で、ゆっくりと塔から誰かが落ちていくのが視える。

その幻想を見た瞬間、ズキッとした痛みに襲われて頭を抑えてしまう。

「どうかしましたか？」

片手に籠を持っているアリスが不思議そうに覗き込んでくるけれども、返事をする余裕が出ない。

私の目の前で銀色の髪が月明かりに反射する。その綺麗な髪も、赤い汚れが付いて・・・。

微かな血の匂いが強くなった。

『・・・我が名の下に命ずる』

しかし、突然誰かの声がしたかと思うと、急に頭痛は治まった。

「お家に戻ります？」

「大丈夫よ・・・さぁ、行きましょう」

「・・・そうですか」

アリスに余計な心配を掛けないために笑いかけると、また夜の街を歩き始める。けれども私の足はすぐに止まる事になった。

悲しいけれど、先頭を歩くには道がわからないのよね・・・。

□　□　□　□

その後、とことことまるで鴨の子供の如くアリスの後ろを引っ付いて歩いていると、街外れの店へとたどり着いた。

アリス曰く、看板も出てないその店は知る人ぞ知る高級料亭だとか何とか。見た感じでは小さい明かりが漏れているけれど、正直やってるのかやってないのかすらわからないわね。

「・・・コレ、やってるの？」

「だいじょーぶです、少し人嫌いの人がやってるからこうなってるだけですから」

そう言うと、がらがらーと扉を開けて入っていくアリス。

その店へと入る前に、ちょうどいい茂みへとツチノコ入りの袋を放り投げておくことも忘れない。口は開けておいたし、よほど運が悪くなければ死ぬことも無いでしょう。

「いらっしゃい・・・あら、アリスじゃない。元気してた？」
「お久しぶりです。元気してました」

私が中へと入ると女将さんらしき人と知り合いらしく、和やかに会話をしている。一人蚊帳の外で切なく待つ私。

「最近来ないから気になってたのよ。そういえばルカは元気？」
「ルカさんは・・・そうですね、たぶん元気です」
「そ、それじゃ金が無くなったらいつでも戻って来いって言っておいて」
「はい、伝えておきますね」

今一瞬、少しだけ暗い表情が出たような気がするのだけれど・・・気のせいかしらね？後ルカって前に聞いたことあるような？
はてさて何時だっけ？と悩んでいる間にも話はぽんぽん進んでいって座敷へと案内された。
落ちついた感じの部屋の中心には木で出来た大きな机があって、私達はそれぞれ思い思いの場所へと座る。ずっと私の背中で眠っている楓はコートを剥いでから適当なところで落とす。

「ここはよく来るの？」
「はい、結構馴染みなんですよー」

女将さんの注いだお茶を飲みながら何が美味しいとかドレが美味しくないとかの話に花を咲かせていると、やがて料理がやってきた。
お刺身やらお酒やらよくわからないものやらが私の目の前に次々と運び込まれて行く。運ばれていくたびに説明が入るのだけれど、ふんふん、はぁ、へー、と聞いていることしか出来ない。とりあえず何かの食材の名前を言ってることだけは辛うじてわかった。

味は美味しいのも、そうでないのもあるけれど一応残さず食べる。それにしても、この小皿の料理だけでいくらになるのかしらね・・・。

お酒も入りゆらゆらと食事が進む中、メインとなるお鍋がやってきた。

見た目は普通で野菜がぐつぐつと煮えている。でも中に肉類が入っているような気がするのだけれど・・・まさかツチノコとか入れてないわよね？

「このお肉は？」

「はい、ソレはですね」

営業スマイルで返された肉の名前は知らなかったけれどの、逆に知らないからこそ安心できる。味も普通に美味しかった。

楓のことだからこっそりと毒キノコとか混ぜているのかと思ったのだけれど・・・そんなことも無い様子？

そんな私の心境を知ってか否か、申し訳無さそうに言い始める女将さん。

「キノコなのですが、全て毒キノコだったので勝手ながら処分させていただきました」

「いえ、気にしないで」

私は何とか微笑を維持して女将さんへと返す。

混ぜてやがった！しかも全部！・・・通りでキノコが無いわけね。というより全部って事は私達にソレを食べさせようとしてたって事よね？・・・さてさて・・・どうしてくれようか。

「かえでさんずっとねてますねー」

「そうね・・・そろそろ起してもらえる？」

「はいー」

私がほのかに赤い顔のアリスに頼むと、彼女はのそのそと動いて楓を揺さぶった。

「・・・おはようのちゅーが無いと起きません！」

「ちゅー？」

「・・・」

頭が回ってないじゃない・・・。思わず頭を抱えるとアリスを楓から遠ざけ、料理についてきたカラシを集める。どける際にアリスがふわわーとか言っていたのだけれど・・・大丈夫なのしからね？色々と・・・。

目標確認、発射まで3秒。

静かに心の中で3秒カウントすると、何かのたまっている馬鹿へと爆弾を投下する。燃えるようなキスをあなたにプレゼント。

「んー・・・？んんんっー！？」

爆弾は見事に目標へと着弾し、目を白黒とさせた楓が飛び起きてきた。

「大丈夫？はい、お茶」

「ありはとうごはいます」

悶えるように耐えている彼女へとあつーいお茶を渡してあげる優しい私。

「っっっ！」

結果、楓は涙目になりながら部屋の外へと消えていった。たぶん、癒しの水を求めて。
その様子を冷めた目で見送っていると、視界の端でアリスがこっちに向けて口を開いているのが見えた。・・・何？

「あーん」
「・・・」

・・・何を求められているのかはわかるけれど、何で求められているのかがまるでわからない。さてさて・・・どう対処しようか。

「んー？」

私が対処法に悩んでいると、不思議そうな顔をしてからまた口を開けるアリス。

「あーん」
「・・・あーん」
「えへー」

何となく口元へと料理を運ぶと、ぱくりと食べてぺかーと笑う。そしてまた次をよこせとばかりに口を開ける。
することもないし、しばらくの間アリスへと食べ物の輸送作業を続ける。気分は雛鳥に餌を与える親鳥。

「・・・もういいの？」
「やー」

やがて、あーんも無くなったので聞いてみると、アリスはぺかーっと笑うと何故か私の頭をぺちんと叩いた。・・・誰か助けて。

衝撃でずれたお面を直している間にもアリスの奇行は続く。
彼女はのそのそと私の前まで動くと、ごろんと膝の上に頭を乗っけてきた。

「ねむー・・・」

一言呟くと目を閉じるアリス。私は助けを求めるべくクラゲの方を見ると、そいつは目が合うや否やふよふよと飛んで私の頭の上に収まって動かなくなった。

「ちょ、ちょっと！アリス！離れなさい！」
「んー？」
「んー、じゃないから！いいから離れなさい！」
「うー・・・！」

何とか引き剥がそうとするも、アリスは私の腰をホールドして離れようとしない。

「あったかー・・・」

コレは拙い！かなり拙い！とにかく剥がさないと・・・もしも楓に見られたりなんかしたら。

「あ・・・」

そこで私は気付いた。気付いてしまった。
ぎぎぎ、と音が鳴りそうなぎこちなさで襖の方を見る。
そこにはものすごい綺麗な笑顔を顔に貼り付けた楓が立っていた。
それはもう・・・あまりにも綺麗過ぎて人形に見えるくらい。
楓は笑顔はそのままでゆっくりと席へと着くと、黙々と食べ始め

た。

「あ、あの・・・コレは・・・アリスが・・・ね？」

たじたじになりながらも何とか現状を説明しようとがんばる私。

「いえいえ、いいんですよ？ボクのことはお気になさらず続けてください」

す、素敵な笑顔ですね、楓さん。それはもう・・・素敵過ぎて怖いほどに。

息が詰まるような沈黙が舞い降りた部屋の中に、アリスの寝息と鍋がぐつぐつと煮える音だけが響く。

この状況は・・・かなり拙い・・・！

如何にして現状をごまかし・・・もとい、打開策を考えるも移動が制限されている今、出来ることはほぼ皆無といって良い。

「あらエウナさん、お皿が空じゃないですかー。その状況じゃよそえないでしょうし、ボクがよそってあげますよ」

ニコニコと笑顔のままでそう言うと私の皿を持っていく楓。そして返されてきた中身は・・・スープだけ。

こ、これはどういうことなんでしょうか？楓さん？

針のむしろのような状況の中、救世主とも呼べる女将さんがデザートのプリンを持ってきた。プリンはクリームのついてる高級そうなの。

「仲が宜しいんですね」

・・・救世主かと思えた女将さんは私達の現状を見ると、一言爆

弾を落として去っていった。
パキッと何かが折れた音が楓のほうから聞こえてくるけれど、怖くてそちらのほうはとても見れない。
引き攣った笑顔を襖の外へと向けていると、食事も終わったのかかちゃかちゃとスプーンが鳴る音が聞こえてきた。
そちらのほうをちらりと横目で見ると、無表情の楓が顔にクリームが付くのも気にせず機械的にプリンを口に運んでいる。その瞳は虚ろで光は無く、正直に言うとかなり怖い。すごく怖い。
しかしその観察が功をなして打開策が閃いた。出来る限りの速度で脳内シミュレートをする。かなり難しいけれど・・・出来るとか出来ないとかじゃない！やるしかない！

「か、楓？」
「・・・はい、何でしょうか？」

私が話しかけるとすぐに笑顔へと戻る楓。ただし、瞳は虚ろで光は無い。
その顔を見た瞬間に心がくじけそうになったのだけれど、何とか勇気を振り絞って考えに考え抜いた作戦を実行に移すべく笑顔を作る。

「そ、その・・・ほっぺにクリームがついてるわよ？」
「・・・それはご丁寧にありがとうございます」
「よ、よければ私が取ってあげるからこっちにいらっしゃい」
「・・・はい？」

ゆっくりと首を傾ける楓。・・・耐えろ、耐えるんだ私！泣くんじゃない！泣いたら全てが終わるわよ！
全力で自身を鼓舞して笑顔を維持。
そのまま永遠とも思える時間が過ぎ、やがてゆっくりと楓が此方

へときて私の横に座る。

「・・・では、せっかくですからお願いしましょうか」

「え、ええ・・・任せて頂戴」

ここが正念場ね・・・。

覚悟を決めると、素早くクリームのついた楓の頬へとキスをする。そしてそのまま優しく舐め取ると、口内に上品な甘い味が広がる。

「・・・」

「と、取れたわよ・・・？」

口を離して楓の顔色を伺おうとすると、突然視界が黒く塞がれたかと思うと、唇に柔らかいものが触れてすぐに離れた。

「か、楓・・・？」

何も見えない中、思わず名前を呼ぶも返事は無い。そして、私は何かに後ろから抱きつかれた。

「見ないでください」

とっさにそちらのほうを向こうとすると、楓の静止が掛かったので慌てて向くのを止める。視界の端で彼女の狐耳がぴくぴくと耳が動くのがちらりと見える。

「エウナさんはずるいですねー・・・」

何も出来ないので黙って抱きしめられていると、後ろから楓の声がした。

「・・・ずるいです」

呟くような声がすると、強く抱きしめられて静かになる。

こ、コレは許されたと判断していいのかしらね・・・すごい気になるのだけれど・・・失言は絶対に避けたい。

となければ大事なのは最初の言葉。

さてさて・・・なんて返したら言いのかしらね？

悩みながら窓のほうを見ると、整えられた庭が月明かりに照らされてるのが見える。

「・・・月が綺麗ね」

ぽつりと漏れたのは、変わらないいつものやり取り。

「・・・ホントですね」

返答が来た後、抱きつく力が少し優しくなったような気がした。

「ん・・・そんな・・・ダメですよー・・・」

「・・・」

下のほうでアリスの声がしたかと思うと、楓の手がゆっくりと私の首に掛かる。

「ま、待って楓！は、話を・・・」

「いいですよー？何でも言ってください」

そ、そこ首だから！そこ絞めたら声が出ないから！色々と出なくなっちゃうから！

「あれ？何も言わないんですか？遠慮しなくてもいいのに・・・」

ぎぎぎ、っと楓の力が入っていく。ちょ・・・それ以上は・・・まず・・・っ！

やがて骨の折れる音が聞こえてくるのと同時に視界が回り、私の
は意識は無くなった。

我が家では1年12ヶ月中11ヶ月はお鍋の季節です（後書き）

昨日は湯豆腐今日はおでん
めぐりめぐるお鍋の季節ゝ（≧≦▽≦≧）ノシ

あ、前話から1週間で出来てますが・・・次もそうなるとは限りません

ではでは、少しでも楽しんでいただけたら幸いです

旅に危険は付きものです（前書き）

おや？（＜●＞д＜●＞）の様子が・・・

（（＜●＞д＜●＞））

（＜●＞д（＜●＞д＜●＞）д＜●＞）

（（＜●＞д＜●＞））

（＜●＞д（＜●＞д＜●＞）д＜●＞）

（（＜●＞д＜●＞））

（＜●＞д＜●＞）の進化は止まった

いつもよりめっさ長いです

人物表

メリーさん

幽霊　特に意味も無いですが幽霊です　立場的な力関係ではたぶん一番強い

叶（カナエ）　夢（ユメ）

ちびっこメイドさん　メイドさんらしいことしてたのももう昔の話・・・

ルカ

魔法使い　恋人は女の子　別に男性に興味がないとかじゃないよ！

浮気性でもないよ！

※本作品は全話読み終えた後に、嫌な味が残るといいなーという目標の元に作られています

旅に危険は付きものです

周りが明る過ぎるせいかさほど綺麗に見えない星空の下、買い物袋をぶら下げて歩く。もう日が落ちると肌寒くて、秋の終わりを告げられている気がする。コートを着てなかったら少し辛いかも。

それでも月は綺麗ね・・・。

満月から少しだけ欠けている月は何処か愛嬌を感じる。完璧じゃない辺りとか。

そういえば、月が出ていると星空がよく見えないって聞いたことがあるのだけれど、本当かしらね？

「止まれ」

空を見上げながら町外れの宿へ向かってふらふらと歩いていると、聞きなれた声がしたので立ち止まる。

見ればそこには手に棒を持っている黒い制服を着た殿方二人。全く、今日も検問ご苦労様と言いたい。言わないけど。

「ここから先に何の用だ？」

「この先の宿に泊まっているものです」

「どうしてこの先の宿なんだ？」

「旅をしていまして、なるべく安いところを選んでます・・・通ってもよろしいでしょうか？」

「・・・荷物を確認してからだ」

もはや定番となった受け答えをすると、簡易式のテントへと連れてかれる。ここに連れてかれるのは今日で何度目だっけな？

「済みません、何度も確認して・・・」

一人が買い物袋をがさがさと開ける中、もう一人の男性が申し訳無さそうにお茶を出しながら言った。それにしても買い物袋しか確認しない辺り、かなり雑よね。

「お気になさらないでください。ですが・・・近頃は寒くなってきましたし、体調は崩さない様にしてくださいね？」

「い、いえ！自分は健康だけが取り得なので！」

本心はともかくとして、私がそういって笑いかけると、彼は少し赤い顔をしながら胸を張った。そのまま二人で笑いあう。

「今日は買出しですか？」

「はい、少しずつでも準備はしないといけませんので・・・あ、申し訳ございませんが、ビニール紐は解かないでいただけますか？」

「・・・だそうだ。ビニール紐なんて旅に使うんですね？」

「あると便利ですので」

もしもの時の止血とか・・・とは口には出さずに黙って微笑んでおく。触らぬ神に祟りなしね。近頃の神さんは触らなくてもあるらしいけど。

視線の端では買い物袋から出された小瓶やビニール、水なんかがテーブルの上に置かれている。あの様子ならもうすぐ確認は終わるでしょう。

「異常なしです。ご協力ありがとうございます」

「いえいえ、お勤めがんばってくださいね」

きっちりと戻された買い物袋を再びぶら下げると、彼にだけ見える様に小さく手を振ってからまた歩き出す。

「あ・・・少し待ってください！」
「・・・はい？」

数歩歩いたところで呼び止められたので振り返る。この時間帯、あまり長居はしたくないのだけれど・・・。

「その・・・和食と洋食ではどちらが好みでしょうか？」
「和食と洋食・・・ですか？」

鸚鵡返しに答えて時間を稼いでから、私の嗜好に何の意図があるのかと少しだけ考える。・・・素敵な差し入れでもしてくれるのかな？

「和食・・・ですね」
「そ、そうですか！その・・・美味しい和食の店があるんですが・・・もしよろしければ今度どうです・・・か？」

差し入れじゃなくて食事の誘いだった。少しだけ気が抜けるけれども、微笑は作ったままで答える。というより最後に自信なさげになっちゃいかんでしょう。

「それは素敵ですね。では何時にしましょう？」

その後、何処何処に待ち合わせという簡単なやり取りをしてから、再び宿に戻るべくテクテクと歩き始める。
さてさて・・・、
この事実をあの二人に言ったら何ていわれるかわかったものじゃないけれど・・・言わない訳にはいかないのが切ない・・・。
それにしてもここに来てから1週間か・・・そろそろ急ぎたいな

のだけれど・・・まぁ、なるようになるわね。

□　□　□　□

「どうやら魔術と科学で対立してるそうよ」
「それはまた在り来りな・・・どっちが優勢です？」
「言わずもがな、ね」
「・・・科学ですか」
「それにしても、大々的な魔女狩りって・・・何時の時代よ」
「ソレはソレはー、うかつに外を歩けないですねー」
「それでも行くの？」
「居るんでしょう？」

静かな車内にちびっ子の寝息が聞こえてくる中、ギルドの情報屋から掻っ攫った資料をがさがさと漁って目的の項目を探す。

「入ったのは・・・一昨日？それから先は中で探すしか無いわね。てか堂々と正面突破したみたいよ」
「・・・」
「・・・本当ですか？」
「・・・ホントに」

正規では無いとは言え、軍隊相手に、正面突破。

「まぁ・・・楓さんに色々教えた人らしいですからね」
「・・・ホントに？」
「・・・本当です」

アレの先生か・・・。もしかして私たちはむちゃくちゃな奴を追ってるんじゃないかと、今更ながら心配になって来た。

「何にしても！少なくとも居る場所はわかったんです！後は出たとこ勝負ですね！」

「ま、まぁ、他に手は無いからね」

乾いた笑いが響く中も車は進んでいく。

□　□　□　□

和服を着るとどうも落ち着かない。コートまで剥がれたのだから余計に。気のせいか、軽く頭痛もする。

「ど、どうかした？」

「・・・いえ、少し夜風が冷たく感じまして」

「そっか・・・それじゃ少し急ごうか」

心配そうに聞いて来た彼へと無難な微笑と答えを返すと、彼は少しだけ歩く速度を上げた。私を気遣っているらしく、ほんの少しだけの微妙な変化。

それにしても、公私で口調が変わるのは気付いているのか、いないのか・・・まぁどちらでもいいか。

食事の誘いをメリーさんに告げた時はさほどのリアクションも出なかった。意気揚々と面白がって付いてこようとするのだとばかり思っていたから拍子抜けしたくらい。・・・付いてこさせないけど。

けれども問題はその後、出かける寸前に起きた。

『せっかくのでーと何ですからおめかししないとダメじゃないですか！』
『コートは置いていってください』
『あなたはでーとに武器を持って行くんですか？』
『ルカさんって和服が似合うと思うんですよねー』

適当に身支度を済まそうとした私を、待ってましたとばかりにニコニコ顔で口出ししてくるメリーさん。なまじ言ってる事が正しいだけに逆らうことも出来ず、哀れにも私はメリーさんの着せ替え人形となった。一応、ハンドバックの中にお財布と水筒、そしてナイフを1本入れることだけは許してくれた。
・・・救いがあるとしたら、ちびっ子が寝てて気付かれなかったことね。
それにしても待ち合わせ場所へと着いた時、彼が少しぼーっとしたのが少し・・・いやかなり気になる。・・・そんなに変な格好なのかねぇ？
寒さのせいか、それとも他に理由でもあるのか、お互いに無言で夜の街をテクテクと歩いていると、やがて目的地らしいお店が見えた。
むちゃくちゃ高級でも無いけれど、むちゃくちゃ安いわけでもないという適度なお値段のお店と見た。

「ここだね」

ガラガラと扉を開けると、そのまま私を待ってくれる彼。意外と気が利くみたい？

「ありがとうございます」

譲られたので先に中へと入ると、女中さんらしき人に礼をされた

ので微笑みを返しておく。とりあえず笑う、色々あって鍛えられた表情筋はこんなときにも役に立つ。
既に話は通っているのか、彼が名前を言うと和室へと通された。
中央にはテーブルがあって、座布団は向かい合うようにして2つ。窓からは庭の景色が見える。後は壷とか掛け軸とか云々。
座布団に座るとすぐに女中さんが来て飲み物を聞きに来た。

「お酒は平気？」
「はい、種類はお任せします」
「そ、そう・・・じゃ、コレを2本・・・」
「お食事の際、何かダメなものなどはございますか？」
「その・・・蛸は少し・・・」
「かしこまりました」

そう言って深くお辞儀をすると、静かに襖を閉めて行った。・・・
メニューは完全にお任せなのかな？

「蛸、ダメなんだ？」
「蛸だけはダメでして・・・」
「へぇ・・・たこ焼きとかも？」
「はい・・・」

皆あんな気持ち悪いの良く食べれるわよね・・・。内臓とかどうなってるのよ、アレ。
その後、何が好きだとか何が美味しいとかの世間話をしていると女中さんが現れて冷酒を置いていったので、すすっとお酌をする。

「本日はお誘いいただきありがとうございます」
「そ、そんな・・・こちらこそ・・・それじゃ、乾杯」
「はい、乾杯」

そういって二人で笑い合うとお猪口を空にする。
さてさて・・・どうしようか。
トクトクトク・・・っとお酌をしながら、この先どうするかを考える。まさか世間話だけで帰る訳にも行かないし・・・。

「そういえば、お仕事の方はよろしいのですか？」
「うん、今日は休みなんだ」
「そうなんですか、お休みは大切ですね」
「あんまし取れないのが悩みなんだけどね」

彼はそういって笑うとぐいっとお酒を呑んだので、また注ぐ。あまり強くは無いほうなのか、顔が少し赤くなっている。

「・・・まだあの宿に泊まってるの？」
「はい、出来る限り出費は抑えたいものですから。何かよろしくない噂でもあるのですか？」
「うーん・・・」
「言い辛い事でしたら、無理に言わなくても結構ですよ」

聞いてみると何か言い辛そうにしたので、微笑みながらお酌をして身を引くことにする。ちょうど小鉢に入れられた料理も来た頃合。

「いや・・・そういうわけじゃないんだけど・・・ここだけの話、あそこはあまり良くない人たちが集まってるらしいんだ」

しばし沈黙のままで料理を口に運んでいると、何かを考えていたらしい彼が言い始めた。あ・・・これ意外と美味しい。

「良くない人たち・・・でしょうか？」

「そう、俺も深くは知らないんだけれど、何でもゲリラが隠れ家にしてるとか。ほら、あそこって郊外で安いし・・・」
「そうなんですか・・・ソレは怖いですね・・・」
魔術師（ゲリラ）・・・か。モノは言い様ね。
「だからあそこに泊まるのはあんましお勧めしない」
かなり酔いも廻ってきたのか、口調が砕けて舌の廻りが良くなってきた。
「ですが、そういう人たちを抑えるために寒い中、ああやってお仕事なさっているんでしょう？」
「うんまぁ・・・そうともいうね」
「では、いざというときは安心ですね」
「いや・・・まぁ・・・」
照れた様にしてお酒を呑むのですぐに注ぐ。潰す気は無いけれど、なるべくなら酔いは醒ませたくない。
「そ、そういえば旅をしてるんだっけ？」
「はい、コレまでにも色々なものを見てきました」
相手にばかり余りにも一方的に話させると違和感が起きるので、こちらのことも話す。嘘は5割ほどで。
私の話に彼がふんふんと聞き入っている暫らくの間にも、少しだけ焦り始めている内心とは違って穏やかとも言える時間が流れる。
「それじゃこの街にも観光目的で？」
「はい、それもありますが・・・少し、人を探していまして」

「人を？」
「赤色のコートを着た女性なんですが、もしかしたらご存じないでしょうか？」
「赤色のコートを着てる女性ねー・・・ちょっと待って」

やっと本題に入るも、彼はうーんと唸ったままで動かない。そして何かを思いついたかのようにして携帯を出すと、微かに震える手でボタンを押し始める。

「あの、気分がよろしくないなら無理はなさらなくても・・・」
「大丈夫・・・大丈夫・・・」

一応形だけでも心配した様子をいていると、彼は笑って電話先と話し始めた。
うん、うん、という返答をしながらこちらをちらりと見てくる辺り、どうやら状況は芳しく無い様子。
やがて話も終わると、彼は申し訳無さそうな顔をして私を見た。

「仲間内でもわからないって」
「そうでしたか・・・」
「ごめん・・・」
「いえいえ、探して頂いてありがとうございます」

軽くお辞儀をすると、お猪口を空ける。たまには呑まないと不自然になるし、呑まないと少しやってられない。

「あ・・・物知り爺さんなら知ってるかも」
「物知り・・・ですか？」

彼からの酌を受け取りながら鸚鵡返しに聞くと、赤い顔をしたま

ま誇らしげにいった。

「この街一番の物知りでね。知らないことは無いんじゃないかって言われてるから物知り爺さん」

「まぁ・・・ソレは・・・」

便利そうな人ね。

「立派な方なんですね」

「あの人なら何か知ってるかも・・・ちょっと待って、今何か書くもの探すから」

「ありがとうございます」

彼がごそごそと懐や部屋の周りを探し始めたので、ふと窓のほうを見ると見覚えのある顔が見えた。雪の様な白い肌に緋色の瞳、そして銀色の髪をポニーテールにしている彼女は、雰囲気が何処かアリスに似ている。だけどソレよりも何よりも、ここにアリスは居ないし居るはずがない。そして、そいつはメリーさんにそっくりだった。

メリーさんらしき誰かは私と目が合うと、ゆっくりと窓の下へとフェードアウト。窓からは揺れているポニーテールの先が見えるだけとなった。

「メリーさまメリーさま、ユメもユメもー」

「しーっ、ユメさん静かに・・・」

少し耳を澄ませば、ちびっ子の声まで聞こえてきた。うん・・・幻聴が聞こえるだなんて・・・私ったら・・・酔ってるのね・・・。

内から湧き上がるものを抑えるために、自然とお酒へと手が伸びる。

「書けた書けた・・・どうかした？」
「申し訳ございません・・・少し気分が悪くなりまして・・・」
「ああ、うん・・・無理はしないで？」
「はい・・・少し席を外しますね」

部屋から出る時に彼へと軽くお辞儀をしてから襖を閉める。完全に閉まりきったことを確認すると、静かに素早くダッシュ！
目指すはお手洗いだから別に嘘はついていない。到着と同時に水道の蛇口を全開にすれば下準備は完了。
目的は・・・ネズミの駆除？それにしても、捻れば水が出るってのは本当に便利。昔の人に伝えたいくらい。

「まぁ・・・純度は良くないけれど・・・」

流れていく水を眺めながら一人自重めいた哂いをこぼすと、指をぱちんと鳴らした。目立ちたくないので呪文は唱えない。
すると、水は何かに導かれるかのように宙へと浮くと、トイレの窓から飛んで行く。
その光景を確認してから蛇口を閉めると、部屋へと戻る。
私が戻ると彼は何処かそわそわしながらお酒を飲んでいたが、私に気付くと少しだけ身を乗り出した。

「だ、大丈夫？」
「はい、ご心配頂きありがとうございます」

ちらりと窓の外へと視線を送りながら座布団に座る。

「そうそう、物知り爺さん何だけどね・・・」
「はい」

ふんふん、ふむふむと彼の書いた地図を一緒に覗きながら頷いていると、顔の真横から視線を感じたので彼を見る。すると、すごい勢いで赤い顔を地図の方へと向ける。

「どうかなさいましたか？」
「な、何でもない！ソレでね・・・」
「・・・そうですか」

少し気になったけれど、何でもないと言うのだからそうなんでしょうね。再び、ふんふん、ふむふむと続きを聞く。

「お教え頂きありがとうございます」
「いやいや！こちらこそありがとう」
「・・・？」
「い、いや・・・何か良い情報が見つかると良いね」
「・・・そうですね」

そういえば外のネズミはどうしたのかな？と思って耳を済ませると、小さく『こうなれば合体攻撃です！行きますよユメさん』とか『へ？う、うん・・・』とか聞こえてきた。
・・・楽しそうで何よりで。そのまま一緒に逝けばいいのに。

「あの・・・平気？」
「・・・大丈夫です。そういえば、ネズミはお好きですか？」
「ネズミ？」
「はい、ネズミです」

くすりと笑うと、彼が外のネズミに気付かないようにと世間話を始める。

無理をしすぎたらしく、そこで私の意識は一旦切れる。

□　□　□　□

気が付くと、和服とメイド服の二人が夜の街を全力で駆けて行くのが見えた。・・・少しは隠れろ。
その背中に向かって視線で物体は殺せるか？を実践していたけれど、彼がお店から出てきたので止める。
そういえばここは何処だろうと振り向けば数時間前に見かけた料理屋。どうやら外に居るみたいね。
なにやら、素敵な思い出を共有しましたので・・・とか頭が沸いてるのじゃないか？と思われる発言が私の口から漏れた様な気がするけど気のせいでしょう。気のせいよね？・・・なんだか頭が痛い。

「ごめん、待たせたね」
「いえ、夜風は好きですので」

にっこりと微笑むと、夜の街を歩き始める。既に深夜とも言える時間帯の街はとても静か。
自然と私の口数も少なくなり、それに合わせたのか彼も静かになった。
静かな夜道ををのんびりと歩いていると、まるで何処か別の世界へと連れてこられたみたい。けれども、ここに紅白の魔法使いが出ることは無いでしょう。
検問所のあった辺りを通るけれど、さすがに深夜は労働時間外なのか誰もいない。ザルな警備ともいえるけれど・・・ここは形式だけで本命は別のところに居るんでしょうね。
やがて、会話も無いまま私たちが泊まっている宿へと着く。

長方形の箱を縦に４つ重ねたような見た目で、クレーム色の壁が薄闇にぼんやりと見える。宿というよりはただの四角い箱、というのが着いたときの私の感想。

けれども、正面くらいは外見も気にしているのかところどころ木が生えている。裏には駐車場があってそれ以外はほぼ林。本気で営業する気があったのか気になる立地ね。

「本日は送ってまで頂きありがとうございます」

「いやいや！何事も無くてよかった」

「では、道中お気をつけて。おやすみなさい」

「おやすみ」

簡単に別れを告げ、お辞儀をしてから中へと入る。

宿の中身も、１階こそ違えど２階以上は外見を見れば予想できる構造で、通路の両側には部屋が付いている。まぁ、１階も小さなロビーがあるだけで後は一緒なのだけれど。

トイレもお風呂も部屋付き。食事は自前、サービス皆無という素敵なお値段の宿。きっとここで殺人事件がおきても気に掛ける人は居ないでしょうね。

たぶん部屋の中も私たちと一緒で、玄関の正面には６畳ほどの広さで最低限の家具しかない和室、両脇にトイレと台所の構造。通路でＴ字が書けそう。

そしてここの一番の問題点だけれど、なんと階段が端にある１つしかない。おかげで一番遠い部屋に泊まると、景色もさほど変わらない長い一本道をただひたすら歩かせられる。何を考えてこんな形にしたんだろ・・・というより、非常事態にどうやって逃げろと言うんだろ？

そんなことを考えながらかつかつとコンクリむき出しの階段を都合４階分上る。私たちが泊まってるのは一番上の一番奥。つまり、一番逃げれない所。

「ただいま戻りました」

扉を開けた私を最初に出迎えてくれたのは、驚いた顔のままでこちらを見て固まっているちびっ子の姿。

「・・・・？」

ああ、戻ってなかったか。

「ユメさんが驚くのも無理ないですよー。着替えさせた私も一瞬誰かわかんなくなりましたし」

「・・・それはどういう意味で言ってるわけ？」

どうやら何時の間にやら私は変装の名人になったらしい。怪盗にでも転職しようか？

部屋に入って寝巻きに着替えようとすると、どうやら電源が入った様子でユメが起動を始める。

「ちょっと！帯引っ張るのは止めなさい！」

「ルカって和服着ると別人みたいになるのですね！」

「よしちびっ子、今すぐさんを付けろ、さもなくばその頬を伸ばす」

「やー！・・・いひゃいいひゃい！」

伸ばしたり噛まれたりする激戦を片手でしながら、メリーさんに彼から貰ったメモを渡す。

「コレ、収穫、情報、情報」

「わかりましたけど・・・なんで片言なんですか？」

噛まれてる手が痛いんだよ！こんちきしょう！

「わかった・・・わかったからちびっ子、噛むのを止めなさい。どうどうどう・・・」

「むー！」

さて、噛まれた結果唾液でべとべとになった哀れな手はどうしようか？と思うも良い手は浮かばない。しょうがないから、なるべく片手だけで着物を脱ぎ始める。

「・・・脱いじゃうのですか？」

「何よ、悪い？」

「せっかくお嬢様みたいなの・・・いひゃいいひゃい！」

第2回戦が始まる。口は災いの元よ、ちびっ子。

「ど・・・どうどうどう」

「むー！」

第2回戦は5秒で終戦。コレ以上続けると私の指の本数がキリの悪い数になって、脳内にエマージェンシーコールが鳴り響いてしまう。人質を取るなんて卑怯だと思わない？

「ル、ルカさん・・・！」

「何？どうかした？」

「このメモ・・・全く意味がわかんないです！」

「・・・言ってなかったっけ？」

「言ってませんでした」

「そう・・・」

簡単にメリーさんにメモの説明をする。片手しか使えない都合上、手早く脱ぐことが出来ないから着物が肌蹴た姿のままで。肌蹴た姿のままで！

・・・私、何やってるんだろう？

「つまり、ここに行けば何かわかるとー？」

「わかるかも・・・ね」

「ひゃにひゃにー？」

ちびっ子が喋るたびに私の指に生暖かくてぬめぬめしたものが当たる。そりゃ私の指に噛み付いたままで銜えっぱなしだものね・・・。私の指の何が美味しいのか。最悪、そのままぷっちんとするのだけは止めて欲しい。

それにしても、半裸でちっちゃい子に指を舐められているこの現状。・・・ハハッ、あの子に見られたら殺されそう。

メリーさんがちびっ子にもわかるように噛み砕いて説明すると、ふんふんふむふむと頷きながら聞き入っている。あれ？コレ指抜いてもいいんじゃないかな？

「・・・っ！」

「どうかしましたか？」

「い、いや何でもない」

ゆっくりと抜こうとすると、思いっきり噛み付かれた。咄嗟に動きを止めると噛み付いたところを撫でるように小さい舌が這ってくる。何？何がしたいの！？何の意図があって私の指を銜えるわけ！？危なく指がぷっちんするところだったじゃない！

「・・・」

「ん・・・」

軽く第一関節を曲げてみると、上目遣いにこっちの方を見ながらちろちろと舐めてくる。・・・何この状況。
誰か助けて・・・本気で。

「メリーさん・・・ちびっ子に何か教えた？」
「ナ、ナンノコトデショウカー？」

さっきからニヤニヤとしている奴に聞いて見ると、そいつはワザとらしくひゅーひゅーと吹けない口笛の真似をしながら窓の外の方を見た。
・・・なんだか突っ込んだら負けな気がしたので、ちびっ子と目を合わせる。

「むー？」
「いい、ユメ？ずっとこのままでも居られないし、もう離してくれない？」
「むー・・・」
「ね？良い子だから」

頭を撫でながら誠心誠意を込めて言うと、渋々といった感じで私の手を開放する。本気で何を教えたんだこの人は・・・。
何はともあれ、コレでやっと着替えれる・・・。よだれとか、もういいんじゃないかな？

「ところでちびっ子、メリーさん？聞きたい事があるんだけど」
「はい？何でしょうか？」
「庭で、一体何してたの？」
「・・・」
「・・・」

二人とも沈黙したままで私と視線を逸らす。
「な、に、し、て、た、の？」
「ひゃ・・・」
精一杯の笑顔を作って問いかけると、ちびっ子が小さく声を漏らした。
「そ、そんなところ行ってませんよ。ね、ねぇ？ユメさん？」
「う、うん・・・」
へー、行ってないのかー。
「そう・・・ところで知ってる？カビって湿度の高いところで生えるんだって？」
「「・・・」」
「最近は空気が乾燥してきたけれど・・・この時期でも濡れたまま乾かない服とかあったらどうなると思う？」
湿ったままの服・・・ちゃんと乾いたらいいよねー？と遠くを見ながら呟くと、二人の顔色が目に見えて悪くなった。
「・・・ごめんなさい謝りますからからカビだけは止めてください」
「何で謝るの？行ってないんでしょ？」
「い、いやー・・・ソレはそうなんですが・・・あははー・・・」
乾いた笑いをこぼしているメリーさんを同じく乾いた視線で見つめる。
見つめる。

見つめる。
見つめる。

「ごめんなさい見に行きました・・・で、ですが！それもコレもユメさんが見たいって言うからですね！」
「メ、メリーさま！？メリーさまだってもう一度見たいって・・・」
「ユ、ユメさん！ソレを言ったら・・・ひっ」
「へー？そうなの。人が何とか足がかりを掴もうと苦労してる間に・・・それはそれは楽しそうなことして・・・本当、私も混ぜて貰いたいくらい」
「・・・」
「いい？別に見に来たから怒ってるわけじゃないの」

一つため息を付くと、しょぼんとした様子の二人を見ながら告げる。

「街に入ったときに決めたでしょ？二人とも目立つんだから不用意に動かないって」

見つかって騒ぎになるとか・・・洒落にならないわよ。今までの努力が全て潰れるじゃない。

「ごめんなさい・・・」
「・・・まぁいっか。何事も無かったし」

そう告げると布団の中に潜る。
正直、今日は疲れた。

「あのー・・・ルカさん？」
「んー？」

「服は・・・どうしたら・・・？」
「外にでも干しとけば明日にでも乾くでしょ」
カビらせるとか、本気でするわけないじゃない。そもそも出来ないし。
そのとき二人がどんな顔をしていたのかは、溶ける様にして意識がなくなった私にはわからない。

□　□　□　□

街灯も無い、月明かりだけが頼りとなる深夜の街を三人で並んで歩く。動く時は三人一緒にするのが無言で交わされた約束。
そうすると、眠り姫を守る人が居ないのだけれど・・・まぁ平気でしょう。
一昔前は魔術師を名乗っていた人たちが住んでいたと言う地域に今見えるのは、朽ち掛けた住居にコンクリの壁やら、雑草の伸びまくっている庭ばかり。・・・人の住んでいる気配は皆無と言っていいわね。
私たちの泊まっているところを街外れと呼ぶなら、今歩いているところは・・・廃墟？
物知り爺さんという名のセクハラ爺は、私が訪れるとすぐに魔法使いのことを連想したらしい。
そんなコート着てる奴はこの街にはそう居ないとか何とか。二言目に、私は安産型のお尻だとかのたまったので、危なくその少ない寿命を縮めて新世界に蹴り落とすところだったけれど。
どうやらお爺さんと魔法使いはそれなりに親しい仲の様で、泊まっていたらしい場所のこともあっさり教えてくれた。
ただし、最後に来たのは3日程度前・・・今も居るかどうかは行

って見ないとわからない。
というより、情報駄々漏れなんだけれど・・・いいの？

「人気が全く無いのですね」
「深夜ですからねー。皆さんおねむ何でしょう」
「ふむふむ」
「ユメさんはまだ平気ですか？」
「だいじょぶー」

二人の気が抜ける様な会話が夜闇に響く中、どうやら目的の場所に着いた・・・かな？
いささか信じられないので、何度も地図とその家とを見比べる。

「ここ・・・ですか？」
「ここ・・・だと思う」
「ぼろぼろー」

着いた家は辛うじて雨風が凌げるかな・・・？と言える元家らしき2階建てのコンクリの箱。壁にところどころ穴が開いてるし、風は凌げないか。2階に至っては屋根すらも無い。
それにしても、何でこんなところを選んだんだろ。五十歩百歩とはいえ、もっとマシな家はそこら中にあるのに。まさか現地住民に気を使ってるって事は無いでしょう。
メリーさんも同じ感想らしく、表情がよろしくない。ちびっ子はとろんとした目でその家を見つめ・・・も、もしかして眠いの？

「ま、まぁ何か理由があるかもしれないですし・・・入ってみますか」

ランプを手に恐る恐る先導を切って中へと入ってくメリーさん。

何があるかわからない、というのが一番怖い。
ランプで照らされた1階の部屋には、腐った椅子やテーブルに壊れたテレビ、他と比べると綺麗なクローゼットに少しだけ違和感を感じるも、外見と対して変わりは無いわね。つまり生活感皆無。
2階は・・・正直あまり行きたくない。何でこの家壁はコンクリートの癖に階段は木製なのよ！
パッキンパッキンと腐りかけた椅子やテーブルをユメが壊して遊んでいる音を背景に、二人で顔を見合わせる。
無言で交わされる議題はもちろん・・・どちらが先に2階へと上るか。
メリーさんの目に断固として引かない意思が見えるし、当然ソレは私にもみえているでしょう。つまり議論は平行線。決着をつけるにはアレしかない。
さっとお互いに飛びのいて距離を取ると、右拳を腰の後ろに隠す様に構える。メリーさんは左手で右手を包み込む構え。

「むー？」

お互いに緊張が走る中、私たちの様子をちびっ子が不思議そうに見ている。
後は何かきっかけさえあれば・・・戦いは始まる。

「・・・へっくち」

ちびっ子がくしゃみをした瞬間、私たちは同時に動いた。溜めていた拳が突き出され、勝負は一瞬で終わる。

「そんな・・・」
「ふっ・・・強敵でした」

ゆっくりと崩れ落ちる私と、勝ち誇った様子で不思議そうに私を見ているちびっ子の頭を撫でているメリーさん。今この瞬間、明暗が明確に分かれた。
私が出した手はグー、対するメリーさんは・・・パー。
つまり、私が上らないといけない。

「ではではがんばって下さいねー」
「コレ・・・ホントに平気だよね？」
「大丈夫ですって！ユメさんもそう思いますよねー？」
「ねー」

適当なことを言いながら、笑顔で顔を見合わせる二人。畜生・・・登らない奴は気楽でいいな・・・。
目の前にあるのはいかにもな外見の階段。雨風に晒された木は既に変色して独特な色合いになっていて、コイツはかなり拙いぜ！と私の第六感が告げている。というか、正常な感性の持ち主なら一目見ればわかる。
でも悲しいけど・・・私たちの追っている奴は正常とは言い難いのよね。
ここで何時までも怖気づいていても何が変わるわけでもないし、気合を入れて行くことにしよう・・・。
一歩、月明かりに照らされている階段へと片足を乗せると、とても柔らかい感触。うわ・・・ギシッといった。
二歩、もう片足を次の階段に乗せる。壊れる気配は無いし・・・意外と平気かも？
三歩・・・四歩・・・となるべく衝撃を与えないように一歩ずつ登っていく。
そして五歩目に嫌な予感がして後ろを振り向いた時・・・その瞬間が来た。
私の命綱である木の板はもう限界とも言える様な切ない音を立て、

後ろを振り返った私を地の底へと叩き落とす。
せめて柔らかいところに落ちますように・・・。
祈りも空しく、私の身体を衝撃が襲う。

「うわー・・・綺麗に落ちましたね・・・」
「ルカ!?」
「あ・・・ユメさんそっちはあぶな・・・」

けれども、落ちた私を追撃する影があった。何を考えたのか、ちびっ子が階段をぶち抜き、哀れにも衝撃で動けない私に止めを刺そうと落ちてきた。
私が何をしたというの・・・。
ゆっくりと、時間が止まったかのように落ちてくる死神を見つめながら、心で涙を流す。
そして言葉に出来ない痛みが腹部を襲って、私の意識は途切れた。

□　□　□　□

あ、今アリスと通じ合えた気がする。
「ルカさーん?生きてますかー?」
ふふ・・・全く甘えんぼさんなんだから・・・。
「ちょ、ちょっとルカさん!?」
腕を伸ばしてアリスを抱きしめると、とてもやわっこい感触。ああ・・・至福の瞬間。

けれども、その至福はすさまじい痛みを伴って消えていった。

「目は覚めましたか？」

「・・・はい」

痛みで目を覚ますと、数センチ先にメリーさんのニコニコ顔。ヤバイ・・・すっげぇ怖い・・・。

余りにも見てられないので視線を横にずらすも、あるのはただ闇だけ。

み、味方は！？味方はいないの！？

「目を覚ましたなら、手を離していただけるとありがたいのですが？」

「ひっ・・・は、はい・・・」

慌てて手を離すと、どうやら離れ際に鳩尾に一発入れた様で痛みに悶絶した。

「だいじょぶー？」

「だ、だいじょばない・・・」

鬼が去ってから差し出させたちびっ子の手に捕まって立ち上がってみれば、さっきまで居た部屋じゃ無いみたい？・・・暗くてよく見えないけれど。

「ここは・・・？」

「地下室みたいですねー、どうもここで生活してたみたいです」

何処からかメリーさんの声がすると、明かりが灯された。

見えてきたのは割れた皿やまだ綺麗なベットに机。空になった缶

詰とかガスボンベの缶等など・・・。
生活感は溢れてないけれど・・・上よりはマシね。そういえば埃も無い。
壁にはチョークで地図らしきものが殴り書きされていて、その地図の上のほうに銃痕がある。コレって、もしかするとアレよね？

「ルカさんルカさん、旅をしてたって言ってましたよね？その行き先ってどうやって決めてました？」

その銃痕を見ながらメリーさんがポツリと聞いてくる。

「・・・分かれ道があれば棒倒し、水の流れに街はある、道の先には何かがある・・・ね」
「どういうことー？」
「つまり適当」

何も無い天井を見ながらちびっ子に答える。
つまりここに居た奴は壁に地図を描いて、適当にぶっ放した弾で行き先を決めたわけか。しかも・・・よりにもよって北の方に・・・。

「北・・・ですか」
「さむーいところなのです？」
「さむーいところなのです」

まぁ何にしても、ココにはもう誰もいないし誰も来ないでしょう。行き先を決めた以上、其処に留まる事は無いのだし。
用は済んだのでぞろぞろと家から出る。どうやらクローゼットの中に入り口があったみたい。
大体１時間程度しか篭っていなかったはずなのだけれど、なんだ

か外の空気がとても新鮮に感じられる。足元が抜ける心配をしなくて良いって・・・すばらしい。
他の二人も同じ気持ちなのか、思い思いに伸びをしたり空を見上げたりして地上へと出た喜びを表してる。私も釣られて空を見上げると、其処には降ってくるんじゃないかと心配になってくる星空。
この星空を見るためにこんな廃墟に居たって可能性は・・・否定できないかな。

「ここでなにをしている！」

そんな気の抜けたことをしていたら、突如罵声とライトを向けられる。・・・お家に帰るまでが遠足なのに、最後の最後で気を抜いた。
見れば黒い軍服と小銃（アサルトライフル）を構えている男たちが都合四人ほど。残党狩り・・・でもなさそうだし、見回りの連中かな。

「私たち廃墟を巡る旅をしていまして、ここにもあると聞いたので見て回ってたんです」

笑顔で息をするようにさらりと嘘をつくメリーさん。こういう手腕はさすが。
相手さんもその笑顔に毒を抜かれたのか、若干緊張を緩め、その後になにやら嘗め回すような目つきで此方を見てくる。

「ボディチェックをする・・・両手を上げて後ろを向け」
「はいはいー」

大人しく両手を上げて後ろを向けば、無遠慮に私の体をまさぐって来る誰かの手。

「やっ・・・」

隣でちびっ子の小さい声がした。こいつら、子供でもお構いなしなのか？

暫らく大人しくしていると調子に乗ったのか、手がコートの中にまで入ってきたけれど、目を閉じて無反応を貫く。まだ我慢できる範囲内だし、あまり事を荒らげたくない。

そしてその手がコートから服の中へと入ろうかとした瞬間、ちびっ子の後ろに居た男が吹っ飛んだ。

・・・限界か。

閉じていた目を開くと、後ろであっけに取られている男を裏拳で殴り飛ばしてからナイフを抜き、メリーさんの方に居た奴の首を切り裂く。血を吹きながら倒れるそいつの拳銃を抜いておくことも忘れない。

私たちの動きを見張っていた奴が小銃を構えるけれども、地面から生えてきた触手がそいつを叩き潰した。後に残るは潰れたお肉と骨の塊。

け、結構えげつないのね。

「ご、ごめんな・・・」

「もう大丈夫です。よくがんばりましたね」

メリーさんがちびっ子の体を抱きしめながら落ち着かせている中、倒れた衝撃と突然の仲間の死にまだ体が付いていけていない男へと歩き寄り、逃げないように踏みつける。ちびっ子に殴られた奴の止めは・・・一応しておこうかな。

「た、たす・・・」

ちらりと動かない男のほうを見てからそいつの頭へと銃を向ける

と、何かを言う前に引き金を引いた。
静かな廃墟に数発の銃声が響き渡る。

「コレからどうする？」
「ここには居られませんし・・・移動してもいいんですが・・・」

中身の無くなった拳銃を捨ててからメリーさんに聞くと、少し歯切れの悪い返答を残して夜空を見上げる。
そして、悲しいことに私には彼女の歯切れが悪い理由が何となくわかってしまった。

「彼のことなら気にしないで」
「ですが・・・別れとか色々必要じゃないですか？」
「いいよ。別れ話とか嫌いだし・・・それに」
『…ばい…ばい…ルカ…さん』

頭にこびり付いたまま離れないあの子の声を思い出しながら、にっこりと微笑む。

「これ以上、ここに留まる必要は無いでしょ？」

□　□　□　□

ちょこちょこと支度はしていたけれども、いざ出発となると色々買い足さないと行けないものがある。主に食べ物とか。
そんなこんなで動けないまま、2日が過ぎた。
目撃者は全員喋れない状態にしたのだけれど、念には念を入れるとか何とか、外出時には和服にならないといけなくなったのがとて

も辛い・・・。
メリーさんは笑顔で新しい服を次々と出してくるし・・・。
服も着替えていざ出発・・・というときにドアがノックされる。
外からはルームサービスだか何だかと聞こえてくる。
「ちょっと今手が離せないので、ユメさん出てもらえますかー？」
「はいなー」

台所に立っているメリーさんがそう言うと、私の着物姿をまじまじと観察していたちびっ子がとてとてとてーとドアへと駆けていく。
はてさて？ここにルームサービスなんて気の効いたものあったっけ？
悩んでいる間にもゆっくりとドアが開かれる。隙間から見えたのは・・・小銃。
私がとっさにちびっ子の元へと駆け寄る間、不幸中の幸いとも言える事態が起きた。
相手側もまさか子供が出ると思わなかったのか、引き金を引くのを一瞬だけためらった。

「ほぇ・・・？」
「っ！」

その一瞬の間にちびっ子の体を抱えて横へと飛ぶと、見た目に反して小さい銃声と共に銃弾が撃たれて私の右腕を撃ち抜いていく。
そのままトイレの扉へと激突していると、メリーさんがドアを蹴り閉めてお札の様な物を貼るのが見える。

「ちびっ子、怪我は無い？」
「ルカ・・・血が・・・」
「私は平気だから落ち着いて・・・ね？」

少し錯乱気味のちびっ子を抱きしめて落ち着かせると、怪我の有無を確かめる。服が赤く染まっているのは・・・私の血かな？何にしても、怪我は無い様で何より。

「撃たれたんですか？止血しますから、見せてください」

二度、三度とドアが叩かれる中、メリーさんが撃たれた部分を治療し始める。ドアの外からは開かないとか魔術師だとか騒いでいるのが聞こえてくる。

「結界はどれくらい持ちそう？」
「即席ですから・・・そうは持たないですね」
「正面突破はどう？」
「破られた瞬間に弾以外のものが飛んでくる可能性もありますから、あまり現実的じゃないです」
「・・・あの触手は？」
「あの子達は地面が近くないと呼べないですから・・・少なくともここに居る間は無理ですね」
「そう・・・」

そんな中を眠り姫を連れて逃げ出さないといけないわけか・・・。良い状況とは言えない。

治療も終わったようなので立ち上がってコートを着込むと、ビニール紐を箪笥の足に結びつける。途中でほどけられたら洒落にならないので、左手と歯を使ってしっかりと結ぶ。

「何するんですか？」
「ちょっくらドアの向こうの連中に挨拶してくる」
「ダメなのです！」

悠々と準備をして窓へと向かおうとしたら、ちびっ子に裾を掴まれた。

「ルカは怪我してるのですよ！？そんな危ないこと・・・」

「怪我してるからよ」

思わず哂いをこぼしてからちびっ子へと向き合うと、彼女は驚いたように目を見開いた。

「もしも耐え切れないで正面突破となったら、私が一番足手まといになるじゃない。だったら、捨て身の役は私がするのが最善でしょ？」

「で、でも・・・」

「いい、ユメ？」

理屈でわかっていても、感情が納得しない様子のちびっ子と視線を合わせる。

「あなたは私が死ぬとでも思ってるの？」

「・・・思ってない」

「それじゃ、私が少しだけ留守にする間、皆を守れる？」

「・・・うん」

「いい子ね」

こくん、と頷いたちびっ子を撫でながら立ち上がり、水の入った小瓶をポケットへと入れると、割れた窓ガラスの外へとビニール紐を落とす。

「そんな訳で少し出るわ。出来る限り早く帰るつもり」

「お帰りの際はお風呂にしますか？ご飯にしますか？それとも・・・？」
「暖かく出迎えてくれると嬉しいかな？」

そういって笑うと、紐を持って窓から飛び降りる。
どうやら外にも居るらしく、飛び降りている私を狙って銃声が聞こえてくる。
減速のためにと思って持っているビニール紐は、摩擦で擦り切れた血で滑って狙ったほどの効果は期待出来そうにない。
何とか地面に着地してから、木陰へと転がり込むと銃弾が飛び交ってきた。ヒビでも入ったのか、足が熱と痛みを持った自己主張をしてくる。
まぁ・・・意識さえあれば動くし問題は無いか。
とにかくここで立ち止まっている訳にはいかないので、銃声が止んだ隙に割れている窓から中へと転がり込む。
受身も取れずに畳へと落ちれば、口の中に広がるのは鉄の味。
見れば止血した傷が開いた様で右腕からはじんわりと血が染みてきている。
好都合なので体を起さずビンを開けると、染みている右腕へと水を流しかける。血を使うのはもっともわかりやすい禁忌の証・・・か。

『・・・遠き日の思い出をこの手に』

静かに呪文を唱えてから指を鳴らすと、すぐに霧が立ち込めて来て、やがて数センチ先すらもよく見えなくなった。
私はそれを確認すると、頭痛が酷くなっていく頭を抑えながらゆっくりと立ち上がって歩き始める。

「・・・あはっ♪」

屋内だと言うのに、昼間だと言うのに・・・霧の中に月が見えて、思わず笑いがこぼれる。
・・・いけないいけない。誰も聞いてないとはいえ、淑女たるものそう易々と笑いをこぼしてちゃダメ。
足を引きずりながら廊下へと出ればそこにも霧は立ち込めていて、足元には少しずつ量が多くなっていく水の流れ。時々何かが跳ねるような音が小さく聞こえてくる。
転ばないようにゆっくりと、1段1段踏みしめるようにして階段を上っていくと、目的の階へと着いた。
件の連中は突然現れた霧に警戒を強めている様子だけれど、その程度の警戒じゃ何の意味も無い。
静かに一人の下まで駆けると、その首目掛けてナイフを振りぬく。返す手で他の奴の背中へと突き刺せばプリンを貫くような柔らかい手ごたえ。そのまま二人とも静かに崩れ落ちた。
異変に気付いたらしい一人が小銃を構えようとするのを腕を切り落として止め、もう片方のナイフを頭へと振り下ろす。
後は扉を見張っていた最後の一人の首を後ろから切り落とせば処理はおしまい。
頭に刺したナイフを回収していると、待ってましたとばかりに水の流れが次々と死体を飲み込んでいく。
くちゃくちゃきぽきぽきとと死体を咀嚼する音が鳴る中、不意に体を支えきれずに壁へと寄りかかる。走った反動で足と頭が痛い。

「大丈夫だから・・・食べるなら早くね」

咀嚼を止めて心配そうに此方を向いた人魚へと告げると、月から逃げるように目を閉じる。何も見えない身体に、霧が纏わり付いて来るのが少しだけ心地よい。
やがて全て終わったのか、目を開くと血溜まりだけが残っていた。

さてさて・・・どうしようか？
ぱちんと指を鳴らして霧を晴らすと少し考える。
目の前には結界で封印されたドア、当然ながら普通に開けようとしても開かない。かといって大声を上げてメリーさんたちに呼びかけるのものも・・・何か嫌だ。そうとなれば・・・。
うん、強引にこじ開けることにしよう、そうしよう。
そう決めると目の前の扉を見つめ、隙間へとナイフを差し込む。
そのまま隙間をなぞる様にして動かせばあら不思議。てこでも動かないと思われた扉が開き始め・・・。
始めた瞬間、中に居たメイドの誰かさんがドロップキックを入れてくれた。
当然、暖かい歓迎の言葉が来ると思っていた私は、ぼろきれの如く壁へと叩きつけられて意識を手放しかける。

「わ・・・わっ・・・！メリーさま！メリーさまー！」

そのまま誰かさんに足を掴まれるとずるずると部屋の中へと引きずり込まれる。傍から見たら殺人を隠そうとしてる状況に見えるに違いない。未遂だけど。

「ありゃりゃー、コレは折れてますねー」
「ず、随分と暖かみのある出迎えね・・・」

それはもう、暖かすぎて寒くなるくらい。

「ごめんなさい・・・」
「まぁまぁ、ユメさんも悪気があったわけじゃ無いんですからー。・・・それにしても、また随分と無理しましたねー」

笑いながらも処置を進めていくメリーさん。早いか遅いかは・・・

比較する対象を他に知らないからわからない。
出来れば痛みも和らぐようにして欲しいのだけれど、笑ってスルーされた。

「一通りは終わりましたけど・・・あくまで応急処置なんですから、あんまし派手に暴れちゃダメですよ？」
「りょーかい」
「ではでは、私は荷物を持ってきますから少しお待ちを」
「ほら、いつまでしょげてるの」

奥でごそごそとし始めるメリーさんを眺めてもしょうがないので、ちびっ子の頭を撫でると立ち上がって数歩歩く。多少はマシになったかな？

「ルカ、ルカ？」
「んー？」
「・・・怒ってない？」
「・・・怒ってる」
「いひゃい！いひゃいです！」

びよーんと伸ばしながらメリーさんが来るのを待つ。それにしてもまさか荷物って・・・眠り姫のことじゃないよね？
そんなことは無かったようで、数秒もするとバックを背負い眠り姫を抱えた割烹着が現れた。改めて見るとすごい組み合わせね。

「ではでは、しゅっぱーつ」

状況がわかってるのかわかってないのか、メリーさんはのんきな顔で出発の合図を出す
先頭をちびっ子、中間をメリーさん、殿を足手まといと言う3人

パーティで廊下をぞろぞろ歩く。穴は後ろだけれど、奇襲を掛けるには何処かに隠れているか、壁のぼりでもしないと無理ね。
別室の扉が開いてたのでちらりと見れば、子供も大人も関係なしに死んでいるのが見える。どうも泊まってる人は無差別に襲ったみたい。銃声が小さかったのもそれが理由か・・・。

「無差別ですか・・・どっちが危険なんだか」

ポツリとメリーさんが呟くのが聞こえる。
その後は何事も無く1階まで降りられた。来るときも感じたけれど、ここに来ている人数はさほど多く無いみたい。なるべく穏便にしたいのかな。

「待ってください・・・」

階段の一番下へと着いたとした瞬間、ちびっ子から制止が掛かる。

「居る？」
「二人、こっちに来てます」

まぁアレだけ目立つことしたんだし、増援も来るか。けれど増援も少ないし、やっぱり大手を振って大々的に来てる訳じゃないみたいね。

「どうする？2階から飛び降りる？」
「そうですねー・・・」
「ユメに任せてください」

二人して悩んでいると、ちびっ子がにこりと笑って居なくなった。
それは文字通り、消えたと言っていいほど。

慌てて通路から覗くと、一人はすでに倒れており、凍ったように固まっている最後の一人をちびっ子が砕いているのが見える。きらきらと、数秒前まで人だったはずの赤い破片が通路に広がる。

「「・・・」」
「終わりました」
「い、行く？」
「そ、そうですね・・・」

褒めて褒めてーとばかしに近寄ってくる、ちびっ子の冷たい頭を撫でながらメリーさんに言って歩き始める。も、もしかすると、この子が一番危ないのかもしれない・・・。
溶けて肉片となった欠片が散らばる通路から、誰かさんが動かぬ体となって転がっている部屋へと入れば、駐車場が開けた窓から見える。何を考えて窓の先を駐車場にしたのかという疑問はあるけどこういうときはありがたい。
後は車へと乗り込んで逃げるだけ・・・なんだけど。

「居ると思う？」
「居ると思います」
「だよねー」
「むー？」

絶好の開けた場所に見えるのは、逃げようとして失敗した様子の誰かさんの死体。部屋の中から撃たれたんじゃないのなら、どう見ても待ち伏せされてるよね、コレ。
中にも死体、外にも死体。連中は素人を巻き込んでまで魔女狩りを進めたいのか。

「ということで、第一回作戦会議を開催しますー」

「わーわー、ぱちぱち」

出来る限り窓から見えないようにして、メリーさんが作戦会議を始める。

「まずユメさんが車まで行ってドアを開ける・・・出来ますか？」

「出来るー」

「うむうむ。次に私とルカさんが車までダッシュ！完璧な作戦ですね！」

作戦ですら無かった。

ところで１０秒で終わる会議は会議と呼べるんだろうか？

まぁ・・・他に案も無いんだけど。

「ではではー、始め！」

メリーさんが告げた瞬間、ちびっ子の姿が消えた。続くようにして窓から出れば、既にドアに手を掛けて開けようしているのが見える

走る私たちを守るように触手が壁を作っていく中、やっぱり足の怪我が響いてるのか、メリーさんのほうが前を走っていく。

私を守っていた触手が居なくなったので、触手連中は眠り姫を守ることに全力みたいね。

それでも全力で駆けて、あと少しで車に着くと言った所まで何とか来きたところで、大きな銃声と共に私の体を衝撃が襲った。

「ルカ！」

胸から赤い何かが吹き出て、崩れていく私の体をちびっ子が車の中へと放り込めば、そのまま扉を閉める事もせずに急発進を始めた。

「ユメさん止血を！」
「ルカ！意識を手放しちゃダメなのです！」

二人の声が何処か遠くに聞こえてくる。
途切れ途切れになる意識の中で。浮かんだのは、ちびっ子でもアリスでもメリーさんでもなく。何処か寂しげにくすりと笑うアイツの姿だった。

旅に危険は付きものです（後書き）

１ヶ月近く間が開きました
お久しぶりです
なるべく早く書くとか言って１週間も掛かるんだね、馬鹿だね
今回お友達が多忙に付き誤字チェックを自前でしたので少し甘いかも？

さてさて、世の中にはあとがきから読む人とあとがきを最後に読む人、あとがきは読まない人の３種類が居ると思います
つまり大事なことは前書きに書けということですね！
つまり考えたネタは前書きにぱなせということですね！
気分転換なのでつまらなくても気にしない

まぁ後は近況報告なので興味の無い人はスルーしてください
さてさて、季節の変わり目は調子を崩すといいますが・・・
中の人は首が回らなくなりました
一時右腕が上がらなくてこいつは拙いぜ！とかのんきに言ってたんですが、今回は首が回らなくなりました
もうね・・・９０度も横向けないんだ・・・
身体を回さないと私の視界は前方１８０度のみで出来ています
回すとパキッとなりますし、こいつは拙いかもしれないぜ！

それが原因かどうか知らないですが、精神状態もあまりよろしくないです
どうでもいいことにイラッ☆とする日々
愚痴る訳にもいかないですし、あまりに酷いのでネット上でも変なことは言わないように気をつける日々

まぁ、何がいいたいかと言うと、次話は遅れると思います
方針は決まってるんですが・・・ネタが・・・出ないんです・・・
めっさ短いのは避けるようにしますので、ゆるりとお待ち頂けたら幸いです

ではでは、少しでも楽しんでいただけたら幸いです

治療は用法用量を守れる正しい人にして貰いましょう（前書き）

微と徴を間違えないようにと、高校生の時に先生が言ったことがあります。
その覚え方は当時高校生だった私たちの脳内に深く染み付き、今でも微という字を見るたびに思い出します。
悲しいことに、私は微妙の妙を忘れたからテストでは全く使えなかったんですが・・・
その別々の漢字を間違えずに覚える方法は・・・
『パイ子さんの、おっぱいは、微妙』

関係ないですが、私は理系へと進みました

人物表
メリーさん
幽霊　すきすきーな人ですが想いが通じる日は来るのか来ないのか
叶（カナエ）夢（ユメ）
ちびっこメイドさん　昔はヒロインでした　キャラは違いますが
ルカ
魔法使い　前作主人公　光の速さで明日に向かって一足お先

治療は用法用量を守れる正しい人にして貰いましょう

宿の屋根の上で沈んでいく夕日を見つめていると、胸に鋭い幻痛が走る。その痛みを感じるたび、私はまだ諦めていないと実感できる。

逢魔が時になると理由も無く一人になりたくなる。

現と常世の境目と呼ばれるけれど、実際に臨死体験をしたとなってはあながち嘘とも言い切れないわね。

まぁ、そのおかげであの子に会えたのだから悪いこととは言えないけど。むしろ素敵な経験ありがとうと言いたい！誰に言うかわからないけどさ！

まぁ・・・とにかく、アイツではないことは確かね。

そう、あの時はアイツが居た。

けれどもアイツは好き勝手に動いて・・・。

ふと、後ろでカサリと何が落ちる音が聞こえた。振り向くとそこには、何時だかに何度か見た事がある封筒。

中身は・・・写真と便箋？こ、これは・・・！

写真にはメイド姿のアリスと、同じくメイド服姿の眠り姫が赤い顔で写っていた。アリスが！酔ってるみたいな赤い顔で！ぽけーと！

コレは・・・良い！何が良いって酔ってるみたいな顔だよ！何よりもアリス！しばらく会ってない間に少し髪伸びたんじゃない？それだけでもう私のテンションが・・・テンションが・・・！拙い何か出そう・・・それにしても、コレはお財布に入れてるマイフェイバリットアリスに並べるほどの出来のよさじゃない！

何でか眠り姫の頭の上に刺胞動物が乗っている気がするけど、そんな些細なことはどうでもいい！いっそ2枚とも家宝にしようかな？うんそうしよう！さぁ！いざ行かん！何処かわからない我が家へ！

「おおお落ちる落ちる！」

華麗に中へと明日の一歩を踏み出しかけたけれど、何とか屋根にしがみつく。脳内に投身自殺という赤い文字が点滅する。ついでに興奮も冷めた。

・・・ふぅ。まぁ落ち着け私、鼻血は？おーけー、出てない。写真は？大丈夫。興奮のあまりに写真に傷でも着いたら本末転倒じゃない。さぁ、落ち着いて写真から力を抜きましょう。ええい動け！何故動かん！

何とか震える手で写真を封筒へと戻すと、一緒に入っていた便箋へと目を通す。

中にはただ『寒中見舞い』とだけ書かれており、私が目を通し終わるのを見計らったかのようにバチッと弾けてなくなった。後には火傷と灰だけを残る

わざわざこんな手の込んだことをする奴の心当たりは一人しかいないけれど・・・無用な混乱を招くことになりそうだし、メリーさんたちには黙っておこう。

別に黙っていれば写真が独り占め出来るとか、そういう考えは全く無い。断じて無い！まぁとりあえずしゃし・・・もとい証拠は懐に仕舞って・・・と。

まぁ、なんにしても・・・。

アリスが元気そうで安心した。

「うひゃぉ！」

突如後ろから衝撃が来て、私は屋根と強い出会いを経験する。その代償として傷口やらなにやらから激痛が顔面を駆け抜ける。

激痛から逃れるためにのた打ち回っていると、半身が自由を求めて宙へと躍り出た。脳内で落下死という危険なワードが点滅しながらも、何とか屋根へとしがみついて2度目の生還を果たす。

「こんなとこでなにをしてるのですか！」

私が屋根と感動の再開を果たし、生きている喜びを噛み締めていると、舌っ足らずな声が聞こえてきた。

見れば夕日も沈んで辺りは真っ暗。どうやらいつの間にか常世へと入っていたみたいね。

「お夕飯の時間なのに来ないからメリーさまが困ってるじゃないです・・・か・・・？」

私が辺りを見渡してからちびっ子のほうを見ると、何やら驚いた様子でいるのが見える。何？何度か生死は彷徨ったことあるけど、私は死んで無いわよ？

「ご・・・ごめんなさい・・・痛かったのですか・・・？」

何やらおどおどとしながら慌てた様子で手をばたばたとさせるちびっ子。何？瀕死の私に止めを刺そうとしてるの？そりゃ今襲われたら簡単に逝ける自信はあるけど。

ふと、そこで何やら頬が濡れていることに気付いた。

手を当ててみると液体の感触。舐めるとしょっぱい。

どうやら私は気付かない間に泣いていたらしい。それにしても、正体のわからない液体を迷わず口に運ぶ辺り、我ながら命知らずよね。今に始まったことじゃないけど。

とはいえ、目の前でかしゃかしゃと腕を振り続けているちびっ子はどうしようか・・・？

見てる分には大変面白いのだけれど、お世辞にも広いとは言えない屋根の上、かしゃかしゃがぼこぼこに代わって私が新世界へと旅立つ事になる可能性も無きにしもあらず。

少し悩んでからちびっ子の前へと移動する。すると奴は何を考え

たのか、目をぎゅっと瞑って下を向いた。

「ふわぅ・・・」

私がちびっ子の体を抱きしめると、何やら変な声が聞こえて手のばたばたが再開された。暴れられると・・・き、傷ががが・・・。

「よ、よーしよし落ち着けー落ち着けー」

囁きながら背中をさすると、ばたばたも静かになって私に身を任せて静かになった。・・・少し大きくなった？胸的な意味じゃなくて。

「・・・怒ってないのですか？」

「ごめん、びっくりさせちゃったね？」

「んーん・・・」

少し頭を振るとぎゅーっと優しく抱きついてくるちびっ子。・・・もしアリスに見られたりしたら、言い訳できないわね。い、いや、コレには正当な理由があるわけだし下心なんて微塵も無いし！そ、それに！見た目が見た目だし！たぶん大丈夫よね！？うん！大丈夫！・・・本当に大丈夫？

それにしてもまさか泣いていたとは・・・。知らなかったけれど涙もろいのかねー、私。

「・・・もう大丈夫？」

「やー・・・」

何故か危機を感じて離れようとするも、悲しいことにちびっ子は私に抱きついたまま離れようとしない。子供特有の温もりを感じる

中、私の寿命が縮まらないことをただ祈る。
神様とか信じてないけどさ。

「・・・」
「・・・」

無言で抱きついてくるちびっ子の頭を撫で続ける。
それにしても、血生臭くないのかな？
見上げれば忌々しいほどまん丸なお月様。
ふと、あの馬鹿が好きそうだな・・・と思ってしまったのはこの子が居るからか。

「・・・ルカ」
「んー？」
「願いは・・・ないのですか？」
「・・・」

願い・・・か。
無いといったら嘘だけれど、それは叶うことは無いことだし、叶えちゃいけないもの。

「ユメ、最初に言ったでしょ？」

少し離れると、ちびっ子と目を合わせている。彼女の黒い眼を見つめていると、くすくすとアイツが笑う声が聞こえてくる気がする。

「例え願いがあっても、私は叶えて欲しくない」
「そう・・・ですか」
「それじゃ、もう降りようか」
「うん」

「よし、いい子だ」
にこりと笑うとちびっ子の頭を撫でて立ち上がり、梯子へと手を掛ける。
トントン、と注意深く下を見ながら降りている最中、ふとちびっ子は来ているのか気になって見上げてみる。すると其処に見えたのは可愛らしいクマさん。
コレは・・・。
「・・・ちびっ子？」
「んー？」
「クマさんパンツは止めときなさい」
「・・・」
私が指摘をすると、ちびっ子は無言で私を梯子から蹴り落とした。
浮遊感漂う数秒間、見上げれば満天の星空と怖い顔のちびっ子が見える。そ、そういうとこメリーさんに似てき・・・

□　□　□　□

『前略、何処に居るともわからない愛しのアリス。お元気ですか？
私は屋根から落ち、動くことを禁止された状態のまま早3日が過ぎました。
今となっては財布に入れてるあなたの写真に、お休みとおはようを言うのだけが私の癒しです。
近頃はすっかり寒くなったので、どうか体調を崩さない様祈ってます。
それでは、可能な限り早い再開を願ってます。

ルカより』

などと手紙を書くも、何処に出せばいいのかわからないからどうしようもない。

どうしようもないので、色々と痛む体をこっそりと洗面台まで動かすと火をつける。私の愛よ、アリスへと届け。

「あ・・・また勝手に動いて！ダメじゃないですかー」

あわよくばそのまま新鮮な外の空気を・・・等と考えていたら、窓へとたどり着く直前でメリーさんに捕まり布団へと戻される。

「もう、また手紙なんか燃やして！ホントは動けないほどの重症なんですからしっかり療養してください」

「いや・・・それはちびっ子が・・・」

「言い訳無用です！」

「・・・はい」

銀色のポニーテールを揺らしてぷんぷんと怒るメリーさんは、何処か子供っぽくてアリスに似てる気がする。たぶん気のせいなんだけど。

「・・・なにひてるんでふか？」

「いや、何となく」

特に意味も無くメリーさんの頬をつまむと、大変素敵なジト目で出迎えてくれた。わー、こわい。さてさて、メリー山が爆発しない内にこのやわっこいぽっぺから手を離すことにしましょう。離せ！伸ばそうとするな！二度と立ち上がれない体にされるぞ！

「そうは言っても終始寝たきりじゃ退屈で・・・」
「怪我してるのに勝手に屋根に上って、挙句落ちてた人に自由意志なんてありません！」
「いや・・・それはさ・・・」
「弁解の余地も無いです。大人しくしてれば数日で治っていたはずなのに・・・もう勝手に動いちゃダメですからね！」
「・・・はい」

どう考えても分が悪いので大人しく引き下がる。まぁ、死ななかっただけ儲けもん。
そんなこんなでだらけた布団生活を送っていると、メリーさんは立ち上がってドアまで歩いていく。

「お買い物行って来ますねー」
「あいあい・・・そういえばちびっ子は？」
「んー・・・まだおねむの時間じゃないでしょうか？」
「ふーん・・・」
「ではではー、帰ったらプリン持って来てあげますから、ちゃんと良い子にしてなきゃダメですよ？」

メリーさんはそういって笑うと部屋から出て行った。プリンか・・・プリン・・・しかし良い子って具体的に何してれば良いんだろう？
天井へと返ってこない問いを向けてみるも、どうやら無口なのか沈黙のまま。もし返って来たら全力で排除するけど。
天井へとナイフを向けながらぼーっとしていると、隣の部屋から物音がしてきたのでナイフを布団の中へと隠す。
ゆっくりとそちらの方を見れば、眠そうに目を擦ってるちびっ子。

「めりーさまは？」
「買い物、まだ眠いの？」

「うー・・・」

うーうーと唸りながら、ちびっ子はもそもそと私の布団の中へと潜り込んできた。優しく髪を撫でれば、返ってくるのは静かな寝息。

・・・寝てると普通の子供よね。

穏やかな寝顔を眺めていると、そんな考えが浮かぶ。この子が血まみれになって戦うなんて、誰が想像するんでしようね。まぁ、戦い方を仕込んだ奴は予想してた様だけど。

「かえで・・・」

「・・・ふっ」

隣から小さな呟きが聞こえてきた気がしたけれど・・・気のせいよね？うん、気のせいのはずよ。だってアイツと私が一緒だなんて・・・考えただけでぞっとする。私、アイツ嫌いだし。

内心そう思うも、行動は変わらずちびっ子の頭を撫で続ける。

何時までも代わりをし続ける訳には行かないけれど・・・せめてその時が来るまでは。

「全く・・・世知辛い世の中ね」

ポツリとつぶやいた声は誰に届くわけも無く、空中で分解して何処かへと消えていく。

□　□　□　□

メリーさんが帰ってきたのはそれから暫く経ち、絶えず頭を撫で続ける単純作業に私の腕が悲鳴を上げ始めてからの事だった。

「ただいまー、良い子にしてましたか？」
「良い子にしてましたー」

ニコニコ顔で帰ってくるメリーさんにニコニコ顔で返す。
彼女はプリンの乗っているお盆と両手の袋をがさがさと机の上へと置くと、ちびっ子の顔を覗き込んで頬をぷにぷにし始める。

「よく寝てます？」
「うん、寝すぎと言っていいくらい寝てる」

おかげで私の腕に乳酸が溜まりまくっているけど。

「それは何よりです。ではではお待ちかねのプリンたーいむ！」
「わーわーぱちぱちー」

意気揚々と体を起してテーブルへと向かう。ついに・・・ついにこの時が来た！退屈な布団生活に舞い降りた光！つまりプリン！
が！しかし！無情にもテーブルにあるのはプリンだけ！スプーンが無いんだよ！

「あの・・・メリーさん？スプーンは？」
「ここにありますよー」

いや、見せられても困るんだけど。
メリーさんは楽しそうにその手で持ったスプーンでプリンを掬う。
黄色いソレはとても柔らかそうで美味しそう。コレはアレか？生殺しって奴か！？見せるだけ見せて食べさせないって奴！？
しかしメリーさんはそこまで酷くは無かった。ただし、甘くも無かった。

「はい、あーん」
「・・・なにをしていらっしゃるのですか？」
何故か私の目の前へと差し出される黄色いお菓子。
「あれ？食べたくないんですか？」
「・・・いや、そうじゃないけど・・・一人で食べれるから」
「ダメですよー」
口を開けるたびに進入しようとするスプーンを避けながら言うと、メリーさんが笑いながら言った。
「ルカさんは怪我人なんですから・・・私が食べさせてあげます！というわけで、あーん」
「・・・」
思わずその甘い文句に乗りそうになる私。だがしかし！だがしかーし！
私にはアリスという心に決めた子が居るわけであって・・・プリン欲しさにホイホイと他の人に口をあけるのか！？もしもそんな光景をアリスが見たらどう思うか！考えてみたことはあるのか！？
・・・半殺しで済んだらいいな。
つまり断じて私は屈するわけには行かないのである！
「ほらほらー、食べたいんでしょう？美味しいですよー？はい、食べたいならあーんして下さい」
ニコニコ顔でスプーンを出してくるメリーさんが今は悪魔に見える。というより、コレ絶対楽しんでるよね？私見て楽しんでるよね

!?いっそ割り切って食べてしまおうか・・・

「あー！プリン食べてるー！」

私が悶々とプリンとアリスとの板ばさみに悩んでいると、布団のほうから声が聞こえてきた。

「ありゃりゃ、起きちゃいましたか」

「ねーねー、ユメの分はないのですか？」

「うむうむ、ちゃーんとありますよー。はい、あーん」

「あーん」

何はともあれ、メリーさんの矛先は私からちびっ子へと移ったらしい。その間にスプーンを奪取すると、甘いソレをゆっくりと口へと運ぶ。

ああ・・・至福・・・。

「あ、ルカさん。包帯を替えますから脱いでください」

消毒液やら包帯やらを準備しているメリーさんに言われたので、寝巻きにしている浴衣を脱いでまたプリンを口に運ぶ。傍目には変態にしか見えないこの行動も、プリンの前には無力なのである。

それにしても、一度食べされたら二度目は自分で食べさせるのね。まぁ、食べさせながら治療は出来ないから当然だろうけど。

「そーいえばー」

私が半裸のままで黙々とプリンを口へと運んでいると、二つ目へと突入したらしいちびっ子が口周りを汚しながら聞いてきた。ちびっ子よ・・・もっと味わって食べろ。

「ルカってぺどなのー？」
「っ！」

ごふっとプリンを吹き出しそうになるも、気合で押さえつける。
またコイツは・・・。

「よしちびっ子、そこに座りなさい。何処でそんなことを聞いてきたのか知らないけれど、いきなりそんなことを言ってはいけません！」
「だってだって、よくちっちゃい子の写真見てるじゃないのですかー」

み、見られてたのか・・・。
だ、だけど！何よりもコレだけは言っておかないといけない！

「ちびっ子よ・・・この子はちっちゃい子に見えるけど、私より年上なのよ？つまり！私はペドじゃない！」
「そうなのですか？」
「そうなのです！」

ほへー、と写真を見ているちびっ子を見ると、どうやら誤解は解けたようなので安心してプリンを口に運ぶ。
それにしても誰だ！こいつにそんなことを教えた奴は！

「そうですよーユメさん。ルカさんはペドじゃなくてロリコンって言うんですよ？」
「ろりこんー？」
「うむうむ、ロリコン。子供好きって意味です」
「ふむふむ」

ここに居た・・・。
子供になんてことを教えてるんだこの人は・・・。元、人らしいけどさ！

「そういえばー、メリーさまはエウナさまのことが好きですよね」
「へ！？」
「だっていつも寝てるエウナさまを見ては・・・」
「ゆ、ゆゆゆゆユメさん！そ、そそそそれ以上はダメです！」

ちびっ子があどけない表情でメリーさんの秘密を暴露すると、彼女は不思議な言葉を連呼しながら面白いほど真っ赤になった。

「そうなの？」
「うむうむ！でもでも、エウナさまはどんかんーでいちずーだからメリーさまの気持ちに気付いてないのです」
「ふーん・・・そうなのー。で、そこのところどう何ですか？メリーさん」
「そ、それはですね・・・その・・・えっと・・・」

面白いので突っ込むと、メリーさんは赤い顔のままもじもじしながら何かを呟いているその間にちびっ子は3つ目のプリンへと手を伸ばし始めた。こいつ・・・もしかして確信犯？

「そりゃ・・・す、好きとか嫌いとかでいわれたら・・・す、す、好きですけど・・・わ、私としては傍に居られるだけでもいいかなー・・・とですね・・・い、いえ違います！今の無しです！」

わお、一途にも恋する乙女がここにも一人。

「そそそうです！おおお薬でしたよね！」

微笑ましい気持ちでその様子を眺めていると、突如メリーさんは消毒液が染み込んだガーゼを私の顔へと叩き付けた。

「目が・・・目がぁー！」

「わわわ！えっと・・・そのどうしよ・・・あの・・・出来れば両想いだといいなー・・・って・・・」

よほど混乱しているのか要らぬカミングアウトが続行される。何でもいいから手をどけて！目が痛いから！消毒液染みて来てるから！

「あの・・・その・・・あぅ・・・」

何とかガーゼから逃れた私が見たものは、真っ赤な顔のメリーさんがぷしゅうーと気絶しているところだった。

・・・お互いに苦労してるね。色々と。

「むむー？メリーさん寝ちゃいました？」

全ての元凶はプリンを平らげると、不思議そうにメリーさんを覗き込んでいる。治療は・・・まぁ、メリーさんが起きたらでいいか。そう決めて服を着ようとすると、何故か笑顔のちびっ子に止められる。

その瞬間、ものすごく嫌な予感がした。

「しょーがないですから、ユメか代わりに治療してあげるのです！」

「い、いや・・・それはちょっと・・・」

「だいじょーぶです！メリーさんがしているところを何度も見たの

ですから！」

いやいや！そういうのはきちんと知識と技術があってからする物だから！消毒液掛けるの包帯じゃないから！治療方法違う！

「それに・・・ルカが怪我したのはユメのせいなんですし・・・」

「そ、そう思うならもっと別の方法で償った方がいいんじゃない」

「いえいえ！償えるときに償わないと！何時何が起きるかわからないのです！」

しょぼんとした様子のユメを説得しようとするも効果は見えない。というより、そう思うならそっとしておいて欲しいと切に願う。

拙い・・・このままだととても拙いことになる・・・！

「あ・・・ダメなのですよー！」

「ひっ・・・」

その自分の直感を信じ、四つんばいで部屋から逃げ出そうとするけど、無情にも足を掴まれる。何とか其処に踏ん張ろうとするも所詮怪我人、抵抗空しくずるずると元居た場所へと引きずられる。

コレは・・・腹を括るしかないか。

「さぁさぁ！ユメを信じてください！」

ユメはドアに鍵を掛けると、素手で包帯を千切りながら満面の笑みでいった。

今、私の生死を賭けた戦いが開かれる！

治療は用法用量を守れる正しい人にして貰いましょう（後書き）

数時間後、其処には何も反応しなくなったルカの姿が・・・！

礼によって例の如く、今回も誤字チェックが甘いです
自前だとどうしても甘くなっちゃうんだね

ちなみに、本作品は一度没になった話を改変して出しています
たまに文脈が変なことがあるかもしれないですがスルーしていてください

最近作者が情緒不安定気味であまり安定しておらず、執筆が上手く進みません・・・
少しずつでも進めて行くつもりですので、待っていただける方はだらりとお待ちください

ではでは、少しでも楽しんでいただけたら幸いです

それでも私は走り続ける（前書き）

我が家には3匹のペットが居るんですが・・・
アロワナと、ナマズと、にゃんこで、それぞれ
ちびと、ナマズと、毛玉、という名前が付けられてます
ちなみにアロワナはアロワナとも呼ばれてます

こうして見ると・・・なるほど私の作品に名前付きキャラが少ないわけですね・・・

人物表
エウナ
吸血鬼　隠された嗜好が今明かされる・・・！かも　さて、どっちがぞっこんでしょう

楓
魔法使い　けもみみ巫女さん　全作通しての便利屋さん

アリス・イン・ワンダーランド
魔術師　恋人はルカ　ヒロイン？ええ、そんな時期もありました

ミツキ
クラゲ　まいふぇいばりっときゃら　いつかメインの話を書きたい
今回は基本人型です

それでも私は走り続ける

居間に首を突っ込んで誰もいないことを確認してから、抜き足差し足で忍び寄る。電気は付けない。別に付けても付けなくても視界に問題ないし、コレといってやましいことをしようというわけでもない。

何かが音を立て無いかと耳を澄ましながらも、なるべく素早く、音を立てないようにしてソファに座る。

アリスはまだ寝てる様子。良く絡んでくる紅白のあの子は肝心なときに居ないし、別に肝心でないときにも居ない。相変わらず何をしてるのかわからない子ね。

そもそも、居たら絡んでくるからすぐにわかるでしょうし。

ということで今現在は私の天下とも言える！つまり今なら何をしても何も言われない。

何かが聞こえてくるたびにピクッと動きの止まる自分へ鼓舞しながら、後ろでに隠しておいた本をテーブルの上へと置く。タイトルは『なめくじとカタツムリの戦い』だけれど、内容は１８０度を通り越すほど違う。何でもこのなめツムリは大ベストセラーらしく、この本の隣に置いてあった。まぁ、大きさが一緒なら何でも良かったんだけど・・・何らかの意図を感じる気がする。というより嫌がらせ？

表紙を捲って現れた本当のタイトルは、メイドさんの奮戦。ドジなメイドさんが主人のために日々がんばる話を書いたほのぼのストーリー・・・とか何とか。

あまりにも人気が無さ過ぎて小売店はもちろんのこと、大型の本屋にも置いていないのという絶滅危惧種状態の本だけれど、本屋に並んでも2冊ほど凹んだままで何時までも放置され続けている様な本だけれど・・・そこには数秒前までべたべたしてたのに突然スイッチが切れた様にして冷たくなる巫女服の少女も、お酒を飲んだだ

けで意味不明の行動を始める魔術師もいない。ただあるのは夢だけ！そう、夢だけ！桃源郷はここにあり。ただ・・・あまり知人に見せたくないのが欠点ね。

扉絵をぺらぺらと捲れば、其処には白黒で書かれたメイドさんが見える。普通扉絵といったらカラーなのだけれど、この本は違う。何でもカラーにすると赤字が加速したとかで、初版だけで哀しみを背負ったらしい。まぁ、カラーもモノクロもさほど違いは無いような気がするのだけれど。

高鳴る己を抑えながら、表情筋に力を入れてゆっくりとページを捲っていく。私は読むのは早くないから・・・読めるときに読み進めたいところ。

静かな夜の部屋、驚くほど穏やかな時間が流れる。

「へー、エウナさんってこういうの読むんですか」

私の真後ろで誰かの声がした。

ぎぎぎと音が鳴りそうなぎこちなさでそちらを向くと、アリスが私の読んでいる本を覗き込んでいる。間の悪いことに開かれたページはちょうど挿絵の部分。もしくは挿絵に入ったから声を掛けたのかしらね？

ちょうどいい塩梅に意識は目の前の本に向けられていて、こちらにはあまり気を配ってない様子。

・・・よし、消すか。

結論を出すと右手を叩き込む。けれども、期待していた手ごたえは無く、振りぬいた拳は空しく空だけを叩く。

「い、いきなりはダメだとお姉さん思いますよ！」

「大丈夫、少しばかし違う世界が見えるだけだから」

「それ絶対大丈夫じゃないと思います！」

ソファの後ろで倒れているアリス目掛けて倒れこみながら入れた肘打ちは、転がって避けられる。しょうがないので、そのまま回転を利用して踵落としを狙う。
右足が何かをぶち抜く手ごたえと一緒に、数秒前まで床だった何かが辺りに散らばる。

「ひゃぁ！」

悲鳴を上げながらもコロコロと転がって私と距離を取るアリス。それにしても・・・インドア派だと思っていたけれど、意外としぶといわね。
なら、もう少しだけ本気で動いていいかな？

「ちょ、ちょっと待ってください！本がどうなってもいいんですか！」
「・・・」

アリスの言葉で動きそうになった体を強引に止める。ちらりと後ろを見れば、細長い竜が本の近くに居るのが見える。
先に・・・あっちか。

「ま、まずは話し合いをですね・・・ひっ！」

何かを言っているアリスを無視して後ろに跳ぶと、邪魔な竜の首を握りつぶす。断面から赤い何かが溢れ出て、暗かった部屋の中に鮮明な色を付けていく。

「・・・で、本がどうしたって？」
「そ、そのですねー」

アリスへとにっこりと微笑みかけると、彼女は乾いたような笑いを浮かべて固まっている。特に利用価値も思いつかないので手の中にあるものを床に投げ捨てると、べしゃっと湿った音を立てた。

「と、とりあえず落ち着きません？」

「あら、私は冷静よ？」

頭で問題ないかしら？当たり所が悪くない限り死ぬことは無いでしょうし。後遺症が残ったら・・・まぁそのときはそのときで。

狙いを定めながら一歩、また一歩とアリスへと近づけば彼女もまた一歩ずつ後ろへと下がる。永遠に縮まらないかと思えた二人の距離は、アリスの背中が壁に当たることで終わりを告げた。

「覚悟はいい？大丈夫、たぶん死ぬことは無いと思うから」

「思うんじゃ嫌です！」

そう・・・それは残念ね。

「あ、楓さんだ」

「っ！？」

アリスがそう言った瞬間に振りかぶっていた腕を戻すと、出来る限りの速度で本へと駆け寄る。そのまま本をソファの下に隠すと、出来る限りの笑顔を作って後ろを振り向く。

「お帰りなさい楓、早かったのね」

私の視線の先には、窓から差し込む月明かりが優しく降り注いでいた。

「と、思いましたけど・・・気のせいだったみたいですね」

背中の方から、とぼけたアリスの声が聞こえる。こ、こいつ・・・。

とはいえ、今の一言で冷静になってしまったのも事実。見られてしまったものはしょうがないし、ここは開き直る・・・しか無いか。

「落ち着きました？」

「・・・一発殴っていい？」

「やめてください死んでしまいます」

「・・・」

にへら、とした顔を見ていると完全に戦意が無くなった。ついでにやる気も無くなってソファにだらりと座り込む。

「まぁまぁ、そう落ち込まないで・・・想像してみてくださいな」

「・・・何よ」

ニコニコしながら覗き込んでくるアリスを睨むも、いまいち効果は出ない。

「メイドさん、あなただけのメイドさんをです」

私だけのメイド？そうね・・・。

小柄で精一杯だけど少しドジなのがいいわね。うん、決して完璧鉄面皮で黙ってると人形と区別がつかなくなる様な子じゃなくて、表情豊かで喜怒哀楽がはっきりしてる子。

それでお茶の時間とか何かになるとトテテテテーって走ってきて、私が危ないと思った時には転んでしまう。

慌てること無いのに、言うと少し涙目になりながら『ご、ごめん

なさい・・・』って言うの！
けれど笑いながら頭を撫でてあげると、少し照れたような顔でぴとっと抱きついて、小さく『えへへー♪』とか聞こえてくる・・・。
コレは・・・いいっ！すごくいいっ！それでそれで・・・

「えへへー・・・」
「・・・」

けれども、私の妄想は目の前のアリスの顔を見て一瞬で冷めた。
わ、私もあんな顔してたのかしら・・・？

「アリス、あなた相当締まりの無い顔になってるわよ・・・」
「・・・エウナさんこそ、能面みたいですよ」

にやけるのを我慢してるんだからしょうがないでしょう。
その後、二人して深呼吸をして落ち着くと、なんとも居心地の悪い空気が部屋の中を支配する。

「そ、それはともかくですね・・・」

どうやら自分で振ったくせにこの話は流すことにしたらしい。

「私みたいな人はともかくとして、エウナさんには楓さんがいるじゃないですか」

今となってはもう見たくも無いほど忌々しい教科書をかき集めながら、不思議そうにアリスが言う。

「彼女ならエウナさんが望めば、メイドさんの1度や2度くらいしてくれると思うんですが・・・違うんですか？」

「それは・・・」

たぶん、してくれるでしょう。

けれど私にはわかる。何故かわからないけれどわかるのだ！

あの子がメイドをするときは、喜怒哀楽が全くわからない鉄面皮で、黙っていると人形かどうかの区別がつかなくなるようなメイドになると！

それ私の求めてるのと違うから！いや嬉しいけど！もっと・・・こう・・・！

「ふーん・・・贅沢なんですね・・・」

私が言葉に出来ない魂の叫びをあげていると、何かを察したようで冷めた目線をプレゼントされた。

哀しみから逃れるべく、無言で立ち上がって窓を開けると、私を優しい月明かりが出迎えてくれる。

ああ・・・今日は月が綺麗ね。

「何が悪いのよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

ビシィっと振り向き様にアリスを指差すと、そのまま外へと飛び出す。

別に行きたい所なんて無いけれど、今は何処へなりとも走りたい気分。

□　□　□　□

エウナが謎のポーズを決めて走り去ったことを確認してから、少

女はソファの下をごそごそと漁り始める。
そして目的のものが見つかったらしく、1冊の本を手に取るとソファに座り、巻数を確認した。
「あ、これ新刊じゃないですか・・・何処で買ったんでしょう」
一人呟くと、少女はにやけていく顔を時折引き締めながらページを捲る。

□ □ □ □

何となく夜中の街を走る。私は、なんだか、もっと恐ろしく大きいものの為に走っているのだ。とか何とか言った人もいたらしいけど、私の隣にはセリヌンティウスの弟子は居ないし、止められたら素直に止まる自信がある。ところで、私は何で走ってるんだろ？
夜空にはあの子が好きそうなまん丸なお月様。アレを美味しそうと言ったのは何時だっけ？
月に近づこう何て思っても無いけれど、強く地面を蹴って空高く跳ぶ。誰かさん家の屋根の上へと不法侵入してみれば、目の前には建設途中のまま放置されてる塔の姿。バベルの塔は届かず壊れたけど、この塔は何処まで伸ばすつもりなんでしょうね。何にしても、私が好きになることはなさそう。
そこでふと、アリスの家に楓が帰ってきてお土産を見せびらかしている光景が見えた。
『お買い物のとちゅーでケーキ買ってきたんですよー』
『それはそれは、早速食べましょうか』
『んー？エウナさんは？』

『エウナさんは・・・たぶん要らないでしょうし、3人で食べましょう』
『あいあいー』
気のせいか声まで聞こえてくる。それにしても・・・。
「随分勝手なこと言うわね・・・」
一人呟いて帰り道を急ぐ。早くしないとケーキが・・・ケーキが！というより、あのクラゲは人として数えていいの！？そんなことより私を呼べよ！呼べるんだから！
色々な事を考えながらも足はフル回転。今、私は風になる。
家の前でドリフトを決めながらドアへと駆け寄り、勢いを殺さずにそのまま開け放つ。なにやらバキンとか不吉な音がした様な気がしたけれど、全力で見なかったことにする。今は何よりも私も食べるという事を知らせなければ！
「ちょっと！私も食べるわよ！」
片手が空いてないので、もう片方の手でドアを開け放して叫びながら駆け込むと、それぞれの反応が返ってきた。アリスは驚いたようにして目を丸くしながら固まっているし、楓は私が来るのがわかっていたみたいにくすくすと笑っている。クラゲは何を考えてるのか良くわからないけど。
そして硬直が溶けていく様に、アリスの視線がゆっくりと私の手のほうへと移っていく。それに釣られて、私の視線も先ほどから何かを握り締めたままの自身の手へと向かう。
そこにはドアノブと、なにやら見覚えのあるドアだったであろう物体があった。うん、どう見ても玄関のドアね。い、何時の間に外れたのかしら？

ゴン、と私の手からドアの残骸が落ちる音が静かな居間に響く。

「・・・楓さん」

「んー？」

「ケーキを食べるのなら、紅茶を淹れてきてくれませんか？」

「はいなー」

硬直している私を気にもせず、楓がクラゲを頭に乗せてトテテテーと居間から出て行く。

それを確認してから、アリスはにっこりと微笑んだ。

私は反射的に屈むと、正座をしてアリスへと頭を垂れる。最後に土下座したのって・・・覗きがばれたとき？何にしても、未だ一連の流れに衰えが見れないのは哀しむべきか嬉しく思うべきか。

「あらあら、いきなり土下座なんてして・・・どうしたんですか？」

心の中で嘆いてると、頭の上でアリスの声がした。気のせいか今ので室温が数度下がった気がするけど・・・もしかして怒ってない？

けれども頭を上げれば、其処にはとても綺麗に微笑むアリスさんのお姿。全力で地面と向き合うことにする。上を向いて歩けないときも時にはある。

「私ね、言いましたよね？」

「・・・」

私が何も喋れない間にも、アリスは話を続ける。

「ドアを開ける時は壊さないように注意して・・・ってちゃんと言いましたよね？」

「・・・は、はい」

「今が夏とかなら別にいいんですよ？ドアが無いのは少し見栄えが悪いですが、風通しが良くなったくらいで死ぬことは無いですから。ですけど、今は冬ですよね？」
「・・・」
「真冬になろうというこの時期、どうしてエウナさんはドアをぶち抜いて来るんですか！」

静かなアリスの声と同時に蹴り上げられると、腰に何かが抱きついてきた。見れば竜が私に熱いハグをしたまま、キリキリと万力の如く力を込めてくる。

「そういえば、エウナさんって吸血鬼でしたよね？なら骨の１本や２本、何の問題も無いですよね？」
「い、１本や２本じゃすまな・・・」

満足に声も出せないまま、激痛と一緒にゴキッとした音で私の体は崩れ落ちた。

「全く、これからは気を付けてくださいね？」
「・・・」
「あれれ？返事が無いですね？それじゃもういい・・・」
「は、はい・・・気をつけます・・・」

何とか返事をしようとすると、蚊の鳴くような声しか出なかった。それでも許してもらえたのか、竜が消えたのでやっと安堵する。
何はともあれ、安静にしてれば勝手に治るでしょ。
激痛の過ぎ去る時をひたすら大人しく待っていると、ドアを開けて楓とミツキが入ってきた。ミツキのお盆にはティーポットとカップ。楓のお盆には・・・ワインとスポーツドリンク？
二人とも、倒れたままなるべく動かない様にしている私を不思議

そうに見つめながらも、テーブルへとお盆を置く。
き、気のせいであって欲しいけど、アリスがにっこりと微笑んだような気がした。

「楓さん楓さん」
「んにー？」
「エウナさんが抱きしめて欲しいって言ってましたよ」

こ、こいつ・・・なんてことを言うんだ！
アリスの言葉を聞くや否や、狐耳を動かして全身で喜びを表す楓。

「ちょ、ちょっと待ちなさ・・・」

制止の声は届いているのかいないのか、彼女は嬉しそうにぱたぱたとコートを揺らして駆けてくる。・・・悲鳴が出るのだけは何とか堪えるべく、歯を食いしばって来るべき瞬間に備えよう。

□　□　□　□

「早速だけど、王様ゲームをしようと思うの」

無事骨もくっつき復活すると、ずっと考えていた計画を実行すべく発言する。

「はい？」
「王様ゲームをしようと・・・」
「王様ゲーム・・・ですか？」
「そう、王様ゲーム」

「・・・」

アリスから何か可哀そうなものを見るような視線が帰ってきたけれど、くじけちゃダメよ私。とりあえず、アリスへと話しかけるのはこわ・・・無駄だと知ったので楓に聞いてみる。

「楓はしたいよねー？」

「嫌です」

「そ、そう・・・」

即答された・・・。

楓に即答された・・・。

嫌ですって楓に即答された・・・。

「ま、まぁまぁ楓さん、そう一言で切り捨てなくても・・・」

「嫌です」

あまりに見てられなかったのか、アリスがフォローしているのが何処か遠く聞こえてくる。

けれども、ミツキが私の体をぺしぺしはたいてきた事によって私の意識は復活する。そうだ・・・なにをしているのだ私は！

「ということで、王様ゲームをしましょうか」

「エウナさんは少し黙っててください。いいですか？楓さん、いくらエウナさんが変なことを言ったからと言ってもですね・・・」

「・・・」

ふ、ふふ、今日は月が綺麗ね。

窓から月を見上げて思わず現実逃避をすると、ミツキが労わるかのようにドレスを引っ張ってきた。お返しに私も頭の上へと手を伸

ばして彼女の頭をなでると、気持ちよさげに目を細める。ああ、今はあなただけが私の癒しね。

「ほら、ちゃんとごめんなさいして」

「ごめんなさい・・・」

暫らく二人だけの世界に浸っていると、話が済んだらしく楓が頭を下げてきた。しょんぼりとした頭を見ていると、何故か申し訳なく思えてくる。

「私は気にしてないからいいわよ、それよりアリス？」

「はいはい、王様ゲームですね。それじゃ準備してきますから、ちゃんといい子で待っててください」

呆れた様な顔のままアリスが居間から出て行くと、ぴとーっと楓が引っ付いてきた。ぴょこぴょこと耳が何かを訴えるようにして動く。

「ん？」

「なでなでー？」

「ああはいはい、なでなでー」

「んー♪」

どうしてか判らないけれど、楓を撫で始めるとミツキは身を引くようにして離れていった。

けれども私は忘れていたのだ。

この子とする王様ゲームがどういうことになるのかを。

□　□　□　□

『王様だーれだ』

気合を入れて目の前の棒を引き抜くと・・・無情にも3の数字。コレで都合6回目、未だに私に当たりは来ない。

自分が当たりじゃないことがわかると、次に気になるのは王様になったのが誰かということ。

見れば、アリスが赤色の棒を握り締めているのが見えて、無意識に安堵の息を吐く。

「・・・それじゃ、3番が1番にケーキを食べさせてください」

あまりの平和さに思わず涙が出そうになりながら、楓の口にケーキを運ぶ。

「はい、あーん」

「あーん・・・んむ・・・」

その際にきちんと汚れた口周りを拭いてあげるのも忘れない。・・・何か言いたげな視線が私に向けられてる様な気がするのは何でなのかしらね？

「それじゃ7回目、行きますよー」

命令が終わると、王様（アリス）の掛け声で次のゲームが始まる。終わりが無いということでゲームは10回戦まで、つまりチャンスはあと3回。

『王様だーれだ』

それにしても、この掛け声に意味はあるの？とか思いながら抜いた番号は・・・また３番。
けれど憤るよりも先に確認したいのは王様が誰か。もしもあの子に渡ったら・・・。

「今回はボクみたいですねー」

嬉しそうににっこにこしながら赤い棒を振り回しているのは、本日４度目の王様となる楓さん。ちなみに、アリスが２回、ミツキか１回、王様になった。私には一度も来てない・・・しかも王様は来ないくせに、当てられる回数はトップという意味不明な状況。

「ではでは、２番さん」

どうやらアリスが当たったらしく、表情が強張る。

「腹筋１００回で」

コレでアリスが本日の腹筋レースへの参加を飾ることになった。トップとの差は約３倍！果たして追いつけるのか！まぁ、追いつくには残りの王様を全部楓が取って、全部アリスに当てるしかないけれど。
最後の方は息も絶え絶えになりながら腹筋を続けるアリス。その姿はとても感動的だけれど、ここに居る面子に感動を期待するのは無謀ね。

「ひゃ、ひゃーく・・・」
「うむうむ、ではでは８回目ー」
「す、少し休ませ・・・」

『王様だーれだ』

敗者の言葉は無情にも無視され、次のゲームがスタートする。
引いた手元には見慣れた数字、そろそろ赤い子が来てもいいのよ？
王様はミツキで、紙に書いた文字は「一気飲み」だった。平和・・・に見えるかもしれないこの命令だけど・・・一気飲みする対象がアリスなのよね。それにしても・・・それぞれほぼ同じ命令しか出さないわね。
ソレはもう、ほとんど気力だけでしているかのような見事な一気飲みを見せてくれるアリスさん。全てが終わったときにはスポーツ飲料をごくごくして、真っ赤な顔が出来上がり。アレ？お酒にスポーツ飲料って平気だったっけ・・・？

『王様だーれだ』

疑問を持つ間にもゲームは進んで早9回目。コレで残すところ王様ゲームは後1回・・・なのに・・・何で！何で王様が来ないのよ！
見れば王様は赤い顔のアリスだった。赤色が赤色を呼んだのかしらね？そう考えると、楓の王様が多いのも納得できる。

「わたしが・・・おーさまですねー」
「ちょ、ちょっとアリス・・・大丈夫？」
「だーいじょーぶです！それじゃ1番ー！」

そう言いながら何故か楓を指差すアリス。どう見ても大丈夫に見えないのだけど・・・。

「犬になってくださいー！」
「・・・」

その瞬間、確かに室内の時間は凍りついた。確かに楓の頭にあるのは狐の耳だし、狐は犬と言ってもいいかもしれない！でも・・・それはどうなの？色々と。

一番最初に解凍されたミツキが素早く動くと、楓の首へと首輪を付ける。そしてそのまま首から伸びている紐を・・・な、何で私に渡すのかしら？

アリスはその光景を満足そうにうむうむと一人頷くと、続ける。

「ではでは、鳴いて貰いましょー！わんわん♪」

「・・・」

少しの沈黙の後、楓の首がゆっくりと、少しずつ紐の先を辿っていく。やがてその視線は私で止まり、能面の様な笑顔をこちらに向けていらっしゃる。え・・・？私！？私が悪いの？

「・・・わん♪」

こ、コレは・・・！

思わず楓から視線を外すと天井を見上げて、溢れ出そうになる何かを堪える。お・・・落ち着け、落ち着くのよ私。冷静になれ。そうよ、いつもの楓に首輪が付いただけじゃない。うん、何も問題は無いわ。背徳的な感じが何ともたまらな・・・オーケー？オーケー。うん、オーケー。首輪一つでココまで変わるのね。それにまだ直接的な接触は無いじゃない。うん、大丈夫、大丈夫よ・・・今日は楓はつけてたっけ？うん、うん・・・？もしつけてないと胸の感触が直に・・・。

「ひゃぅ！」

突然やわっこいものが体に抱き付いてきて思わず声が出た。見れ

ば首輪を付け、けもみみを嬉しそうに揺らしている楓さんが私の腕に抱きついているではないか！そしてふにふにと腕に当たる何か。
思わぬ緊急事態に私が抱きしめるか否かで片手を上げたり下げたりしている間に、楓は少しだけ背伸びをすると、ちゅっと唇に柔らかい感触を残して離れた。
ふ・・・ふふふ。

「おー！」

何処か遠くで誰かが歓声を上げている声が聞こえる。

「アラヤダもうコンナ時間じゃない。さ、遊びはココまでにして今日は、ね、寝ましょうか」
「わう♪」

ぼーっとする頭で何とかそれだけを搾り出して部屋から出ようと歩き出すと、楓はくるくると私の周りを回って付いてくる。ふふ・・・いい子ね・・・。

「そ、ソレジャ私たちはもう寝・・・」

笑顔でお別れを告げようと振り向くと、素早く駆け寄ってきたミツキの蹴りが私の脛を直撃する。

「べ・・・べんけぇ・・・」

あまりの痛さに蹲ると口から変な電波が発信される。その間に楓は元居た場所にトテテテテーと戻ってしまった。思わず視線を上げると、とても素敵なミツキさんの冷たい視線を視界の端で捉えたので、大人しく地面と見つめ合って脛の痛みに耐える。さりげなくド

レスを上げて脛を確認すると、悲しいことに青白く痣になってる。ヒビ・・・で済んでたらいいな。

「ではではー、第１０回ー。王様だーれだー」

未だ立ち上がれないままでいる私を無視して、能天気なアリスの声が部屋の中に響き渡る。幸か不幸か、痛みで本来の目的を思い出したので、気合で立ち上がると棒へと手を伸ばす。

その気合が呼び寄せたのか、どうなのか、私の手元へと滑り込む赤い印。ついに・・・ついにこの時が来た！

意味のわからない腹筋をさせられ・・・他人にケーキを食べさせてあげ・・・さらに脛の骨までやられる・・・そんな私にもついに光が！

私は王様の印である赤い棒を掲げると、高らかに宣言してゲームセットとなった。

「全員メイド服ね！」

□　□　□　□

かくして私の願いは叶えられた。けれども、誤算が一つだけ・・・。

「何で私のスカートこんなに短いのよ・・・かなり寒いんだけど・・・」

「しょーがないじゃないですか、エウナさんの大きさに合うメイド服が無かったんですから」

「ですよー、我侭はめー！」

メイドさん二人に言われて思わず黙り込む。
全員メイド服・・・悲しい事にこの言葉には当然ながら私も含まれていて、そしてさらに悲しい事に私に合うサイズの服が何故かミニスカートの物しかなく、せっかくだから写真撮影しましょうか！という楓の一言で雪の降る寒空の下にミニスカートという格好で震えることに・・・。
まぁ・・・それはともかくとして・・・。
目の前には楓とアリス。二人とも同じメイド服なのだけれど、楓はしっかりとした雰囲気だしアリスは何処かドジな感じがする。ああ・・・眼福。惜しむべきは、楓が赤いコートを着込んだままということかしらね。
ちなみにミツキはゲームが終わるとすぐにクラゲに戻り、私の頭に居座って動かない。

「ではでは、撮りますから並んで下さいな」
「あなたは写らないの？」
「ボクは記憶に残るのはいいですが、記録に残るのは嫌なのです」
「・・・どういうこと？」
「まぁまぁー、雪も降ってますし、早く撮りましょー！」
「おー！」

まぁ、楓の言ってることがよくわからないのは今に始まった事じゃないし、寒いのは同意なのでアリスの隣に並ぶ。

「さぶさぶ・・・」

するとこの酔っ払いは何を考えたのか、突然私の腕に抱きついてきた。

「ちょ、ちょっとアリス！離れなさい！」
「ぬくぬくー♪」
何故か顔に熱が集まっていくのを自覚しながら慌てて引き剥がそうとするも、酔っ払いは至福の表情で離れようとしない。
「・・・動かないで下さいね」
冷たさを感じる声と一緒にパシャッとフラッシュが点滅すると、カメラから写真が吐き出される。か、カメラからの視線が怖い・・・・何はともあれコレで家に戻れ・・・。
「ひっ・・・！」
アリスをくっつけたままで、意気揚々と開け放されたドアから家へと戻ろうとすると、短刀が私の頭の横を掠めて壁に突き刺さった。
「・・・もう1枚撮りますからこっち向いてください」
「は、はい」
と、とにかく今は逆らわないほうがいいわね・・・。
元に戻ると楓のほうをゆっくりと振り向いて固まる。すると今度は無言でカメラのフラッシュが焚かれた。
「はい、こっちがエウナさんの分です」
「んー？」
難は去ったのか、それとも何か考えているのか、ニコニコと笑顔で差し出された写真には、メイド服を着た赤い顔のアリスが同じくメイド服を着ている私に抱きついている姿が写っている。笑顔のア

リスとは対照的に、私の顔が引き攣って見えるのは気のせいじゃないでしょう。

「あれ？もう一枚のは？」

「あっちは寒中見舞いで送ります」

寒中見舞い・・・？誰か送る相手なんていたっけ？

送る相手について想いを巡らせていると、楓がそれにしても・・・と続ける。

「お二人とも、仲がよろしいんですね」

「へ・・・？」

楓はさっきまでの表情とは一転した無表情で言い放つ。その差に頭が追いつかないで固まっていると、今や来るもの拒まずとなった家へと入っていくメイドさん。

「ちょ、ちょっと待って楓！」

如何にしてあの子の機嫌を回復させるべきか、知恵を総動員させながらも、慌てて楓の後を追った。

□　□　□　□

今となっては誰も居ない、もう朽ちかけている屋敷のテラスに一人の少女が居た。少女は鮮血を思わせる真っ赤なコートと巫女服に身を包むと、無表情のままで一人空を見上げ歌を歌う。

「とーりゃんせー・・・とーりゃんせー・・・」

やがて少女は空から視線を落とすと、一枚の写真を手元から取り出す。

三日月の下、少女はじっと写真を見つめる。しばらくの間無言で見つめていた少女は、その写真を愛おしそうに一撫ですると、手元の赤い封筒へと入れる。

そしてそのまま封筒を地面へと置くと、ペンダントを一振りして杖へと変えて、封筒をトンと突いた。

封筒に浮かび上がるピンポン玉ほどの大きさの火。けれどもそのピンポン玉は大きくなり、封筒を飲み込んで灰だけを残す。

すると、風も無いのに灰が舞い上がっていく。

灰の行く末を見つめると、無表情のままだった少女はくすくすと笑った。

「行きはよいよい・・・帰りはこわい・・・」

それでも私は走り続ける（後書き）

私にしては珍しく月末での投稿！

うんまぁ・・・毎度毎度前書きにいちいちネタなんて思いつかないですよ

（＜●＞（＜●＞д＜●＞）＜●＞）ドードリオ！とか考えてましたが！

ポケモン楽しいですよねー

私はライトなので固体値とか気にせずに好きな子使って殿堂入りまでがんばってます

ギギギアルが好きでした

それでもダルマなら・・・ダルマなら何とかしてくれる・・・！

さてさて、次回予告でもしようかなーと思った次第ですが・・・予告って難しいね

およそ予定通りなら次回は告白回になります

例によって例の如く、告白回と言っても甘くなる予定ないから！

あくまで基本ほのぼの、たまに殺伐を目指してます

ちなみに二人とも正式な告白はしてないです

つまりまだカップルじゃないんだよ！

次の話は決まってますから中の人のＭＰ次第でそれなりに早く書けるはず？

話に関するメモ書きが０なのが少し気になりますが・・・

ではでは、少しでも楽しんでいただけたら幸いです

全力疾走、ソレはやってはいけない最後の手段（前書き）

次は告白回だと言ったな・・・
アレは嘘だ

ごめんなさい・・・

人物表
メリーさん
幽霊　紳士です　触手出したり槍出したり

ルカ
魔法使い　いつかと違ってちゃんと魔法も使うよ！　今のところ霧とかくらいですが

叶（カナエ）　夢（ユメ）
ちびっこメイドさん　使う魔法は楓さんとほぼ同じ　特に説明しないので雰囲気で

全力疾走、ソレはやってはいけない最後の手段

地図を片手に旅館の廊下をとことこ歩く。敵を知り己を知れば云々・・・という言葉に当てはまるかは知らないけど、地図も無しに旅なんか出来るか。

買い物＝おやつ、という単純な思考回路で付いてきた誰かさんは「いざというときのために探検してくるのです！」とか言って何処かへと消えたのでここには居ない。

アイツは屋敷には緊急時の隠し扉があるとでも思ってるのかねー？何処かの洋館じゃあるまいし、そうそうぽんぽんと隠し扉や部屋が見つかっちゃ隠してる意味ないじゃない。ところで、いざというときって・・・何？

まぁ、色々旅してると何が起こるか何て判らないか。

「メリーさん？頼まれた地図買って来たよー」

「『きゃー、やめてー』『へっへっへ・・・よいではないか、よいではないか』」

言いながら襖を開ければ、其処には数日を共に過ごすであろう和室・・・と何かをしているメリーさん。

座っているメリーさんの前には、脱がしている途中で突然誰かに声を掛けられたから思わず止めた、みたいな格好のままの眠り姫と荷物の中に入ってたはずの眠り姫のドレス。

赤い顔のまま鼻にティッシュを詰めている彼女は私に気付くとゆっくりと、まるで機械の様な動きでこちらの方へと向いた。同時に緩んでいた赤い顔がまるで溶けた様に無表情になる。

「・・・」

「・・・」

室内を沈黙が支配する中、静かに襖を閉じると一つ深呼吸して気分を落ち着かせる。
とりあえず現状を整理しよう。
メリーさん、眠り姫を着替えさせる。
恋する乙女である彼女は着替えさせている途中でふと魔が差し、一芝居打つことに。
誰も知らない二人だけの秘密が出来上がる。
そこに殺人現場を目撃する一般人の如く、私が乱入した・・・と。
あれ？コレって結構拙いんじゃ・・・？

「・・・へ？」

突然私の頭の横を突き抜ける一本の槍。も、もう数センチずれてたら・・・お話の中で暗殺される人みたいな光景が発生したね。ま、まぁわざと外したんだよね？・・・ね？
それでも嫌な予感は拭えず、廊下へと続くドアを開けると、後ろで襖の開く音がした。
振り向くと、槍を片手に無表情のままこちらを見つめていらっしゃる銀髪の女性。

「じょ、冗談だよね？」

全力で平和的解決を目指すべく笑顔で聞くと、打って変わって彼女も笑顔になった。

「もう、冗談に決まってるじゃないですかー！」
「そ、そうだよねー！」

そのまま二人で笑いあう。ふと、メリーさんの目から光が消えた。

や、殺られる！
一瞬でドアの外へと転がり出ると、全力で廊下を走り出す。後ろは見ない、見たくも無い。
ただドアの開くバタン、という音と閉じるであろうガタンという音がしたから、何かが外へと出たのは確か。
アリス・・・助けて・・・。
ここには居ないあの子に嘆きながらも、距離を離すべく階段から飛び降りた。

□　□　□　□

私のレーダーが曲がり角からちびっ子が来るのを察知したので、たたらを踏みながら慌てて止まる。その私の様子を見たメリーさんも少し後ろで止ま・・・れなくて盛大に転んだ。

「へにゃ・・・」
「大丈夫？」

倒れこんだメリーさんに手を貸すと、パンパンと服に付いた埃を払ってあげる。

「あ、ありがとうございます・・・居ますか？」
「・・・居るはず」

そう答えると、一緒に笑顔を作ってすぐに来るであろうちびっ子を迎える。

「やぁちびっ子、もう探検は終わったの？」

「・・・？」

私が片手を上げて和やかに話しかけると、曲がって来た小さな女の子が不思議そうに私たちを見て通り過ぎて行った。

「・・・別人でしたね」

「・・・別人だったね」

廊下で笑顔のまま固まる私たち。

「・・・さ、さぁルカさん！冥土に逝く準備は出来ましたか？」

気まずい雰囲気を跳ね飛ばすようにして槍を構えるメリーさん。

「ふっ・・・どっちが逝くことになるのかしらね！」

悲しいことに、ナイフを抜いて応じなければならない私。

「二人とも、何しているのですか？」

「こ、これはこれはユメさん、ききき奇遇ですね」

「ほほほホントね、探検は終わったの？」

「・・・？」

私たちの、悪戯が見つかりそうになったから全力でごまかそうとする様な笑顔。ちびっ子は不思議そうな顔だ。

・・・たらり、と背中を冷や汗が流れていくのを感じる。

けれども努力が実ったのか、それとも元々気にしない性格なのか、ちびっ子は笑顔を見せてくれた。安心した私たちも心からの笑顔を見せる。

「おーきな温泉があったのです」
「ふむふむ、そうなんですかー、どれくらい大きいんです？」
「これくらいー！」

両手を広げて全身で大きさを表すちびっ子。殺伐とした現状、この子だけが救いね。

「それでねそれでね！」

ふんふん、ふむふむと二人で探検の内容を聞く。内容的には旅館図でも見ればわかりそうな平凡なものしかないけれど、それでも新鮮なのか楽しそうに話す。どうやら隠し扉の類は見つからなかったみたい。

「それは色々見つけたんですねー」
「うん！それでルカと一緒にお風呂に行こうと思って探していたのです！」
「へ、へぇー、そ、そうなんですかー」

まさかのご指名。そのとき、確かにメリーさんの笑顔が強張ったのが見えた。当然ながら、私の笑顔も違う理由で強張る。

「・・・残念ですが私とルカさんはコレから大事な用があるんです」
「よー？」
「うむうむ、よー」

ねー？と聞いてくるメリーさんに哀れな子羊は頷くことしか出来ない。

「そうなのですか・・・それは残念です・・・」

「まぁ、温泉は逃げないし後でもいいでしょ？」

言いながら、しょぼんとするちびっ子の頭に片手をぽんぽんと置く。

「ですねー、後で皆で！ゆっくり入りましょう」

「・・・はい」

「うん、いい子いい子」

少しの間頭を撫でた後、ちびっ子はとたとたと私たちを通り過ぎていく。時折振り向く彼女に笑顔で応えていると、やがて角を曲がって見えなくなった。

「・・・行きましたか？」

「・・・行っちゃったね」

「それじゃ・・・」

「ま、待った！」

にこりと笑って何処からか槍を取り出すメリーさんを慌てて止める。

「私たち、まだ準備体操をしてないじゃない？コレから激しい運動になるかもしれないんだし、きちんと今後のことも考えて体をほぐすのは大事だと思うのよ」

「おおー、それもそうですねー」

「でしょー」

ハッハッハー、と和やかに笑いあう最中、突然突き出された槍を半身を開いて避ける。胸の前ぎりぎりを槍が通っていくのを感じながらも、床を踏み込んでスタートダッシュを決める。今だけはボン

キュッボンなナイスバディじゃなくて、自己主張の激しすぎない一般的な体系であったことに感謝したい。切実に感謝したい。

「ちょっと！準備体操は！？」

「大丈夫ですよー、すぐに準備体操なんて必要のない身体にしてあげますから」

ぜんぜん大丈夫じゃねー！

走りながら強化符を取り出すと、魔力を叩き込んで発動させる。

とにかく、この鬼ごっこは絶対に負けられない。

子羊にも意地くらいはあるところを見せてやる。

□　□　□　□

玄関から外へと飛び出すと、身を切るような冷たい風と素足に突き刺さるアスファルトが出迎えてくれた。出来れば盗んだバイクで走り出したい・・・機動力的な意味で。

もうすぐ赤い服の変質者が出歩いても違和感の無くなる日が来るのか、ところどころの木々にキラキラと光るイルミネーションが見える。サンタが街にやってくるが静かな街に響き渡っているというのに、今現在では悪霊が私を追ってくる。泣きたい・・・。

ちらりと後ろを見た感じだと、メリーさんは地面すれすれを低空飛行しながら外へ飛び出して来ているのがみえる。なるほど、アレなら足も痛くないし機動力もあるね。墜落すればいいのに。

とはいえ、確実に距離は離れている。あの忌々しい触手も地面がなければ出ないはずだし。後は距離を稼ぐだけ稼いで、ほとぼりが冷めるまでの時間をどこかで過ごすだけ！

ふと、ものすごく嫌な予感がしたので横に跳ぶ。すると、私の数

センチ横を貫いていく触手さん。暗闇に赤黒く映るソレはアスファルトも何のその、盛大にぶち抜いて破片を辺りに撒き散らしてくれる。見ればキラキラの下からにゅるにゅるな触手さん達が生えているでは無いか！何処から出ても綺麗じゃねぇよ！

そして掘った穴から生えてくる新たな触手さん達。その触手さん達を避ければその穴から第三第、第四の触手さん。私が避け続ける限り、絶え間なく続く触手さんの穴掘りに終わりはあるのか！私が避けれなくなる以外の方向で！

強化符込みで無茶な回避運動を続けているせいか、足が段々と動かなくなってくる。その気になればソレこそ死ぬまで動けるけど、瀕死の重体でもあるまいし・・・何より代償が怖いから絶対にしたくない。自分の魔法で死にかけるとか笑えないし。

「しまっ・・・」

やがて、飛び散った欠片が限界に近い足に当たって転ぶ。ソレはもう・・・筋肉痛の箇所を指で突付かれたような激痛が走る。

転んでしまえばもう限界。一度切れた糸は容易くは繋がらない。

「やーっと捕まえましたよー」

それでも何とか立ち上がろうとしたところで、空から粒子と一緒に声が降り注いできた。

「鬼ごっこに負けたものは次の鬼・・・だっけ？」

「そうですねー、地獄の案内人にでもしてあげましょうか？」

「・・・全力で辞退する」

ため息を付くと、後ろに隠してあるナイフの柄に片手を掛ける。ナイフだけでメリーさんと戦うのはー？うん、無理、絶対無理。と

にかく、不意打ち気味で今の流れになったから手札が少なすぎる。

「フハハハ…怖かろう！！」

「・・・はい？」

「しかも脳波コントロールできる！」

以下にして切り抜けるべきか考えていると、メリーさんが危ない電波でも受信したのか何かのたまい始めた

「しかも手足を使わずにコントロールできるこの触手を使う私の気持ちに気付かないとは！つくづくエウナさんというものは、御し難いな！」

「いやそれはあなたの態度が問題なんじゃ・・・」

どうやら地雷を踏んだらしく、メリーさんはピタっと動きを止めると目に涙を溜め、後ろを向いて蹲った。

「私だって・・・ヒック・・・私だって・・・」

そのままえぐえぐと涙を堪える声が聞こえてきて、原因を担った私としては非常に居心地が悪い。

「ほら、私が悪かったから・・・ね？泣かないで」

とりあえずその辺にあった触手を切り抜いてからメリーさんへと近づき、触手で涙を拭く。時折ビクビクと痙攣する触手は、何故かスポンジみたいに吸収率が良くて涙を吸い取る吸い取る。うわぁ、すごい気持ち悪い。

「よしよし・・・いい子いい子」

それでも何度か拭いながら頭を撫でてあげると、落ち着いたのかえぐえぐが止まった。同時に用済みとなった触手を地面に落とす。うわ・・・べしゃって鳴った。

「大丈夫？続けられる？」

こくこくと頷くのを確認すると、元居た位置に戻ってナイフに手を掛ける。

「し・・・しかも脳波コントロールできる・・・」
「いやそれはもういいから」
「・・・ヒック」
「・・・ごめんね、私が悪かったね。続けてくれる？」
「は・・・ヒック・・・はい・・・エッグ・・・」

どうしても言いたいのか、ひっくひっくと繰り返される電波をため息を付きながら聞き流す。それにしても、やっぱりジョーカーを切るしかないか。

「・・・そんなにため息ばかり付いていると幸せが逃げちゃいますよ？」

また一つため息を付いていると、槍持った元凶（メリーさん）が涙を拭いながら言った。ああ、もう涙は止まったのね・・・私も幸せと一緒に逃げたい。

「一応聞いておくけど、平和的に解決する気は無い？」
「何言ってるんですかー、私の好きな言葉はラブ＆ハルマゲドンですよ？」

「・・・・」

・・・愛と最終戦争？あながち間違っても・・・いや、今はブゥンブゥンと先ほどとは正反対なにっこにこ顔で近づいてくる悪霊を何とかするほうが先ね。

「へぇ、それは残念ね。実はこんなものを拾ったんだけど・・・」

「・・・？」

未練を振り切りながら財布から写真を取り出し、ご老人の印籠の如く突き出すと、メリーさんの笑顔が無表情になった。そのまま硬直するあなたと私。あなたの手には長い槍が、私の手には1枚の写真。さながら何故か殺人直後の写真を見つけた一般人が脅迫しているかのよう。あれ？その展開だと私殺されない？

自分の選択肢に迷いが生まれた瞬間、夜街に鮮血が飛ぶ。

思わず手を当てるも血はだらだらと止まることを知らず、自身の割烹着を赤く染めていく。

私の手にはメイド服を着た眠り姫の写真、メリーさんの手には抑えきずに溢れる何か。

「もしも平和的な解決をしてくれるのならプレゼントしようかと思ったんだけど、出来ないんじゃしょうがないよね？」

後一押しと判断して写真をひらひらと目の前で振ると、彼女の頭の動きに連動したポニテがひょこひょこと揺れる。ココで『写真欲しい→私殺す→はっぴーせっと』とかいう短絡的な思考が彼女の頭の中で起きない事を本気で願いたい。

戦々恐々としながらメリーさんの言葉を待っていると、手に持っていた槍が消えて無表情が笑顔になった。鼻血は出したままだけど。

「まぁ今回はノックもなしに入った私が悪いんだから・・・ね？」
「しょしょしょしょうがないですねー。まままま全く、ルカさんはあわてんぼさんなんですからー。ところで・・・」
「はいどうぞ」

写真を彼女に渡すと、止まりかけていた鮮血がまた流れ始める。幽霊って失血多量で死んだりするのかな。まぁ、もう死んでるし死にはしないか。

「それじゃ私は先に帰ってるね」
「・・・へ？あ、ちょっと待ってください」

いざ帰らん！と言う瞬間に声を掛けられたので振り向くと、私に向けられている一本の槍。

「・・・何？」
「ソレはソレ、コレはコレ」

・・・気付かれたか。

「話が違わない？」
「平和的解決ですよね？大丈夫です、地獄送りはしないようにしますからー」
「そう・・・けどいいの？」

片手を高く上げると、警戒する様に身構えるメリーさんに向かってにこりと笑う。哀しいことに、黙って地獄送りにされるほど素直に育てられなかったし。私の成長は途中から捻じ曲がってる。

『遠き日の思い出をこの手に』

ぽつりと呪文を唱えると、涙を拭いた触手を呼び水にして水を呼び、高く上げた指を鳴らす。すると、何かが跳ねるような音と共に纏わり付く様な霧が出てくる。
まだ、月は見えない。

「さっきと違って、条件は五分よ！」
「・・・面白いですね！たかが霧程度、何の障害にもなりません！」
完全に霧が充満する前に戦闘開始の合図を叫ぶと、今度は距離を詰めるべく駆け出す。それを阻むようにして襲ってきた触手は片手を犠牲にして何とか防ぐも、速度は落とさない。

「なんとぉぉぉぉ！」
「化け物か！」

□　□　□　□

触手を防いだときに肩が外れた腕を庇いながらも襖を開ける。骨は軋んでるし、筋肉は限界を訴え続けてる。おまけに全身かすり傷やら何やらで、身体は悲鳴をあげてる。
互いに殺さないようにしながら本気で戦うのは意外と疲れる・・・。本当に疲れた。それにしても・・・アリスの写真惜しかったな・・・。いやでも！私にはまだ希望がある！メイド服を着て欲しいなら出会ったときに頼めばいいじゃない！こう・・・ルカさまルカさまってあの少し舌ったらずな声で色々と・・・うん、いいね！そのためなら土下座すらもして見せよう！
・・・ふぅ。まぁ、それはともかくとして今日はもう寝たい。身

体痛いし。

「ただいまー・・・」

「あ、ルカ、待ってたのですよー！」

ちびっ子は地獄の三丁目辺りを走り切り、何とか帰還した私にトテテテーと近寄ってくると、何故か私の腕を掴む。

「さぁ早くお風呂いくのです、おふろー」

「いやその・・・私疲れて・・・それに肩も外れてるし」

「んんー？」

私の意志と関係なしに、力なくぷらぷらと揺れる腕を不思議そうに見つめると、急に喜色満面の笑みになった。なんだか、ものすごく嫌な予感がするのは気のせい？

「何だ！そんなことならユメが治してあげるのです！」

「い、いや！それは遠慮した・・・」

私が最後まで言い終わる前に、グキッと嫌な激痛と代償に片腕が動くようになる。悲鳴すら出る余地は無かった。

「おっふろー♪おっふろー♪」

「・・・」

もう抵抗する気力もなく、ずるずると引きずられる様にしてちびっ子に連行される。

「むむー？そういえばメリーさまはー？」

「あの人は・・・うん、少し一人になりたいって言ってたよ」

「そうなのですかー」

貧血に加え、私の肘打ちを貰ってアスファルトへと沈んだ彼女の事を思い出しながら答える。放置してきたけど・・・うん、平気でしょう。触手は動くみたいだったし。

それにしても、私が一体何をしたというの・・・。

温泉で襲うであろう激痛に頭を痛くさせながら誰かに嘆く。

全力疾走、ソレはやってはいけない最後の手段（後書き）

本当は告白回とこの話を１つにして出すつもりだったんですが、中の人の体調の関係とお友達の助言から予定変更しました
一応今月中に出すのが目標ですが・・・頭痛との兼ね合い次第で無理となります
頭が痛い時に執筆したくないの・・・

少しでも体調のいい時にちょっとだけでも書くようにしてますので、気長にお待ち頂けたら幸いです

あ、今回のネタがわかりたい人はガンダムＦ９１の戦闘シーン集を見てみると判ると思います
ものすごく関係ないですが、ＰＳ３のエクバ始めました
初心者なので気晴らしにＣＰＵ戦でチコチコ練習中

きゃー！酷いミスがある！
修正しました
後お友達からわかりづらいと指摘されたところを一部変更
チェック甘くてごめんなさい

ではでは、少しでも楽しんでいただけたのなら幸いです

恋人になったからといって焦ってはいけません（前書き）

居酒屋行ったらマンボウのお刺身ってあったんですよ
美味しかったんですよ・・・
まさかその一週間後急性腸炎で入院するとは思いませんでした
ということで作者はメリークルシミマスでした
マンボウは関係ないと思うんですけど！

食べ物気をつけよう・・・ね？

まぁ、冷やしトマトにお砂糖が意外と美味しかった

関係ないけどキルミーベイベーが面白い
４コマ漫画っていいですよね！
あ、ただの宣伝です

エウナ
吸血鬼　吸血鬼である必要性とか考えたら負け　基本打撃　学習？
しないさ！

楓
魔法使い　以外と魔法を使わない魔法使い　何度も言いますが告白
はしてないから！

アリス・イン・ワンダーランド
魔術師　便利屋さんですが・・・地味？　もっぱら召喚とか火とか
２代目

ミツキ

クラゲ　いいよね！　来年こそ水族館に行こう　人だったりクラゲだったり　刀

魔術師＝魔法を使う人

恋人になったからといって焦ってはいけません

赤いコートを着ている少女が、親の敵の如くガラスケースを睨みつけている。ケースの中には色とりどりの魔の産物。別名をケーキ。クリスマスに一人で食べとそのあまりの美味しさに思わず涙が出そうになるアレである。大変おいしゅういただきますが、作者はぼっちじゃないです。そう思っていたのに、急性腸炎でそれどころじゃなくなったよ畜生！今年は入院クリスマス・・・。

「うむむ・・・何にしましょうか・・・」

悩みに連動するかのように、少女の狐耳がひょこひょこと揺れる。もうすぐ閉店とも言える店内、お客と呼べそうなのは少女ともう一匹。・・・単に他の客が近寄らないだけとも言える。現に店内へと突入した何人かの勇者たちは、赤いコートに巫女服とひょこひょこと揺れる耳、そして隣でふわふわと浮いているクラゲを見ると、愛想笑いを貼り付けて回れ右を始める。

「ミツキはチョコとイチゴどっちがいいですか？」

「・・・」

「ふむぅ・・・フルーツリストでしたか」

少女は頭の隣に浮いているクラゲ、ミツキに話しかけると再びショーケースへと視線を戻す。この時間の担当となった哀れな店員はクリスマス期間に突如現れた、異形のお客に涙を流している。

「おねーさんおねーさん、お勧めは何ですかー？」

「へ・・・は、はい！」

それでも、お勧めを聞かれれば答えなければいけないのは店員としての性か・・・。早く買って帰って欲しいという狙いはあるとしても。

「ふむぅ、どーしよっかなー」

だがしかし、お勧めが簡単に聞き入れられるとは限らず、またケースへ目を向ける少女。店員に幸あれ。

「エウナさんは何が好きかなー」

□　□　□　□

「どうしました？」

一歩も動けないまま数分が過ぎ、時間だけがじりじりと私を急かしている予感がする。それでも、何とか振り上げた右手は空を切り、空しくテーブルの上へと落下する。まさか・・・そんな・・・！

「・・・エウナさん？其処まで開くのが嫌ですか？」

呆れた顔でアリスが言った。目の前には「たのしいまどうしょ？」と書かれた本。だ、だってコレ、？って事は？もあるんでしょう？それどころか？だけならまだいいけれど、？もある可能性がある！

「はぁ・・・きょーも本は使わずに行きますか？」

「はーい」

かくして忌々しい本はテーブルの隅へと追いやられ、代わりに湯気を上げている紅茶が置かれることになった。アリスの視線が多少痛いけれど、時には些細なことを気にしない器量も大事だって幽霊が言ってた。

「それじゃ、今日は魔術師の弱点についてです」

「弱点？」

魔術師の弱点って言うと・・・打撃戦とか肉体言語とか？魔法が使えないなら、殴ればいいじゃない。とそんなに偉くない人も言ったらしいし。ちなみに件の人物は数日後、人は・・・誰かになれる！という言葉を残して謎の失踪をしたとか何とか。

そんな馬鹿なことを考えていると、アリスはうむうむと頷いて進めた。

「基本的に・・・というか理屈的には魔法で出来ないことはありません。理屈上・・・というより極論では、神殺しでも転生でも何でも出来るのが魔法です。ですが、そんな魔法にも弱点があります」

「ふむ？」

聞いてるだけなら何でも出来る訳だから、穴は無い。呪わば穴二つって言うのは弱点にならないでしょうし。神殺しをする意味があるのかはわからないけど。

「まず１つ目として、素質が大きく関わるので安定感がありません。人それぞれで向き不向きがあるので、同じ事をしても結果にばらつきが出ます。

２つ目として、使う魔法によっては媒介が必要となること。簡単に言えば、水が無いのに水を扱う魔法は使えないですし、土が無いのに土を使う魔法は使えません。まぁ、扱う上での条件ですね。

最後に、奇襲にとても弱いこと」
「・・・普通、奇襲に強い奴なんてほぼ居ないと思うのだけど？」
突然襲われるのと正面から堂々と襲われるの、どっちが楽かなんて言うまでも無い。
「そうですね。ですが、魔術師の場合は特に弱いんです。さっき魔法には条件が必要だって言いましたよね？つまり、魔法を扱う側はそれなりの準備をする必要があるんです。なので奇襲されると、準備不足のまま戦うことになるので不利になります。もちろん、魔術師側もある程度の対策はしてますが・・・事前に仕込んでいるもの程度しか使えないので、奇襲された側は相当きつい戦いになります」
「ちょ、ちょっと待って、仕込んでるものって何？」
記憶違いじゃなければ初耳なんだけど・・・あれ？もしかして説明されてた？
「ああ、ソレはまだお話してませんでしたね・・・コレは実際に見た方が早いですかー」
私が密かに安堵している中、彼女は何処か嬉しそうに言うと服のポケットをごそごそと漁り始めた。
「さてさて、種も仕掛けも無いことを確認してください。いやまぁ、実際に種も仕掛けも無かったら元も子もないので、きちんとあるんですが」
そして渡されたのは折りたたまれた真っ白い長方形の紙。大きさは手のひらくらい。折ってあるとしても、そこまで大きい紙じゃない。広げてみるとただ一文字、火とだけ書いてある。なるほど、種

も仕掛けもありそうね。
そんなに見るものも無いし、ある程度見てからアリスへと返すと、彼女は悪戯をするような顔で笑っている。
「・・・コレが何？」
「よーく見ててくださいねー」

そして、彼女は人差し指と中指の間に紙を挟むと、少しだけ目を細めた。
次の瞬間、ボウッと紙から火柱が昇って部屋の中を一瞬だけ明るくすると、燃え尽きた。ついでに、前のめりになって見てた私の腰も抜けそうになる。気合で堪えたけど。
「コレが仕込みです。つまり手品みたいなものですね。エウナさんだって、やり方さえわかれば似たことは出来ますよ」
「へ、へぇ・・・そ、それは素敵ね」
「はい！ということでエウナさんに実践して貰いましょー」

アリスは再び懐から紙を出しながら楽しそうに言ってくる。
・・・え？

「私が？やるの？今のを？」
「エウナさんが、やるんです、今のを」
「じょ、冗談よね？」
「冗談じゃないです」

いや、だって天井とか焦げてるし。もし失敗したら火達磨でリアルファイアーマンじゃない？マンじゃないけど。
「まぁまぁ、きちんと教えてあげますから」

そ、そんな嬉しそうな顔で言われても説得力無いですアリスさん。
「しっかり持ってくださいね。落としたら大変なことになりますから」
「え、ええ・・・」
恐る恐る紙を指の間に挟む。と、突然燃え上がったりしないわよね？
「それじゃ、目を閉じてください」
「め、目を閉じるの？」
「はい、そのほうがやりやすいので」
目を閉じると、当然ながら真っ暗闇が出迎えてくれる。もしやりやすい、の意味が違ってたら刺されそう。
「私の声だけを聞いてください・・・いいですね？あなたの前には1枚の紙が見えます」
暗闇の中、懐かしさを感じる声が聞こえる。そして、先ほどまで目の前にあった白い紙が見えた。
「その紙は最初は何の変哲も無いですが、意識を集中させると段々と燃え上がってきます・・・」
声が聞こえてくると、パチパチと紙が燃え上がっていく。
「はい、目を開けてください」
「・・・コレは」

言われた通りに目を開けると、白い紙がパチパチと燃えているのが見える。と、いうか。先のほうでパチパチと燃える火は段々と下へと下りて、私の指を焦がそうと迫ってくる。

「熱！ちょっと！コレ熱いんだけど！」
「当然じゃないですか、燃えてるんですからー」
「いやそうじゃなくて！火！火どうやって消すの！？」
「普通に離してください」

言われたとおりに離すと、アリスが落ちていく紙を摘んで灰にした。

「きちんとできましたね」
「・・・」

こいつ・・・。
楽しそうな顔のアリスを視線で呪うべく睨む。

「まぁまぁ、そんな怖い顔しないでください。コレが仕込みです。事前に準備をしておいて、必要なときに発動するんですね。見ての通り、一度きりしか使えません」
「事前に言ってくれればよかったのに・・・」

この恨み・・・晴らさずにいるべきか・・・。

「ま、まぁ今日はここまでにしておきましょう。私も結構忙しい身ですからね」

尚も恨みの視線を送り続けていると、彼女はそそくさとソファから離れて、奥にある作業机へと向かった。
しばらくの間、ごそごそと何かしているアリスのことを睨んでいたけど、その細い肩を見ていたらふと名案が浮かんだので立ち上がる。抜き足差し足、忍び足・・・。

「・・・？エウナさんどうかしました・・・ひゃうっ！？やっやめ・・・」
「ふっふっふー、良いではないか良いではないかー」
「んっ・・・エウナさんなんでそんな上手・・・ひぅっ」
「こんなに硬くして・・・気持ちいいんでしょう？」

もみもみとアリスの肩を優しく揉むと、嬌声を堪えるかの様に唇を噛み始めた。よろしい、ならばその根性、私が砕いて見せよう。それにしても硬い・・・頑固親父の頭くらい硬い。疲れてるのかしらね？

「・・・んっ・・・ひっ・・・」

時折堪えられないような声が部屋に響く。何だろう・・・ものすごい背徳感がある・・・。ま、まぁ疾しいことはしてないし、大丈夫よね？・・・ね！？
そのとき、部屋の中で何かが割れる音がして、部屋の空気が凍りついた。音のほうを見れば、砕けたカップにお盆、赤いコートと巫女服の裾。
ゆっくりと視線を上げれば、凹凸が少ない自己主張の無い身体。身体の上の頭には半笑いのままで光を失った瞳が二つ。あらやだ、めっさ怖い。

「ちょっ・・・ちょっとまっ・・・！」

彼女は私と目があった瞬間身を翻し、ドアを閉めた。部屋の中で無情にも入り口が閉じる音が響く。

「えーと・・・追った方がいいんじゃないですか？」

「そ、そうよね！」

凍りついた時間がアリスの言葉で溶かされたので、慌ててドアまで駆け寄る。そのまま間髪入れずにノブに手を掛けると・・・。

私の手がドアの中に沈み込んだ。

「え？」

そのまま、ずぶずぶと手首辺りまで飲まれていく。包まれている右手は何処か生暖かく、異物を押し返そうと力を込めてくる。まるで、肉の塊に手を無理やり突っ込んでいる様な感覚。

やがて、それも限界を迎えてたのか・・私の右手がはじけた。

何が起こったのかわからない間に弾け飛んだ肉片はべしゃっ、と音を立てて私のドレスと床を赤く色付ける。

「封印術・・・ですか」

ポツリとアリスが呟く声が聞こえる。・・・封印術？

とりあえず右手の事は置いておいて聞くことにする。

「封印術？結界じゃなくて？」

「大まかには一緒ですが、厳密には違うらしいです。結界は中のモノを守るためのもの、封印は中のモノを出さないためのもの」

「・・・？一緒じゃないの？」

「んーと・・・私も伝聞とか本で読んだ程度なので、詳しいことは

わからないんです。違いは・・・試してみたほうが早いですか」

そう言うと、アリスの近くに火球が１つ浮かんだ。

「離れててください」

言われたとおりに離れると、火球が一直線にドアへと突っ込んだ。けれど、そのまま爆発するものかと思った火球はずぶずぶと飲み込まれると、そのまま跳ね返って窓のほうへと向かっていき、そこでまた飲み込まれる。

何度も何度も、爆発することもなく火球は速度だけを上げてドアと窓の間の往復を続ける。

「今はある程度広いところだから何の被害も無いですが、もしも狭かったら・・・自爆することになりますね」

往復を続けていた火球は、突如見えない壁に包まれた様にして爆発する。四角い炎が宙に浮く。今のが結界か。

「・・・そうですね、付け加えるなら、結界は中のモノを守るのが目的で、外からも中からも攻撃に強いです。ですが、封印は中にあるモノに何があっても、中にあるもモノがどうなっても出さないことが目的みたいです」

「対処法は？」

一応聞いてみると、ふるふると首を横に振った。

「外からなら簡単に壊せるらしいんですけど・・・さっきの様子を見た感じだと中からじゃ・・・」

「そう・・・」

「それにしても・・・」

封印術なんてとうの昔に廃れて無くなったはずなんですけどねー？

アリスは不思議そうに首をかしげながらドアを眺めている。

弾けた肉片は元に戻ることも、灰となることもせずにその場で蠢いている。そのせいか、右手の治りがやけに遅い。どうなっても出さない・・・か。

□　□　□　□

「ごほっげほっ・・・」

部屋の中で肉が飛び散る音がすると、少女は蹲って激しく咳をした。咳が収まった後も、身体はふらふらと落ち着かず呼吸は荒い。

「ユ・・・メ・・・？」

少女は誰も居ない廊下で不思議そうに呟くと、ふらふらと外へと出て行く。今、彼女を追うものは何も居ない。

□　□　□　□

「そういえばさ」

「んー？何ですか？」

正直何もすることが無いので、ドアへと消しゴムを放り投げると

ソファにうな垂れる。ドアは消しゴムで少しへこむと、そのまま飲み込んで数秒前まで消しゴムだった何かを吐き出した。
こちらから何もしない限り害は無いようだし、かといって出れるわけでもない。そもそも片手はまだ治ってない。つまり話すくらいしかすることが無い。

「今日は媒介？だかの話だったじゃない？」
「はい、そうですけど？」
「ふと思い出したんだけど、さっきあなた媒介どころか何も無い場所から火出してたわよね？」
「ああ、ソレですか。何事にも例外あり、ですよ」

アリスはくすりと笑うと片手を動かす。すると何も無い空間から出てくる火の玉。

「媒介の概念は高位の魔術師までいくと無視出来るんですよ。まぁー、さすがに水も無い場所で水を出したりするのは無理らしいですが・・・少しの水で大量の水にすることは可能らしいです。まぁ、私は簡単に出来ますけど意外と出来る人は居ないんですよ？」
「ふーん・・・ソレはまた便利な」

それにしても高位の魔術師ねー・・・。
お手玉の様にして火の玉で遊んでいるアリスを眺める。見た目は子供、中身は知らない。どう見てもそんなすごい人には見えない。というか、他の比較対象があの子しか居ない。
アレはアレで魔法使ってるところほとんど見たこと無いのよねー。

「・・・不信な目ですね。コレでもその道では有名な魔術師なんですよ？」
「有名なの？」

「はい！」
「この前プリン食べられたと思って怒ってたのに？」
「・・・はい」
「実はそのプリンは自分で食べてたのを忘れただけだった事に後で気付いて平謝りしたのに？」
「はい・・・」
「それでも食べたくて楓とミツキから半分ずつ貰ってたのに？」
「そういえば、あの時エウナさんだけはくれませんでしたね」
「・・・トコロデ今何時カシラネー」

風向きが怪しかったので、強引に切り上げて立ち上がる。風を読め、と誰かが言っていた。背中に感じる白い視線を気のせいだと割り切って振り子時計へと向かうと、ソレは物言わぬ沈黙を保っている。

「・・・止まってますか？」
「・・・止まってるわね」

カチコチと安らぎの時間を告げてくれる癒しアイテムは、冷たい現実を突きつけてくる。一応振り子を揺らしてみるも、中で何かが壊れてるのか効果なし。

「そういえば、伝説に時の魔術師って呼ばれてた人が居たんですよ。あ、エウナさん立ったならストーブ強めてください」
「へぇ・・・伝説にねぇ・・・。寒いの？」

中、となっているストーブのスイッチを見ながら答える。スイッチは弱中強の他、何故か最強やら凶とか最凶とかある。ドレにすれば良いんだろう。
少し考えた結果、最凶辺りに合わせてみると、すごい音を立てて

赤くなり始めた。

「上げたわよ」

「ありがとうございます。何でも何時まで経っても姿かたちが変わらなく、自分を殺せたら願いを叶えるとかのたまって歩いていたとか。歳も考えずに不思議な世界に迷い込んだ旅人、とか名乗っていたから・・・通り名はアリス・イン・ワンダーランド。そのせいで変な伝説も出来ました」

「・・・あなたと一緒じゃない」

「私が二代目を襲名する事になったんです・・・哀しい事に・・・」

「ソレは・・・ご愁傷様」

襲名すると何が変わるのか判らないけど、色々苦労でもあるんでしょう。たぶん・・・。

「それでこれからが本題なんですが・・・なんとその人、赤いコートを着て魔法使いと名乗っていたとか」

赤いコートで魔法使いねー・・・赤いコートに魔法使い・・・。あれおかしいわね。身近な奴に心当たりが一人居るんだけれど。

「・・・冗談でしょう？」

「・・・伝説です」

「ま、まぁ深く考えないほうがいいわね。ところでその話、まるで後付みた「それ以上いけない」」

真剣な顔のアリスが私の言葉を遮ったので黙る。

「あ、そういえば知ってますか？桜なんかの木にも花言葉ってあるんですよ」

「そうなの？」

アレは・・・一応花って呼べるの？

「はい、桜なら優れた美人や純潔。松なら不老長寿や同情何かになります」

「へー・・・」

相変わらず変なことは知ってるのね。ところで、松の花って何。

「あ、それなら楓にも花言葉ってあるの？」

「ありますよー。それは確か・・・」

どさり、と何かの倒れる音がした。

「・・・アリス！？」

「あ・・・れ？」

不思議そうにしている彼女を抱きかかえると、身体はとても冷たい。どこかで感じた冷たさ。

『ずっと、殺したいと思っていたんですよ』

その場に私は居なかったはずなのに、あの子の声が聴こえてくる。今のは・・・？いや、今はそんなことより・・・。

そうね、何もしなければ害は無い、あの子に限ってそんな甘い事があるわけ無いか。

「エウ・・・ナ・・・さん？」

ソファにアリスを寝かせると、ドアの前へと立つ。
覚悟を決めて右拳を叩き込むと、めり込むような手ごたえ。弾かれる前にすぐに肩を回転させて同じ場所へ左手を叩き込む。
ひたすら、ただ速度と威力だけを求めてドアへと拳を叩き込む。骨が折れては繋がる感覚が、何処か懐かしい。
拳を叩き込む。
血が飛び散った。
構わず叩き込む。
骨が砕けた。
気にせずに殴る。
肉が弾ける。
けれども効果はあるのか、片手が完全にダメになってきた辺りで手ごたえが硬くなってくる。伸びていたゴムが段々と弾力をなくしていく手ごたえ。時間が経った肉が、硬くなっていく感覚。後・・・少しだけど・・・きついか。

「・・・エウ・・・ナさん・・・代わ・・・ります」

骨がむき出しになり、手がグニャグニャになってきた辺りで後ろから声が聞こえてきた。そして私の隣に並ぶ竜。

「平気？」
「一人だけ・・・寝てるわけにも・・・行かない・・・ですから」
「そう・・・それじゃお願い」
「そんなに・・・持たないと・・・思いますが」

私の代わりに連打を始める竜を見ながらドアから離れた。ドアの前の床と私のドレスは元が何色だったのかわからないくらいに赤黒く染め上がっている。
手の治りが遅い・・・でも、それよりも・・・アリスがどれだけ

持つか。
ソファに横たわったままでいるアリスを見ると、もうあまり動けない様子。・・・もう、持たないか。
ドアのほうでバキッと何かの砕ける音がする。

「ありがと、もう行くわ」
「だけど・・・」

両手は完治どころか何とか形を保っている程度で、コレで殴るのは無理といったところ。だけど・・・。

「平気よ」

ドアから出来る限り距離を取る。あの子が何を考えているのかわからないけれど、ソレも含めて強引に壊す。

「なんとしても、ココから出てあいつを殴らないといけないしね」

少しだけ笑うと、頭の上のお面の位置を調整して、誰も殴るものがいなくなったドア目指して走り出す。
短い距離で出来る限りの加速をしながら身体を捻る。遠い過去に思い出すのは、人の力だけで強引に結界破りをしようとした誰かの姿。あの時は跳んでいたけれど、さすがにそこまでの距離はない。
そのまま回転力と速度を乗せて足を叩き込むと、今までにない感覚。空間と一緒に自身の肉を無理やり引き裂いていく幻覚さえ覚える。
やがて、驚くほどあっさりと。
とても簡単にドアは吹き飛んだ。

「開い・・・た？」

部屋の中の冷気が外へと漏れていく感覚。ひんやりとした、静かな廊下が日常へと戻ってきたのを告げているみたい。思わず感動を噛み締たくなるけれど、ソレよりも何よりも、まずはアリスをどうにかしないと・・・。

慌てて部屋の中へと戻ってアリスを抱きかかえると、２階の彼女の部屋まで運ぶ。

ベットに寝かせて毛布を掛けた後、ストーブの火を全開にすると、何か温かいものでも持って来ようと立ち上がる。彼女の冷たい身体は生気を感じず、ぐったりとしている。

その白い服は自身の血で赤く染まっていて・・・瞳を閉じたまま浅い呼吸を繰り返す。

『「エウナさん・・・ごめんなさい」』

聴こえてきた声は幻聴か、それとも現実か。

どちらにしても、私はあの時と同じ様に軽く頭を振ると部屋から出た。

頭が・・・痛い。

□　□　□　□

誰も居ない屋敷のテラスで、赤いコートを着た少女が誰かを待つようにして蹲っている。やがて、そんな少女を包み込むようにして、空からぽつぽつと雪が降ってきた。

「・・・氷華ちゃん？」

少女は冷たくない雪に気付くと、少しだけ顔を上げて問いかけ、激しく嘔吐する。

「目を閉じて、耳を塞いで・・・知ろうとしなければずっと変わらないのに・・・」

嘔吐が納まると、少女はポツリと呟くと、まるで温もりを求めるようにコートの中へと顔を埋めた。

「世知辛い世の中・・・」

□　□　□　□

とりあえず何か温かいものでも淹れようと、頭痛を堪えつつ台所へと行けば、こぽこぽと音が聞こえてきた。中を覗き込むと水色の髪がサラサラと揺れている。

「ミツキ？」

コンロに向かって何かをしている様子のミツキへと声を掛けると、私に気付いたのか少しだけ振り向いて・・・何故か視線を戻す。・・・何？私嫌われることでもした？

密かな哀しみを胸に秘めながらも、それでもココに来た理由を実行すべく彼女の隣に立つと、ピクッと肩が少しだけ動いた。

コンロの上には火に掛けられた薬缶、テーブルには２つのカップ。コレは・・・？期待していいの？

「・・・もしかして何か作ってくれるの？」

ココで『はっ！そんなわけ無いじゃないバーカ！』とか言ったら、2度とそんなことが言えないように蹴り潰して進ぜよう。
けれどもそんな考えは無かったのか、ミツキは少しだけこくりと頷いたので、私の折れかけてる足1号の出番は無かった。まぁ・・・それならそれで。

「ついでで悪いんだけど、アリスの事もお願いできる？」

コクコク。

「そう、ありがとね」

頭を撫でると、撫でやすいように少しだけ頭を傾けるのが微笑ましい。
気が向くまで撫でてから、ぽんっと手を置いて部屋から出ようとするけど、抵抗を感じたので立ち止まる。
振り向くとミツキがドレスの裾を握り締めている。

「・・・何？」

ふるふる、と首を振られても、私には何を言ってるのかわからないわね。ええ・・・本当に。

「何も無いのなら、行く場所があるんだけど？」
「っ・・・」
「・・・」

無理に行こうとすると、抵抗が強くなる。
ねぇ、手荒な真似はしたくないの・・・言わなくてもわかるでしょう？

ミツキはそれでも何かを言おうとして、そして口を閉じる。部屋の中に薬缶のお湯の沸く音が響く。
やがてパタパタと全身を探ると、メモ帳と鉛筆を取り出して何かを書き始めた。
拘束からは逃れたのだけれど・・・無視して行くと泣かれそうなので黙って見守る。

『何しに行く？』
「平和についての意見交換でもしようかと」
『怒ってる？』
「あなたには怒ってないわよ」

けど楓は・・・あの子は、アリスを殺そうとした。ソレは、冗談で済ますわけにはいかない。

『ダメ』
「・・・」

さてさて・・・どうしよう。
目の前にはぷくーっと膨らんだまま、断として動かぬ意志を告げているミツキさん。そこまでする恩でもあるのか。
強引に振り切っていくのもいいけど、そうすると2階で寝ているAさん（仮名）が何処か遠い世界に逝ってしまう。
かといって妥協するのは・・・どうだろう。アレ？別にそれでもいいんじゃないの？
まぁ、妥協もいいか。

「わかった。わかったから行かせて、殺しに行くのは止めるから」

殴るけど。

『ダメ』
「何で！」

これ以上無い妥協案なのに他にどうしろと！？

『ケンカ　ダメ』
「・・・」

さてさて・・・どうしよう。
目の前には少し涙目になっている頑固な水色クラゲ（人型）、正直そろそろ上で瀕死になっているAさん（仮名）の命が危険な気がする。ミツキの頑固でアリスの命が危ない！

「わかった、わかったからケンカしない。だから行かせて、ね？いい子だから」
『ダメ』
「他に何が言いたいのよ！」
『殴る　ダメ』
「もうわかったから・・・行かせて」
『約束』
「はいはい、約束約束」

こくこくと満足そうに頷くのを確認すると、台所から出て外へと歩き出す。何だか・・・興が削がれたというか、そういう気分じゃ無くなった・・・。
知らない間に雪が降っていた様で、ちらちらと白い綿が当たっては消えていく。けど、冷たく感じないのは気のせい？
どうしてか、彼女の位置がわかる気がするので、自身の勘に頼って空を飛ぶ。これが一心同体って奴ね！絶対違うと思うけど。

やがて眼下に洋風の屋敷が見えてくる。もう誰も住んでいないのか、庭は雑草で埋め尽くされて、窓は割れて荒れ放題。
そして、テラスには赤い影。
「ボクを、殺しに来てくれたんですか？」
トンっと後ろに着地すると、見えてるのか、声を掛けられた。
「最初はそのつもりだったけど、謎のクラゲに涙目で止められたから無くなったわ」
「そうですか・・・」
ソレは残念です、とポツリと呟くと立ち上がる。
「で、エウナさんは何をしにきたんですか？」
「話も聞かずに居なくなるお姫様が泣いてるんじゃないかと思ってね」
「そうですか」
「・・・」
そう言うと何処か遠くのほうを見る楓。
え・・・？会話終わり？
「そ、そういえばアリスは何とかなりそうよ」
「・・・」
「・・・」
どうしよう・・・会話が・・・ない。私、ホントに何しに来たんだろ・・・？まさか本気で平和について話すわけにはいかないし。

「ねぇ、エウナさん？」
「ん、んー？」
「エウナさんは泣けますよね？」
「・・・？」

どういう意味？

「まぁ、普通に泣けるんじゃない？」

そんな機会早々ないからわからないけど。

「そう・・・ですか・・・」
「楓？」

背を向けている彼女はどんな表情をしているのか、私にはわからないけど・・・泣いてるような気がした。

「ボクね、泣けないんですよ」
「・・・どういう意味？」
「表情が作れないって訳じゃないんです。喜怒哀楽は全部出来ます。けれども・・・どうしてか泣くのだけ出来ないんですよ」
「・・・」
「でもね、それでも、眠って起きると頬が乾いてる時があるんです。おかしいですよね。起きてるときはどんなに悲しくても泣けないのに、意識が無いときは泣けるだなんて。きっと、ボクは」

あなたが死んでも泣くことは無い。
そういうと彼女はくすくすと笑った。その姿は何処か寂しそうで、何処か悲しそう。
だから私は少しでも距離を詰めようと、その背中へと近づく。・・・

・何が出来ると言うわけでもないのだけれど。

「っ！？」

突然楓は振り向くと唇を押し付けてきた。柔らかい感触と一緒に、カツッと歯がぶつかった。

「・・・」

「・・・」

無言でされるがままにされる。

さてさて、何時振りだっけ？

私がそんなことを考えいる間に、彼女は離れると胸に顔を埋めた。

「・・・愛してます」

キスと同じく、告白も突然だった。

「ボクは、あなたさえ笑ってくれるなら何があっても諦めないから・・・だから、ボクが居なくても、笑って居てくれますか？」

「・・・楓」

無理している様な笑顔を浮かべている彼女の身体は少し震えていて、その震えを止めたくて無言で抱きしめる。もう震えることがないように、気持ちが伝わるように。

「正直、私がその約束を守れるかはわからない。けど・・・」

私も愛してる。

「んっ・・・」

二度目のキスは優しく、長かった。そして離れたときにぴくぴくと楓の耳が動いてるのに気付いた。気付いてしまった。

「・・・えへへ♪」

・・・アレ？れ、冷静になったら正式に告白するのって・・・は、始めてじゃない？

自覚をすると起動する回路。頬へと上っていく熱。その場の雰囲気とはいえ、面と向かって言ったという羞恥心は絶え間なく生産されて私の腕に力を込めていく。

「にゃっ・・・！？」

い、いや・・・これまでにも好き見たいな事言ったり、キスとかはしたことあるけど・・・愛してるとかは初？初めて？昨夜はお楽しみでしたね？

「ちょっ・・・エ、エウナさん・・・力・・・つよ・・・」

何？これから毎日言わないといけないの？甘い生活？家族計画！？正直ソレはどうかと思うの！？で、でも一応言葉にしないと伝わらないというか・・・。

「もう・・・む・・・り・・・」

ふと見ると、私の腕の中で楓がぐったりとしている。・・・羞恥死？この子にもそんなものがあったのね。

ん・・・？これは大変！こんなチャン・・・いや、夜中に長時間

居たから身体がひ、冷えたのよね！？
うん、こっ告白っもしたのだし！そそそそうとなったら・・・早速べべベットに・・・。
そう決めると楓を抱えて急いで帰路に着く。帰路に着こうと思った。帰路に着きたかった。

「エウナさんごめんなさい！でも、恋人同士になったからって、いきなりソレは早すぎると思うんです！」

・・・あれ？
ここに居ないはずの誰かの声と一緒にゴンッという衝撃。私の身体は意志に反して人形の如く倒れこみ、飛び散る誰かの血。
あ・・・楓・・・守らないと・・・。
最後の力で楓の身体をしっかりと抱きしめた瞬間、首の上を冷たい線が走った感覚がしたて、私の首が飛んだ。

「ミ、ミツキさん！そ、そこまでしなくても」
「・・・」

意識が閉じる前、そんな会話が聞こえてきた気がする。

恋人になったからといって焦ってはいけません（後書き）

はい、ぎりぎり年内間に合いました

へへ・・・ほぼ徹夜で仕上げたぜ

まぁ今年も終わるわけで、私が投稿してからとっくに1年が過ぎてるわけですが！
年内コメント数1という！
しかもそれ短編のときだしね！
連載開始からは実質0！
さすがに予想外でした

まぁ、読んでいただけてる様なのでありがたい限りです
これで閲覧数一桁連打とかいったら失踪してます
というより何度か失踪しようと考えてました
話もまだ折り返し地点と言うことで！

長くだらだら続きそうですが、春には終わる予定なので
お暇な方は来年もお付き合いください

一応告白しましたしイチャイチャすることになるのかなー？
次話は・・・こっちか別の方か悩み中

ではでは、お付き合い頂きありがとうございます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1963w/

あなたは笑ってくれますか？

2011年12月30日02時45分発行